

---

# 郷屈愁の日常的な非日常

葉月陸斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

郷風愁の日常的な非日常

### 【Nコード】

N6116H

### 【作者名】

葉月陸斗

### 【あらすじ】

科学の影に隠れる形で魔術が存在する現代。郷風愁は学生としての時間を楽しみながら、裏では魔術を悪用する者を討ち、それに関連する書籍や術具、精霊や悪魔を保護・破壊する「司書」という立場を行き来していた。その姿を隠していた愁だが、ある時、幼馴染である睦月桜花にそのことがばれてしまい・・・

「日常」と「非日常」が交差するライブラリアン・ファンタジーの始まり始まり。

## 序章：言葉という名の贈り物

後悔しないようにしろ。後になって後悔しないように頑張れ。なんて言う人がいっぱいいると思う。

でもな、そんなことを言う人ははっきり言って、ただの馬鹿だ。かなり失礼な表現だけどな。

人は後悔しながら生きて、そしてそれからいろんな事を知っていくんだ。人生の中で、後悔した事のない人なんて言うのは絶対にない。人生って言うのは、後悔の連続だからな。

大切なのは後悔しないようにするんじゃない。後悔してもいいけど、そのまま進まずに後ろばかり、その時の事ばかりを見ていても駄目だ。そこから一歩進まなければいけない。前を見なければいけない。

それが本当の意味で大切なことなんだ。

だから、いいか。たとえどんなに変えたい、やり直したい過去があったとしても、そればかり見ていちゃ駄目なんだ。

振り返ることは構わない。過去は振り返るために人の頭の中にあるって、それを懐かしみ、自分の行動の原動力に変えることができるからな。

でも、見続けちゃだめだ。少しだけ、ほんの少しだけにするんだ。見続けたら、過去の思いに束縛されて・・・えっと、そう、それだけ見続けちゃいけないんだ。そうしていたら、ずっとそのことだけを引きずって生きていくようになってっちゃうからな。

強くなれ。体もそうだが、心も、な。

いつかお前が、お前を想ってくれる人を守れるようにな。

もつずいぶんと昔に父親に言われた言葉が今、俺の頭の中で波紋を討見ながら浮かび上がって来た。

何で今になって。何て思ったけど、この状況にふさわしい言葉だと理解する。

そう、強くなきゃいけなかったんだ。中途半端な強さなんて、誰かを傷つける以外の何者でもないんだ。

俺は、最低なやつだ。

空は夕焼け色。時間も黄昏時。

そんな時間のある公園。少年と少女が二人いた。

少女は傷つき倒れていて、少年はその少女を大事に抱えている。

少年は泣いていた。少女を抱えながら泣いていた。その滴は頬を流れ落ち、止まる所を知らない。

涙は止まらない。どんなに少年が泣くまいと我慢しても、それは止まらない。

その胸に宿るのは、『後悔』という言葉と、想いだけだった。

## 序章：言葉という名の贈り物（後書き）

始まりました編集。と言っても、最初の方はあんまり変わっていない気もしますが……。

一話連続です。続けてどうぞ。

## 第一章 一話：真夜中の決闘？

時刻は午後十一時二十分。空はずいぶんと前に綺麗な夜色に染められ、暗闇と静寂が支配する時間になっている。

そんな時間のある場所で、ある一人の少年 郷風愁（きょうふうしゅう）は寝癖なのか癖つ毛なのか分からないほどぼさぼさした髪に、ほんの少し眠たそうな表情をしながらある場所に立っていた。

いい加減、嫌になっちゃうな。

心の中で憎々しげに、そして疲れたように呟く。

今日はちょうど見たかったアクション物の映画が、地上波で放送されると新聞に書いてあったから楽しみにしてたのに・・・こういう時に限っていつもこういう事が起きるんだよな。やっぱり俺って何かに取り憑かれているのか？

なんて事を思って、思わず苦笑してしまう。取り憑かれている。確かにそうなのかもしれない。今までこれが当たり前前の事だと思ってきたからなんの事もなかったけど、根っこの深い所で自分は何かに取り憑かれているのかもしれない。

多分、自分はその正体を知っている。知っていて、あえてそれに取り憑かれているのかもしれない。

「あーあ。何だってこんな時間に現れるんだか」

もう面倒くさい。というような口調で言うと、愁は「自分の目の前に立っているもの」を再び観察するように見る。

そこには人の形に似た巨大な人形のようなものがある。その大き

さは成人男性二人に小学校低学年ぐらいの男の子を合わせたくらい人に似ているといってもそれは形だけであって、それは人とは程遠い。子供が粘土の工作でふざけて作った不細工な形で、その身は夜色にも似た漆黒に染まっている。顔があるであろうと思われる場所には表情が無く、そこも体と同じ漆黒に染まり、のっぺらとしている。腕は細くて長く、だらんとだらしなく下に垂らし、手はマンホールほどの大きさがある。

簡単に言ってしまうえば、化け物だ。お伽噺や小説の中にしか出てこないような、漆黒色の化け物。

そいつの目の前に、愁は平然と立っていた。

「前の奴より一回り大きい……？ あんまり大きさに差異は無いはずだけどな」

少しの驚きと戸惑いが混ざった言葉を小さく呟く。が、そんな言葉とは裏腹に、その表情には不安や恐怖といったものが無く、むしろそれを見た人が「寝不足なのか？」と疑問を持ちそうなくらい眠たそうにしていた。

「まあ兎にも角にも、早く終わらせて寝たいよ。本当に」

ブオオオオオ……

そんな場違いな言葉を言ったその時、化け物が低い唸り声を上げた。スピーカーが出す低い雑音のようなそれに愁は少し顔をしかめる。

「かなり怒ってるな。って、そういう感情から生まれたから当然か」

刹那。だらりと垂れていたはずの黒人形の右手がいつの間にか巨

大な拳を作り、愁が立っていた場所に向かってその巨大な体からは考えられないスピードで突き出される。

ドゴオオオオン！！

巨大な衝撃が地面に輝を走らせ、耳を塞ぐような音が辺りに響く。辺りに砂埃が舞い、そこだけ視界が悪くなる。

ブオオオオ・・・ブオオオオ・・・

低い唸り声。だが、先程とは少し違い、まるで何かを成し遂げた喚起の声を上げているよう。

「・・・打撃の速度も上がっている。能力も全体的に上がっているのか。普通だったら、あんまり無い事なんだけどな」

愁の声。ただし、その声は今しがた拳が振り落とされた場所からではない。

砂埃が晴れる。そこにあるのは化け物の黒く細長い右腕と、その右腕によってへこまされた舗装されてある道。それだけ。愁の姿は何処にもない。

「でも、だからって俺がすることに変わりなし」

声がる場所は、そこから少し後ろに離れた所から発せられたものだった。そこで愁は最初からずっとここにいたかのように立っていた。

「しかたない、か」

そう言うとその巨体に向けて左腕を突き出す。いつの間にか、その手には竹刀袋に入れられた「何か」が握られていた。

無造作に結ばれていた紐の結びを解き、中に入っていたものを取り出す。

それは、化け物と同じ漆黒に染まる鞘に入れられた、一振りの刀。柄を右手で掴み、引き抜く。

その刀身は鮮やかな鋼色で彩られており、微弱な月の光を反射しているのか、淡く輝いている。鏢は丸形の錆色で、その色褪せさがその刀の歴史を物語っているかのように思える。

愁は切っ先を相手に向けたまま何もせずその場に立っていた。じつとそれを見つめるその瞳には冷たい氷のような感情を宿しながらも、その一方では全てを包み込む女神の羽衣のような優しさを宿していた。その二つの相反する感情を表に出し、先程の眠気などといったいなんだったのかと思わせるような表情になっていた。

「さて、始めますか」

言った次の瞬間、愁は巨体に向かって走り出していた。

化け物は愁のその動きを待っていたと言わんばかりに、いつの間にか構えられていた左腕を先程と同じ動作で突き出す。が、動作は同じでも先ほどの打撃速度より速く、目標である愁をより正確に狙った突きだった。

「やっぱり、いくら能力が上がったからって知能まで上がるってわけじゃないか……。そこが可哀想な所だな」

嘆息にも似た愁の呟き。その呟きと同時に刀を鞘から抜刀するような構えをし、ふうっ、と息を吸い込む。

次の瞬間、愁は右に小さく跳躍する。

それは化け物の突きを紙一重でかわすか否かというものだったが、服に掠ることなくそれを避ける。

そしてその突き出された腕には、いつの間に刀の切っ先が食い込まれていた。

「ごめんな」

愁は詫びの言葉を言うと、そのまま流れに任せて黒人形の腕を切り裂く。剣の達人が刀で紙を切るように、それはスパツ、と綺麗に切断される。そこから血が噴き出ることではなく、代わりに黒い霧が霧散するように噴き出す。

ブオオオオオオ！！

化け物の苦悶。が、愁はそれに怯むことなく刀の刃を返し、目前にある巨体に切り込む。それと同時に黒い霧が視界を塞ぐかのように噴き出したが、愁にとつてそれは無意味だった。

更に切り込み、また切り込み、切り込む。

その時、右側から化け物の右腕が迫る。が、それも予想していたのか、愁は特に驚きも焦りもせず、その場で大きく跳躍する。普通の人間ならまずできないような高さを軽々と飛んでみせると、刀を上段に構え、そのまま降下の力を加えた一閃を叩き込む。

バサツ！という音と共に、化け物は真つ二つに引き裂かれた。その巨体は一瞬、硬直したように動かなくなったが、切りつけたときと同じように全体が黒い霧となり霧散した。まるで最初から存在していなかったかのように、痕跡すら残さず、綺麗に。

ふうっ、と一息ついたのも束の間。後ろから新たな気配が生まれ、反射的に振り向く。

そこにいたのは、今し方倒した奴と同じ姿形をした化け物が数体、地面から生えるようにして現れる。

ブオオオオオ・・・

低い唸り声が、不協和音のアンサンブルを生み出す。それは本当に不快な音で、それを聞いている愁は今すぐにでも耳を塞いでしまいたい衝動に駆られる。

「まあでも、ここは我慢すべき時と」

言い聞かせるようにそう言うと、黒人形たちに向かって再び走り出す。右手に握られていた刀はいつの間にか鞘に戻されて左手にあった。

化け物たちは先程の奴と同じように、だが今回は複数あるその腕が愁に向かって放たれる。それは愁をしっかりと捕らえており、このまま走っていれば確実に命中する。

次の瞬間、愁の姿が消えていた。

いや、正確に言えば消えたという訳ではなく、高速で移動したためそれが残像となって消えたように見えただけなのだ。兎に角、愁は物凄い速度で近くにいた黒人形の懐に入っていた。

化け物たちはそこにいたはずの愁が消えて少なからず動揺しているように見えた。表情が無いためそれを確認することはできないが、その隙を逃さず、愁は近くにいた奴に向かって一太刀浴びせる。綺麗に断たれたそれを確認することなく、続いて傍にいる奴にも一太刀。一瞬にして二体の化け物を屠る。もはや芸術とも言えるその剣舞は正確に相手を捕らえ、確実に一体一体切り伏せていく。近くにいた化け物が愁の姿をとらえると、もはや指摘するのも面倒になって来たその手を愁に向けて突き出す。

芸の無い奴らだな

が、次の瞬間にはその考えが外れた事に。

愁に向かっていた右手が突然、ボンツと爆発した。黒い霧が噴き出す中、破裂したそれが複数の触手のようなものに変化し、愁に襲いかかる。

心の中で舌打ちすると、自分に向かってくる黒触手を刀で切り捨てていく。だが、切った所で幾ばくか経つと切り口から再生し始め元に戻る。

埒が明かない。

切るのを止めると、愁は本体を狙う事に。

右に小さく、すばやく移動し、そこから足に力を入れて一気に踏み出す。バンッ！ 斗聞こえる音を発し、相手の懐まで一気に突き進む。途中、黒触手の妨害があつたがそれも切り捨てていく。

懐に入ると、いつの間にか鞘に納めていた刀を抜刀。一閃を化け物に与える。

何もすることも出来ないまま、黒人形たちは黒い霧となつた。

「ふう。ようやく終わったか……」

小さく一息付くとその場に座り込む。

もう周りからは先程の気配を感じない。多分、ここは鎮める事が出来た。と言つても、結局の所、これもその場凌ぎしのぎにしかならない。

「普通だつたら、月に二、三回なのに……今月はこれで六回目か。いつにも増して多すぎるっての」

そう言うと、また小さく溜息をつく。

「つと。そういえば、あれを直さないとな」

向いた先にあるのは、先程化け物が愁の立っていた所をぽっかりと空けてしまった場所だつた。愁は立ち上がると、その場所まで行き被害のほどを確かめる。

「うわっ。これは何と言うか……こんなまとも食らつたら安らかに旅立てそうにもないな」

呆れ半分驚き半分といった顔をして言うと、指をパチンと鳴らす。すると、地面に青色を帯びた幾何学模様きかがくな物が現れ、ほんの数秒の後、一瞬だけ強く光ると消え去り、地面に空いていた穴も消え去っていた。

「よしと。まあこんなもんだろ」

うんと頷くと、ポケットから携帯電話取り出し何処かに掛ける。数秒したのち相手先が出たのか、愁の表情にちよつとした達成感のようなものが浮かび上がる。

「あ、もしもし冬実さん？ 愁です。さっき電話で言ってきた奴ですけど、今ちようど鎮め終わりました。なんか前のよりも大きかったですけど問題無いです。はい……はい、了解です。じゃあ、また明日」

短い会話を終えて電話を切ると、ふうつと一息ついて空を見上げる。

所々、小さな星たちが輝いている。まるでその星一つ一つがこの世に存在している人の数だけ存在しているかのよう。まるでその星の輝き一つ一つが、この世に存在している人の命の輝きを現しているかのよう。

「なんて。俺は詩人か、つての」

自嘲を宿した笑み。だがそれも一瞬のうちで、すぐにそれを消すとさつき放り投げていた竹刀袋を拾い上げ刀をしまう。

そのまま何も言の葉を発することなく、ただ黙って歩き始めた。



## 第一章 一話：真夜中の決闘？（後書き）

ちよこつと戦闘の方を変えました。前と比べていかがだったでしょうか？

作品の閲覧形式も変更したのでちよつとごちやごちやしています  
が何とか直していきます。

感想、指摘などを出来ればお願いします。

## 二話：郷風家の朝

人はそれぞれ、苦手な事という物が必ずある。それは朝の起床に  
関してもそうだろう。朝起きる人が得意な人もいれば不得意な人も  
いる。目覚まし時計を必要とする人と必要としない人がいる。

ジリリリリリ！

「・・・・・・・・」

目覚まし時計の音が部屋中に響き渡る。今時珍しい金属音型で、  
結構な音量を出している。どんなに朝が苦手な人でもこれを聞いた  
ら一発で目が覚めてしまう。そんな歌い文句を聞いても可笑しいと  
思わないほどの音が響いている。

この音を聞いたら目が覚めそうなものだが、この部屋の主 愁  
はそれでも起きなかった。起きるところか身動き一つせず、枕に顔  
を埋めたまま死に絶えたようにぐっすりと寝ていた。

先程の分類において、愁は後者 朝が苦手であり、目覚まし時  
計愛用者である。

が、肝心の本人が起きないようでは目覚まし時計が哀れに思えて  
くる。こんなにも懸命に主人を起こそうとしているのに、当の本人  
は眠りこけている。

ジリリリリリ！

「・・・・・・・・」

昨夜、あれからどこにも寄らず真っ直ぐ家に戻ると風呂にも入ら  
ないままこの部屋に戻り、ちよつど洗濯したてのシーツや薄手の毛

布があるベッドにダイブしてそのまま眠ってしまったという訳である。

ジリリリリリリ！

「……………」

起きない。

ジリリリリリリ！

「……………」

まだ起きない。

ジリリリリリリ！

まだまだ起きない。

ジリリリリリリ！

まだまだまだ起きない。

ジリリリリリカチリ。

「うーん……………」

音が鳴り始めてから約三十秒。ようやく愁は眠そんな声を上げながら目を覚まし、焦点があっていない寝ぼけ眼で時計を見る。が、そんな目で見えた所で今何時かなんて分からず、それによってまだ大

丈夫だという根拠のない自信を持ってしまい、

「……………まだいいか」

……………  
と言つて再び枕に顔を埋め、再び夢の中へと飛び立って行った・  
……………

先程起床から幾ばくか経つた頃、今度は自然と目を覚ました愁。

「……………いま何時かな」

これだけ寝ておきながら、未だに寝ぼけ眼な目をこすりながら時間を確認しようとしたその時。

バタンツ！ という大きな音と共に部屋のドアが開かれる。

一体何事かと、思考回路が十分に働いていない頭を何とかそつちの方へと向かせると、何でそつちを向いてしまったのだろうかとすぐに後悔した。

そこには、体の周りに血を連想させる赤色に染まった可視できるオーラを纏い、仁王立ちしている一人の女性がいた。そのオーラは見たまんま「怒り」という言葉を宿しており、だんだんと強く、色濃くなつていくような気がしてならない。

そんな比喩的表現を除いて簡単に言つてしまえば、かなり危険な状態だった。

「おはよー愁。今日も爽やかな朝ね」

表情は穏やかだが眼が全然笑っていない。更に言葉には怒りの感情を隠すことなくそのまま宿している。その一言を聞いただけで、愁の思考が完全に覚醒した。

「あ、絢姉……おはようございます」

思わず丁寧語になる愁。

「ところで、今いったい何時なのかあんたは分かっているのかしら？」

愁の姉である絢香あやかに言われて時計の方をチラリと見る。そして心の中で「うわっ……」と、恐怖と後悔が混ざった言葉を呟く。時刻はただ今、八時ちょうど。自宅から自転車で二十分かけて通学している愁にとって最悪の時間となっていた。

「まったく、あんたって奴は……」

先程と違う低く唸るような声。それは昨晚倒した化け物の唸り声を連想させた。

絢香の方を見てみると、体をわなわなと震わせている。綺麗に整えられている黒青色の長髪がそのうちボワツ、と上がってしまうのではないかと思ってしまうほどの迫力があつた。

ヤバイ。明らかに危険だ。

本能で感じ取ったそれが自身に当たる前に何とか説得しようと試みる。

「あ、絢姉。これには深い事情があつて」

「……なに？ それは」

ほんの少し。ごく微々たるものだが絢香が放つオーラが少し和らいだかのように見えた。愁はこの期を逃すまいと、寝坊した理由を説明し始める。

「いやさ、昨日突然電話が来てさ。出てみたら冬実さんだったんだよ。『急に想影が現れたからお願いします』って言われたから夜遅くに行つてた訳ですよ」

「……つまり、そのせいで寝坊したからしょうがない、と」  
「？」

「えっと……その通りです」

ふつむ、と思索顔になる絢香を見て、これはいけるか、いけないかなどと考えている間にも時間は過ぎていく。自分の都合の良いようにならないのが時間であり、都合の良いようになるのも時間である。

思索が終わつたのか、絢香が愁の方を向いてにっこりと笑いかける。

うまくいったか。愁は一瞬そう思った。

「確かに、『あれ』の仕事は大変だけど、そこは分かってやっている事でしょ？ よって、」

が、物事というものは常にうまくいくとは限らないものである。

「判決の結果、被告人は有罪判決。執行猶予なし。よってこの場にて肅清する！」

その言葉と共に放たれた絢香の拳が、愁の脳天にクリーンヒットする。

軌道は見えたし、避けることも可能だった。だが、未だに寝ぼけていた思考のせいで「避ける」という動作そのものを考える事が出来なかったただけである。

「痛つつ……まだ痛む」

「はははっ。朝からついてないな〜愁」

一階にある居間で、父親の俊瑛しゅんえいが朗らかな笑みを浮かべながら、さっきの出来事で被害を受けた愁を労う。

愁と同じ黒色で少し短めに切られた髪。その笑みからは純粹で真つすぐな何かを感じさせる。その予想は当たっており、人当たりが良く、近所の子供たちからやたらと慕われている。前に、愁が学校帰りにいつも通る公園で、子供たちに交じってサッカーをして遊んでいたのだ。まるで子供みたいに無邪気にはしゃぎながら。

それを見た時、本当に自分より年上なのだろうかと本気で考えてしまった。

「ほんと、姉は容赦ないよな……」

「まあ、あれでもお前の事を心配してるんじゃないか？ 一種の愛情表現、ってやつだと思うけどな」

「その愛情表現が弟の頭を殴る事？」

「けっこつ痛い愛情だな」

因みに絢香は愁を殴りつけた後すぐ仕事に出かけている。愁はあまりよく知らないが、結構名が知られている大学の研究機関で働き、

その道では名前を知らない人がいないとかどうとか。

愁は絢香が何を研究しているのか知らないが、大学時代の絢香が考古学を専攻していたので、多分それ関連だろうとは思っている。

「まあ、今回はお前がいけないんだし、仕方ないと思うしかないな」  
「そうだけどさ……。って、そういえば何で絢姉が来る前に起こしてくれなかったんだ？ そっちの方が穏便になったってものなの」

そう言ってみると俊瑛はにっこりと笑って、

「俺と眞由莉も、今起きたばかりだからだ」

と言い返される。

これもやはり遺伝なのだろうか。愁と俊瑛の両二名は朝がめっぼう弱い。が、起きるのが弱いというだけで結構早めに起きてはいる。起きてはいるのだが、睡魔に勝てずに二度寝する。これがお決まりになっていた。が、

「母さんも寝坊？ 珍しいね」

「ああ。昨日は遅くまで起きてたからな。流石にそれで早く起きろとは言えないだろ」

「そっか……なら仕方ない、か」

結局、素直に諦める事に。

こんなのにびりと会話をしているが、本来ならこんなのにびりとはしていられない時間である。が、そこは郷風愁。すでに遅刻と言う事は分かりきっているのだから、だったら今さら急いだところで結果は変わらないと、こうしてのにびりと朝食をとっているのである。

「でも、あんなに威力のあるパンチを出さなくてもいいのに……」  
「まあまあ、俊瑛さんが言うように今回は愁さんがいけませんよ。それより、いくら遅刻と分かっていてももう少し急いでください。あなたも、早く食べてお店の準備をしなきゃ」

穏やかな声で言うのは母親の眞由莉まゆりはまるでどこかのお嬢様ではないかと思わせる風格を身に纏っている。絢香と同じ黒青色の長髪で顔立ちも大変整っているが、あの子供にしてこの親ありとでも言うのだろうか。

眞由莉も絢香と同じように、怒るととても怖い。

愁は一度だけ、眞由莉が俊瑛に対して怒ったところを見たことがあるが、あの時の光景を思い出すだけで鳥肌が立ってしまう。

その怒ったときは、さっき言った俊瑛が仕事の時間帯に子供と遊んでいたのがばれて（俊瑛は少しだけ休憩してくると言って出て行ったが、いつの間にかそれを忘れて遊んでいたらしい）眞由莉の滅多にない怒りを買ってしまった、その日俊瑛は夜になるまでその場から起き上がらなかった。

そんなこんなで、郷凧家では暗黙のルールが存在する。絶対に、どんな理由があろうと眞由莉を怒らせてはならない、と。

「確かに……」

素直に従う愁。俊瑛も読んでいた新聞を畳んで置いて食べ始める。郷凧家の朝食は絶対に和風である。今日のメニューは焼き鮭、小松菜と豆腐の味噌汁に白米。味噌汁の良い香りが食欲をそそり、食べ始めたと思ったらあつという間に食べ終わる。

「御馳走さま、と……さて、やっぱし急いだほうがいいかな」

壁に掛けられた時計を見ると、時刻は八時三十分。今から自転車を走らせて、一時間目のロングホームルームの始めに着くといったところだろう。

「そうだ愁。あと二、三日はまだ休みなんだろう？」

「のはずだけど。あいつはそういう事に関しては五月蠅おそろいから」

「だったら、学校が終わったら店の方に来てくれないか？ ちよつとばかし忙しくなりそうなんだ」

「分かった。桜花にもそう伝えておくよ」

「ああ。頼む」

食器を片づけると二階にある自分の部屋へ戻る。今日の授業の教科書やらなんやらをリュックサックに詰めてそれを背負い、リビングに戻る。

「愁さん。お弁当忘れてくださいね」

「えっ。ああ、忘れてた」

先程の匂香からくらくらった鉄拳のせいか、愁の脳内メモリから弁当という項目が消されていた。眞由莉から青色の布で包まれた弁当を受け取るとリュックの中にそれを丁寧にしまう。

「じゃあ、行ってきます」

「はい。気をつけてくださいね」

「気をつけるよ」

玄関に行つて靴を履こうとした時、するりと下に何かが通る気配。見てみるとそこには全身真っ黒な毛を持つ猫が一匹。

「にゃー」

「おっ。シフか。そういえば今日は会ってなかったな。おはよう」

チリンと首につけた鈴が鳴る。郷皿家五人目(?)である黒猫のシフは愁にひよいと持ち上げられるとまた、にゃー、と小さく鳴く。

「いいよなー。猫には時間なんて概念は分からないんじゃないか？」  
「？」

愁の言葉に首を傾げるシフ。小動物という生き物たちは動作が全てが愛くるしい。

「っと。流石にこれ以上遅刻するのはまずいか。じゃ、行ってくるな。夕方には帰ってこいよ」

その言葉にまた、にゃー、と一鳴き。

シフを下ろすと、小さな黒猫は玄関の下にある小さなドアをくぐって出ていった。元々宝楼癖のある猫。シフもその例に洩れず、朝のこの時間から夕刻になるまで気ままに散歩をしている。時たま、他の猫たちと一緒にいる所も。

「羨ましい……………」

何て事を言うが、はあと小さく溜息をつくシフと同じように外に出る。

た。今日もまた、愁の「日常」がほんのちよっぴり、騒がしく始まっ

二話：郷屈家の朝（後書き）

昨日出すつもりが今日になってしまいました・・・。

編集ばかりでなく続きも書いていますが、やっぱりこっちを優先でやっています。

感想、指摘などがありましたらぜひ。

### 三話・幼馴染との登校（前書き）

ヒロイン登場です。この二人のやり取りをしっかりと書けるようにしたいです。

### 三話：幼馴染との登校

「おっそーい！！」

外に出た途端、またもや怒気を含んだ声が響く。今日は何故かこ  
ういう声を聞くな、と

ぼんやり考えながらその声がしたほうを見てみると、そこには意外  
な人物がいた。

「ようやく来たと思ったら……これじゃあ遅刻確定だよ」

先程の絢香と同じように仁王立ちをしながら、手を腰に当て頬を  
少し膨らませている少女が一人。一応怒っているつもりなのだろう  
が、全然迫力がなく、むしろ可愛いとさえ思ってしまう。人目に付  
く容姿をし、腰まで伸びている黒髪が日の光を受けて鮮やかに見え  
る。

「おう、か？」

そんな少女　愁の幼馴染である睦月桜花むつきあけつがが、何で今のこの時こ  
の場所にいるのか。理由が全く分からなかった。

「あらあら、駄目じゃないですか愁さん。女の子を待たせちゃ

「いや、待たせる待たせないの問題じゃないと思うんだけど……

」

いつの間にか玄関先でにこにここと微笑んでいた真由莉。「おはよ  
う桜花ちゃん」と言うと「あっ、おはようございます」と返す桜花。  
そう言えばこの二人は朝いつもこうして挨拶をしていたっけ、など

と思う。

「まあまあ。とにかく、ただでさえ遅刻なんですから、早く行った方がいいですよ」

「う、うん。じゃあ、行ってきます」

「行ってきます」

二人揃ってそう言うと、眞由莉は家の中へと戻っていった。

「さて……桜花、なんだってここにいるんだ？」

なんだかんだ逸れていた話を元に戻し、理由を聞く愁。

「なんで、つて……愁を待っていたとしか言えないけど」

「いや、それは見た感じで分かる。俺が言いたいのは、何でこんな時間になるまで待っていたのかってこと」

二人は登下校共に一緒だが、どちらかが待ち合わせの時間になっても現われなかったら先に行くというのは普通だろう。遅刻をしてまで待つ理由が分からない。

「ん……なんて言ったらいいのかな。うん……」

悩むこと数秒。桜花が出した答えは

「分かんないや」

「……」

それを聞いて一瞬呆れてしまったが、十年という長い月日を共に過ごしてきただけあり、そう言うんじゃないかということとは何とな

く分かっていった。この睦月桜花という少女はこういう少女なのだ。

「……………はあ」

その、なんとも単純難解？　とも言えるようなないような答えを聞き、愁は小さく溜息をつくと近くに止めてある自転車の方へ行き、

「早く行こう」

「へっ？」

「ここにいつまでもいたら遅刻どころじゃないからな。ほら、早く後ろに乗れよ」

呆れたような、それでもどこか温かい笑みでそう言つと、桜花も小さく微笑んだ。

「二人とも行つたのかな」

「みたい、ですね」

愁と桜花が郷風邸を後にすると、それに合わせているかのように

郷風夫妻　俊瑛と眞由莉が家から出てきた。

「何だかんだ言つても、やっぱり仲が良いな。あの二人は」

「本当に。桜花ちゃんも愁さんのお嫁さんに来てくれるなんて、嬉しい限りですね。ああいった女の子が愁さんの事を支えてくれるな

んて……あの子は幸せ者ですね」

本人たちの知らない所で二人は既に結婚確定らしい。それを聞いた俊瑛は苦笑すると、二人が走っていった方を見る。もう二人の姿は見えないが、俊瑛の目には愁の自転車の荷台に桜花が乗って走っている光景が見えたような気がした。

「それにしても、もう十年くらい経つんだよね。あの二人が出会ってから」

「そうですね。月日が流れるのは早いものです」

何となく年寄り臭い事を言った二人は互いに顔を見合わせると、ぷつ、と噴き出して小さく笑い合う。

「やれやれ。なんだか一気に年をとった気分だ」

「そうですね。何だかおかしいです」

しばらく笑っていた二人だったが、急に俊瑛が複雑そうな顔になる。

「まあ、そういう関係になるとしても、その時はやっぱり話さなきゃならないんだけどな」

嘆息にも似た呟き。ほんの少し寂しげな表情を作った俊瑛は知らず知らずの間に溜息をついていた。

「知られない、なんていう事は無理だからな」。この場合は「

そう呟くと、何処か遠い所を見るような目になる。

それは、普段の俊瑛には絶対見られないような目であり、俊瑛に

は全くもって似合わないものであった。

「大丈夫ですよ、きっと」

その眩きを打ち消すような眞由莉の声。にっこりとほほ笑むと、俊瑛の腕に自分の両腕をまわす。

「私たちもそうだったんですから。あの二人に出来ないはずありません。だから溜息は駄目ですよ？」

「……そうだな。二人なら大丈夫だな」

眞由莉の言葉に同意するように笑うと、二人は仕事場へと向かった。

「あゝあ。それにしてもこの埋め合わせはどうしてもらおうかな」  
自転車の荷台に乗る桜花の声。二人は今、いつもの通学路をのんびりと自転車で走っている。

「自分で勝手に待ってたくせに……」

「聞こえない。何を言っているのか聞こえませうん」

「何でもないよ。まったく……なんだってこうなるんだか」

本当なら急いだ方がいいのだが、「結局、今急いでも怒られるのが早くなるだけ」という両者の意見の一致により、こうしてのんび

りとしている。それに、愁たちの担任は割とそういう所は気にしない主義で、少し遅れても遅刻扱いにならない。

ギアをちょうど良い具合に設定して漕ぐ。

この自転車は愁が小遣いをやりくりしてようやく買ったマウンテンバイクであり、本来なら荷台などついていない。のだが、桜花の「これをつければ自転車通学できるね」と何所からか持ってきた荷台を抱きながら、愁に晴れやかな笑顔を向けてきたため、やむなく取り付けることになった。

基本的に愁は桜花の笑顔に弱く、大抵それを見せれば無茶な要求以外はなんでも通ってしまうのである。

「まあ、そう言うと思ったけどな」

「じゃあ、何かくれるの？ それともしてくれるの？」

「そうだな……。じゃあ、桜花の好きなミルクレープでも御馳走しようかね」

「えっ、いいの？」

「そのくらいだったらどんと来い。だな」

「うん！ それで決まり」

桜花の嬉しそうな声を聞きながら愁は一人心中でふうつと息をつく。桜花の「何かしてほしい」と言うときはミルクレープの名前を言えば解決するという、お決まりのパターンになっていた。

料理に関しては桜花のほうに断然得意なのが、ことミルクレープ、というよりもお菓子全般になると愁の方が得意で、桜花の誕生日ケーキなんかは愁のオリジナルバースデーケーキということになっている。去年なんかはイチゴをふんだんに使った特性ショートケーキを作り、桜花の舌とお腹をとて満足させた。

「えへへ、なんか楽しみだな」

「……。ケーキでそんなに喜ぶなんて。小学生かお前は」

「いいじゃん、ケーキ。誰だって甘いものを食べれば幸せな気分になれるもん」

ほんわか幸せ、といった表情になる桜花。

「その幸せな気分のせいで前回の定期テスト、どんな結果に終わったっけ？」

「うっ……」

それを見た愁の一言で泣きそうな顔になる。

「あつ、あれは愁のせいだよ！ あんなに美味しいケーキ作る愁がいけないんだよ」

「いや、それはどう考えたって擦り付けなすとしか言えないんだけど」

「そんな事ないもん！ とにかくあれは、ぜー ったいに、愁のせいなんだから」

何と言うかどうと言うか。あまりにも稚拙なやり取りをしている二人を、通り過ぎていく人たちが、ちらちらと二人を見ていた。

それもその筈であろう。なにせ、学生服を着た男女二人が自転車に乗りながら言い争いをしている。何ていう事があったら人々の目がそちらの方に向かないという事は無く。

それに気付いたのか、二人はピタリと言葉を止めると、愁は黙ってペダルを漕ぎ、桜花は黙って愁の腰を掴み荷台に座る。

しばらくすると人通りが多くなり、スーツ姿の男性や女性が生み出す人の流れがそこら中に出来ていた。愁はその流れの中を慎重に、しかし少しだけ急いでペダルを漕ぐ。

「そういえば」

不意に、愁が思い出したように言い出す。

「ん？ どうしたの？」

「ああ。親父からの伝言。今日、店の方に来てほしい、ってさ」  
「忙しいの？」

「みたい。まあでも、桜花に何も用事がなければ、だけど」

郷風夫妻は家から歩いて二、三分の場所にある喫茶店『Espe  
ラント』を経営していて、愁と桜花は学校帰りにたまに手伝つて  
いる。眞由莉が作るケーキはこの近辺では人気があり、この不景気  
の時代にも廃れずにいる。

「私は大丈夫。いつつも暇だし」

「……それはあんまり自慢できた事でもないけどな」

「むー。愁、最近なんだか私のお母さんみたいになってきているよう  
な……」

「お前がいつまでもそんなこと言ってるからだろ」

まあでも、それがお前の良い所でもあるんだけどな。

などとは口にせず、ただ心の中で呟く。

「私は私だもん。『変わらない』っていうのが私」

そう言うや否や、腰を掴んでいた桜花の手が少し強くなり、背  
中にほんの少し顔を埋める。

「……」

その温もりが恥ずかしいのか、愁はほんの少し頬を赤らめて黙る。

こつやって二人乗りで登校するなどいつものことだが、今日だけはなんだか違っているような気がしていた。

でも、別に悪い気はしなかった。むしろ、この時間がとても心地よく感じる。

永久とわに続く時間は存在しない。そう思っているものの、愁はこの時間がずっと続いてほしいと思った。

「? どうしたの、急に黙って」

「ん……いや、なんでもないよ」

「ふん」

それ以上、桜花は何も言わなかったが、きつと今思っていることは分かっているだろうと思った。

昔から、桜花には隠し事はできなかったから。

「さて、流石にこれ以上はのんびりしてられないな。ちょっと飛ばすから掴まってるよ」

「はい」

背中に感じる温もり。

それはとてもこそばゆく、とても愛おしいものだった。

ただそれが、どんなものなのかという事を、愁はよく分かっていた。なかつた。

### 三話・幼馴染との登校（後書き）

編集版です……。ちょっと二人の絡みを増やしてみました。  
これが吉と出るか凶と出るか。

## 四話：「日常」の風景

しりつりょうげつがくえん  
私立涼月学園。中高一貫制の進学校で、この辺りでは割と名が通っている。文武両道を基本とし、勉強はもちろん部活動にも力を入れており、運動部や文化部関係なく優秀な功績を持っている。

校舎は数年前に改装工事があったため新しく、設備もきちんと整っていて清潔な感じがしており、全体的に雰囲気が良い。そういったことから、この学校を受験する生徒は後を絶たず、少子化のこの時代の中でも問題なく運営が行われている。

そんな学園に、ある一つの謎が存在する。

それは学園が創設された六十年前から存在すると言われている一つの部屋のこと、その部屋の扉だけ何故か巨大で重厚な両開きの造りになっている。

一部の怪談好きの生徒の間では「冥府に繋がる扉」「地獄門」とまで言われ、実際それっぽい雰囲気醸し出していることから誰もその部屋に入ったことがなく、中がどういった構造をしているのか教師の間でも謎とされている。

「えーっと。どれにしようかな・・・」

二時間目が終わった休み時間。愁は二階にある購買に来ていた。愁と桜花が学校に着いた時にはホームルームはちょうど終わりそ

うな時だった。担任であり世界史を教えている碓氷先生は、「二人一緒に登校とは……いったいなにしてきたんだか」とクラスメイトの前で言われただけで済んだ。

今日はなんだかいつも以上に腹が食を欲しているのです、愁は財布片手に購買でパンでも買おうかと色々物色している。この学園の購買は味や品ぞろえが充実しており、近くにあるコンビニで買うよりも値段が安い。ため此処を利用する生徒は少なくない。

そんな生徒に含まれる愁も、幾つかパンを手持っていた。

メロンパンにクロワッサン。焼きそばパンにたまごサンド……などなど。朝しっかりと食べていたはずなのに、と思わせる量である。

「こんなもんでいいかな」

ようやく選び終え、レジに座っているおばちゃんの前へ。

「おばちゃん。これください、っと」

「あら愁ちゃん。こんなに買って全部食べられるの？」

「へいきへいき。それに全部一度に食べるって訳じゃないから」

「そう。ええつと、メロンパンに焼きそばパン。たまごサンドにクロワッサン。それからはちみつパンで、全部で六百円ね」

財布から小銭を出そうとして、ふと、今言われた金額に首を傾げる愁。

「六百円？ おばちゃん、パン一個分の代金が抜けてるよ」

「ああ、いいのいいの。愁ちゃんはお得意様だしね。この間なんかパン運ぶの手伝ってくれたからサービス。と言っても、一個だけだけどね」

「おおっ。それはありがたいや」

その好意に甘えることにした愁はパン四個分の代金を払い、その場を後にする。

途中、すれ違う生徒たちが愁の方をちらちらと見ているが、それに気付いているのかそうでないのか、小さく鼻歌を歌いながら自分の教室へ戻っていく。

「あつ、愁さん」

階段を上ろうとした時、誰かに呼び止められる。

振り返ってみると、別教室での授業なのか、教科書と筆記用具一式を手に持つ生徒が二人かいた。誰が声をかけてきたのかと一瞬考えたが、その中に見知った一人を見つける。

「おう、雄真か。どっか移動するの？」

「いえ、今終わって教室に戻る所です。愁さんは……聞くこと自体が野暮、みたいですね」

愁の腕の中にあるいっぱいのパンを見つめて苦笑しながら言う。

眞由莉や絢香と同じ黒青色の髪に幼げな、性別の判断がつきにくい柔和な顔立ち。一見ただけでは男か女か判断しにくい声や、来ている制服から判断して少年という事が分かる。男子にしては身長が低く、それが余計、性別を分かりにくくしている。

霧月雄真。愁が小さい頃から桜花と一緒にいる、一つ下の幼馴染であり、愁や桜花にとっては弟のような存在である。最近でも三人と他に雄真のクラスメイトと一緒に遊んだりしている。

「それにしても、お昼までまだ時間があるとはいえ凄い量ですね……  
……一人で食べるんですか？」

「そうだけど。って言うっても、幾つかは昼まで残しておくけどな。」

朝や昼すっかり食べても腹がすく日って言うのはあるもんだって

「そんなものですか」

「そんなもんだな」

何ていう会話をしていると、雄真の隣にいたクラスメイトの一人が声をかけてくる。

「こんにちは、郷風先輩」

「ん？ おお、麻野か。そついや、雄真と同じクラスだっけ？」

麻野と呼ばれた女子生徒はそう言つと、ちよつと真剣な顔になる。

「はい。あつ、そついえば先輩。明日、私と図書当番なの忘れない  
てくださいよ。たまに忘れて帰っちゃうんですから」

「あはは……善処します」

苦笑いをする愁。これではどちらが先輩なのやらどうなのやら。

その様子を見ていた雄真が尋ねる。

「えつと……お二人は知り合いだったんですか？」

「うん。図書委員で図書室の貸し出し当番が一緒なんだ。雄真くん、  
知らなかったの？」

「ええ。というか愁さん、図書委員だったんですね」

「そうなんだよ。委員会決める時について寝ちゃってたらいつの間に  
か決められてさ……。まあ、結構面白いからいいんだけど」

そんな話をしていると時間が経つのは早いもので。次の授業まで  
あと僅かとなっていた。

「つと。そろそろ戻らないと。そんじゃな、雄真に麻野」

「はい」

「せんぱい。ちゃんと明日来て下さいよ」

「分かってるって」

小さく笑うと、愁は階段を上っていった。

「大丈夫かな……」

「それについては心配ないと思いますよ。約束したら必ず守る人ですから」

苦笑しながらも、その言葉には力がこもっていた。

「そっか。雄真さんと先輩って幼馴染なんだっけ？」

「ええ。僕にとっては兄のような人ですね。昔から何かと頼りになりますから」

「ふうん」

そう言つと、麻野は愁が上がっていった階段の方を見つめ、

「……相談、してみようかな」

と、雄真には聞こえない声で呟いた。

そんなこんなでお昼休み。学生たちにとっては待ちに待った弁当の時間。午前中の授業で食を求める腹を宥める<sup>なだ</sup>時間。

教室がワイワイと喧騒に包まれる中、高等部校舎の屋上はとても静かだった。

愁は大抵、屋上で弁当を食べている。理由はいたって簡単。人がほとんど来なく静かだからだ。その理由は未だに不明だが、他の生徒たちが生み出す喧騒から離れてゆつくりと食べる事が出来る。

とはいっても一人で食べている訳ではなく、桜花や他のクラスメイトとも一緒に食べているが。

「よしっ！！ 今度の調査対象は四階にある謎の扉とその部屋にけつていー！！」

が、そんな静かな雰囲気も、この一言で崩れ去っていったが。

「随分とまたいきなり来たな」

「こういうのは突然言った方が盛り上がるものだよ、愁くん」

愁の言葉に、ふふんつと意気揚々と答える少女。

ふわふわとした藍色のショートヘアに黒赤色の眼をしたこの少女は、愁と同じクラスであり桜花とは大の仲良しの澤地葵<sup>さわちあおい</sup>である。

彼女は数多ある文化部の中でも異彩を放っている「神話・民話研究部」という部に所属している。それは文字通り、世界中にある神話や民話などを考察する部活であり、その部長を務めている（もつとも、葵以外に部員が存在しないため、自動的に部長をやる羽目になっていただけだ）。

そう言った類の話が好きな愁とは相性が合うのか、よく休み時間などにその類の話をしていたりしている。

「いきなり言うのは大いに構わないんだけどさ、そこで何故俺たちを巻き込むのかが分からないんだけど」

「えー、だって一人じゃつまないんだもん」

「だったらやらなきゃいいだけじゃ……」

「ダメダメ！ そんなことしたら私に何も残らないよ」

「自分で言っちゃ駄目だろ、そこ」

そんな不毛な会話が行われている中、桜花が首を傾げながら葵に尋ねる。

「調べるって言っても、あそこって開かないんじゃないの？ 鍵とかはどうするの？」

もはや行くことが決まっているような口ぶりだったが、一応そこはあえて黙っておいた葵。

葵は「待つてました」と言わんばかりの顔で答える

「そこは心配ご無用だよ桜花ちゃん！ 葵のシャーロック・ホームズと同じくらいの調査能力で調べた結果、あの扉は鍵が掛かってなくて年中開けっぱなしという事が分かつちゃいました！ それどころか、もう何十年もあの部屋に入った人なんていないから掃除とか整理なんかもやってないんだって」

「へえ〜そうなんだ」

純粹に感心する桜花と得意げになる葵。

「……何だってお前はそういう事しか考えられないんだろうか」

そう言ったのは愁から見て斜め右に座っている眼鏡を掛けた少年だった。

「なによ。楨人だって気にならないの？ あの扉」

「気にならない、と言えは嘘になるけど……。お前みたいになつてまで知りたいとは思わないな」

「あーっ！ お前みたいって、いま馬鹿にしたでしょ」

「よかった。そういうことは判断できるらしいな」

「むううううう！」

葵と言葉のキャッチボールをしているのは、これまた愁たちと同じクラスである東楨人<sup>あずまきひと</sup>であり、葵とは家がお隣で幼馴染というところの誰かさんたちと似たような関係である。

理知的な楨人と天真爛漫な葵は明らかに正反対の性格で、このよくなやり取りも日常茶飯事だが仲が悪い手言う訳では決してなく、毎朝二人一緒に登校してくる。そういったところも似ているこの二人とは涼月学園に入学してからの付き合いだが、二年間同じクラスになっているので互いに気兼ねなく接している。

「でも葵ちゃん。何で急にそれを調べようと思ったの？ あれは葵ちゃん向きじゃないと思っただけど」

「確かに。あれの噂って大抵、眉唾ものばかりだからな。本当に『不思議』って言う物じゃないはずだけど」

二人揃って疑問を口にする、それも想定済み、と言う顔をする。

「それがそうでもないんですよ。最近になってなんだけどね、あの扉の向こうから変な音が聞こえるようになったんだって」

「変な音？ どのくらい変な音？」

「なんかね、ひくーい音で、ぐうううううってみたい音だったって言ってたよ」

難しい顔をして音を表現する葵。

「なんか気が抜けたような音だな」

「そうだけど、あの部屋から聞こえてきた音だよ。今までそんなことなかったのに。これはもう調べるしかないでしょう！」

目を輝かせながら力説する葵に対し、小さく溜息をつく槇人。

「そうか。まあ調べたいなら頑張れ。一応、心の中では応援してるから」

「えーっ！一緒にやってくれないの！？みんなで学校忍び込んで調べてみようと思ったのに」

「俺ならまだしも、郷風たちを巻き込む理由が分からないぞ」

「だって一人じゃ怖いんだもん……」

至極簡単な理由を指先をちよんちよんと合わせながら答える葵。

それを見た槇人はまた溜息。

その様子を見ていた桜花はちょっと考える仕草をし、それが終わったのか、うんと一つ頷く。

「葵ちゃん。私も手伝うよ。なんか面白そうだしね」

言った途端。先程の悲しみは何処へやら。

「おおっ、さすが桜花ちゃん！やっぱり葵のことを一番思っているのは桜花ちゃんだけだよ」

和気藹藹わいきあいとする二人。

「愁も一緒にやろうよ。なんか面白そうだよ」

「んー俺はあんまり興味ないんだけどな……」

「だめだよ！ 愁くんは一緒に来なきゃ！」

「いまいち気乗りしない愁にビシツ！と人差し指を向けて言う葵。  
「はあ……。」と、またしても槇人から零れる溜息。

「愁くんと桜花ちゃんは一心同体の関係なんだから、こういう時は一緒にいなきゃだめなんだよ！」

「一心同体って。ただの幼馴染だぞ」

「まあまあ、それはそれで。それに、夜の学校に女の子二人だけを行かせて心配にならないの？ 危ないと思わないの？」

「む……確かにそれはそうだけど」

愁は基本的に誰かがそういう状況にいると黙ってはいられなくなる。本人は気付いていないが、そういった所がこの学校での自信の評価が上がっていることに気づいていない。

「じゃあ決まり！ 桜花ちゃんが行くんだからやっぱり愁くんも行かなくちゃ」

と、半ば強制的に参加させられた愁だったが、本当のところ少しは興味があったので悪い気はしなかった。

あの扉と部屋の噂は、愁たちが入学する前から言われているものだ。とはいっても、何となくオチが読めてしまう、そんなものばかりだけだ。

「こうなってくると槇人も来なきゃねえ」

「いつ調べるつもりなんだ？」

「えっと……今日はちょっと無理だから、明日の夜かな」

「……残念だが、明日の夜は用事があるから駄目だな。俺は行けない」

「ええ〜！ そんなのアリ？」  
「ありだ。という訳だ、郷風、睦月。この馬鹿の面倒を押しつけることになるが、よろしく頼む。本来なら俺も行きたいところだが・・・」

心の底から申し訳なさそうな顔をする槇人。

結局のところ一番心配しているんだなと、二人はそれぞれ思った。

「まあ気にするなつて。夜の学校に入るなんて物好きな奴はこの辺じゃないし、いたとしたつて何とかするから大丈夫だよ」

「うん！ 愁なら確かに何とかしちやいそうだもんね」

「できればお前も何かしてくれると助かるんだけど・・・」

「まあまあ。そこはそこつてことで」

のほほんと答える桜花を見て、呆れるような、でも穏やかな表情になる愁。

「・・・あの二人は意識してあなっているのか？」

「うん。それは違うと思うけど・・・。すごいよねえ」

そんな二人を何処か遠い目で見る葵と槇人だった。

昼食を食べ終わった後、桜花、葵、槇人の三人はそれぞれ用があったためすぐにいなくなつた。今屋上にいるのは寝転がっている愁一人だけ。

「やっぱり一人だと暇だな……」

ほかほかとした陽気が眠りを誘うが、今ここで寝たら確実に授業に遅れる自信があるのでやめておく。かといって特にすることもなく、ただ空を眺めているだけだった。

風の音が耳に伝わる。

愁はその音が好きだった。それを聞いていると、もしかしたら風の音が聞こえるかもしれないと小さい頃に思った事がある。風は永遠の旅人であり、今まで自分が見てきたものを教えてくれるかもしれない、なんてことを思っていた。そして時々、もしかしたらそうなんじゃないかと思う時がある。

「流石にそれはないな」

「そつでもないぞ、主」

不意に聞こえてきた、とても澄んでいて綺麗な女性の声。愁以外誰もいないはずの屋上で、誰かの声が一つ、愁に向けられていた。

「ん？ そりゃどういう意味だ」

その声に驚くことなく、いつも通り誰かに尋ねるように話しかける。

『風の声を本当に聞こうとする者には聞こえるものだ。本当に、だかな』

「ふーん、そつか……じゃあ俺はまだまだってことか」

『そつだな。だが、主にはいずれ聞こえるようになる。理由は簡単だ。私が認めた唯一の人物なのだからな』

「そりゃどうも。でも、いくらなんでも大袈裟だと思うけどね」

そう言って起き上がると髪をくしゃくしゃとかく。

『……………そうでもない、我も思うが』

更に別の声。今度は男性の、少し渋みがある声。

「珍しいな。お前がそんな事を言うなんて」

『我はただ、思った事を述べたまで。驚くようなことではない』

その言葉に小さく笑みを浮かべると、またごろんと寝転がる。

「風の声、か」

噛み締めるように、小さく、しかし力強く呟いた。

#### 四話：「日常」の風景（後書き）

結構変わっていると思います。ちょっと後の方に出てくる人がこんなに前から出してみました。いかがでしょうか？  
連続で編集したので、次もどうぞ。

## 五話：恋の悩みと学園探索

次の日の昼休み。愁は学園の図書室にいた。

昨日休み時間の時にあつた麻野との約束をふと思い出し、また叱られる前に急いで昼食を食べてやって来た。

とは言うものの、

「……利用者無しって言うのは、ちょっとばかり悲しいものだな」

貸し出しの受付にだらんとしながら呟く。

現在、この図書室にいるのはだらしなくしている愁と、少し奥の方で本の整理をしている麻野の二人しかいない。

「仕方ないじゃないですか。此処は年中、いつつもこんな状態なんですから」

「それは分かるけどさ……それにしたって人が来なさすぎるんじゃないか？」

「確かにそうなんですけどね。でも、別に変える必要もないと思うんですけどね」

整理を終えた麻野が小さく笑ってそう言つと、愁も「そんなもんかねえ」と疑問を口にする。

なんだってこんなに人がいないんだか……。なんて心の中で呟いてみるが、理由などと言う物はとくに分かりきっているものだった。その理由の一つとして挙げるとすれば、この図書室には現代小説など一冊もなく、古書しか扱っていない。今時、そういった類のものだけが置いてある所を利用する生徒は誰もいないだろう。だが、一番の理由は、やはりこれだろう。何と言つてもこの図書

室、今から約十年ほど昔にある事件の現場となった所なのだ。

愁がこの図書委員に入って間もない頃、たまたま図書委員長と話を  
する機会があり、その時に聞いたものなのだが、昔、此処で男子  
生徒二人が良い争いから始まった喧嘩のせいで片方の男子を殺して  
しまったらしい。それ以来、この図書室には死んだ男子生徒の霊が  
昼夜問わずうろついている、何て言う噂が流れたのだという。

しかも、殺してしまった男子生徒も、その後に行方をくらまして  
今も何処にいるのか、もう死んでいるのかさえも分かっていない。

最初はただの噂だろうと愁は思っていたが、あながちそう言った  
噂も時には事実と言う物があるんだなあ、しみじみ思っていたり  
する。

「にしても本当にいるなんてな。よっぽどこの場所に強い思いを抱  
いていたんだな」

麻野には聞こえない程度の声で呟くと、ちらりと横を見る。

そこには、色素がかなり薄い眼鏡をかけたちよつと地味な男子生  
徒の姿が。

愁の言葉に反応したのか、こくんと縦に頷く。

最初、この男子生徒の幽霊　ちよつと難しい言葉を使えば男子  
生徒の残留思念ざんりゅうしねんにいきなり会った時は驚いたものだったが、今では  
すっかり慣れてしまった。

元々、自分はそう言ったものの中で生きているのだ。驚いたと言  
つても、真昼間から出ているのに驚いたという事だけだ。

「それにしても、お前って無口だよな。なんか喋らないの？」

この少年は自分からはほとんど何も話さず、ただ無言で受付に座  
っているだけだ。別に人に移り移って悪さしたり、呪い狂わせよう  
なんて事はしない。ただただ大人しい幽霊くん。最初はどうしよう

かと悩んでいた愁だったが、彼のこの様子を見て何もしなくても大丈夫だろうと結論付けた。

それにしたって、何か一言ぐらい喋ってもよさそうなのにと毎度思うが、まあ無理に話した所でいったい何になるのだろうかと思う気持ちもあり、結局、愁が一方的に話してそれに小さく返答するという方程式が成り立っている。

「……………郷風先輩」

「まったく……………ん？ ああ、麻野か。どした？」

近くに麻野がいる事を少し忘れて少年と会話をしていた愁だったが、呼びかけられて意識をそちらの方に向ける。

「あの、ちよつと聞きたい事があるんです」

「聞きたい事？ 答えられるものだったら何でもいいけど」

珍しく歯切れの悪い彼女に首を傾げながらも、質問の内容を聞く愁。

「その、ですね。雄真くんの事なんですけど……………」

「雄真の？」

「はい……………」

途切れ途切れになりながらも、話し続ける。

「えっと、雄真くんって、好きな人がいるとかって、知ってますか？」

あまりにも突然だったが、質問の意図が読めた愁。どうやらこの少女 麻野絵里あさのえりは雄真の事が気になっているらしいという事を。

成程と愁は納得する。確かに雄真は異性から好意を持たれる事が多いだろう。文武両道で人柄も良し、更に控えめな所も好感だろう。といっても、それは彼の一面名だけなのであって、全てではないのだが。

「んー、そんなの聞いた事ないな。あいつとはそういう話はしないからな」

基本、色恋沙汰には疎い愁なので、そういった類の話をする事は滅多にない。あつたとしてもそれは相手から振られてくるものであり、決して自分から話すことは無いに等しい。そしてそれは雄真も同じであり、彼もまたそう言った事には詳しくない。

とは言う物の、愁の「疎い」と雄真の「疎い」は天と地ほどの違いがあるが。

「そうですね……。すみません、急にこんなこと聞いて」

「気にしなさんな。まあ、とりあえず一人で頑張ってみ」

「はい。ありがとうございます」

ふっきれたのか、麻野の表情は先程と違って晴れやかだった。

「さてと、もうそろそろ終わりで良いんじゃないか？ ちょうど良い時間だと思うけど」

と、時計を確認してみると、時刻は四時半を切っていた。

「本当ですね。じゃあ、終わりにしましょう」

「あ、鍵は俺が返しておくから、先に帰っていいぞ」

「えっ、いいんですか？」

「いいのいいの。たまには先輩らしいこと一つぐらいさせてくれ。」

このままだとお前が先輩みたくなっちまうからな」

「あはは。じゃあ、お言葉に甘えますね」

それじゃあ、と言って図書室を後にした。

それを見送った後、さて自分もと少し片づけを始めた時、

「……………郷風君」

不意に、受付に座っている幽霊が話しかけてきた。

「ん、どうした？ って、珍しいな。お前から話しかけてくるなんて」

「……………言っておいた方がいいと思ってね」

「何を？」

「四階にある例の扉と部屋の事について」

そう言われた途端、ぴたりと愁の動きが止まる。と言うより、辺りの時間が少しだけ止まったような気がした。

「どんなことについて？」

「……………僕はさ、別に此処だけにいる訳じゃないんだ。たまに授業中に学校の様子を見て回っているんだけど……………」

一拍置いて、言葉を繋げる。

「最近、あそこら辺がなんか変なんだ。一体なんだろうかと思って思って色々見てたんだけど、結局何にも分からなかった」

「……………変、か。それは確か？」

「うん。間違いないよ。だから、あそこに行くのはよしておいた方がいいと思うけど……………まあ、君なら何の心配もないと思う」

けどね」

小さく微笑む幽霊。その笑みには親しみが込められている。

「ふむ……情報ありがとう。まあでも、止められるもんならとつくに止めてるけどな」

「はは。それは違くないね。澤地さん、だっけ。彼女、とっても好奇心が強いんだね」

「そうなんだよ……っていつか、お前、何でその事を知ってるんだ？」

すると、幽霊は申し訳なさそうな顔になる。

「ごめん。昨日、たまには屋上にも行ってみようかなって思ったら、君たちがいたからつい」

「……成程ね。ま、別に聞かれてまずい事なんて無いけどな」

片付けが終わり、自分の鞆を持つ。

「さてと。じゃあ俺も帰るわ。っと、そうだった」

「？」

「名前。教えてくれないか？ もう一カ月経つのに、名前を知らなかった事を今思い出した。だから、名前を教えてくれ」

幽霊はびっくりしたように愁を見ていたが、やがてまた小さく笑いながら、

「……匠。毛利匠。もうりたくみ毛利元就の毛利に、師匠の匠」

幽霊 毛利匠は自分の名を言った。

さて、昼が過ぎて現在夜の時。

愁は桜花と待ち合わせをして学園の校門前に来ていた。

家を出る際、俊瑛に「こんな時間に何処に行くんだ？」と呼びとめられたが「ちよつと学校に」と正直に言つと「そつか」と一言。

それだけで難無く通してくれた。眞由莉と絢香は特に何も言わなかった。と言つのも、二人は今話題のドラマに夢中になっていたのだ。

葵との約束の時間は疾うとに過ぎており、愁は家から持ってきた文庫本を読み、桜花は特に何もせずただぼんやりと、満月が浮かぶ夜の空を見上げていた。皐月の時でありながら今日の夜は何故か冷え冷えとしており、愁にはそれが、これから何か起こるのでは、と言つ予兆のように感じていた。

「……普通、約束した奴の方が早く来ないと駄目な気がするんだけど」

「うん。でも、準備とか色々あるんじゃないの？」

「準備つて言つたつて、懐中電灯があれば十分じゃないか？他に何が必要なんだか」

「幽霊がいたときの為に捕獲装置を用意しているとか」

「それはお前、ゲームのパクリだろ。完全に」

一応つっこんだ愁だが、葵ならやりかねないんじゃないかとも思っていた。

「それにしても、なんか今日は寒いね。上に羽織る物でも持つてくれればよかったかな」

「そうだな。五月なのに何か寒いな」

二人は学校に行くという事で制服を着ており、上着などの羽織るものを何も持ってこなかった。

「うん………。ところでさ」

「ん？」

「それなに？」

と、桜花が指さした先には若葉色の竹刀袋に入れられた「何か」が立て掛けられていた。長さは七十〜八十センチくらいだろうか、形状は長い何かとしか分からなく、待ち合わせた時には愁の手に握られていた。

「ああこれか。これは竹刀だよ」

「竹刀？」

「お前、葵が言った音の正体が人間だったらどう思う？」

「えっ、そりゃあ、おかしな人だな〜って思うけど」

「だろ？ まあ、いきなり何かしてくるとは限らないけど、用心に越したことはないからな」

「ふ〜ん、そっか」

そう言うとは所か意地が悪そうに微笑む。

「なんだかんだ言っつて、愁は優しいよね」

「？ 何だいきなり」

「べっつに〜。何でもないよ」

いまいち意味が分かっていない愁は小さく首を傾げるが、ふと、どこからか自転車の走る音が聞こえてきた。だんだんとその音は大きくなり、こっちに近づいてくる。

やがて姿を現したそれは、同じ制服姿の葵だった。

「やつほ〜。葵ちゃんとうじょう〜」

「やけに遅かったな。まさか本当に捕獲装置を……」

「ほえ？ なんのこと？」

「あ、いや。こっちの話だ」

？マークを頭の上に浮かべて考えていたが、やがて愁の自転車に横付ける様に止めると、腰に手を当てて鼻をふんっ、と鳴らす。

「さて！ いよいよ調査開始だね。張り切って行くよ〜！」

「張り切りすぎて空回りしないようにな」

「わかってるよ〜。むう、なんか愁くんが槓人になったみたい……」

「」

「一応心配して言ってるんだから、素直に受け取っどけ」

「はいはい。ん、それって……竹刀？」

壁に立てかけておいて竹刀を見る葵。

「そうだけど。どうかしたのか？」

「ん〜いやさ。愁くんも結構張り切ってるんだな〜って思って」

「別にそういう訳じゃ」

と言いかけてやめる。葵に言い訳を行ったところであまり効果はない。それどころか複雑化させてしまっただけだ。そのことは一年間を通して経験済みの愁である。

「まあいいや。とりあえずさっさと終わらせよう。早く帰って寝たいし」

そう言っつて竹刀を右に持ち、左手に懐中電灯を持つと、校門に手をかけてそつと上り、むこう側へと静かに落ちる。桜花と葵もそれにならつて学校に侵入する。

「えつと、ここからはどうするの?」

「はいはい。そこは葵ちゃんにお任せつてね」

そう言つと、ついでこいと手招きする葵。

なんでも、葵が下校の際にこつそり開けておいたという多目的室の窓からこつそりと入つた三人は、目的の部屋がある四階へと続く階段を上がる。

暗いということとは予想していたが、暗いうえに学校と言う場所が関係しているのか、いつも普通に歩いている廊下でさえ不気味に感じてしまう。懐中電灯の光があるとはいえ、逆にそれさえもこの風景の一部なのではないかと思う。

「うー……やっぱり夜の学校つて怖い」

「確かに……やっぱりなんか不気味だな。学校つていう感じがしない」

「そう? 私は余計わくわくしてきたな。まるで、ラビュリントスを進むテセウスになつた気分だね」

と、緊張感のない声でギリシア神話を例えに言つ葵。

「ラビュリントスつて、クレタ島の王ミノスの妻であるパシファエが雄牛と交わつて生んだミノタウロス幽閉するために、天才的工人と言われていたダイダロスに命じて造らせた迷宮だよな」

「うん。すつごく複雑な構造で、一度中に入ると簡単に出られない  
つて、前に読んだ本に書いてあったよ」

「ああそうだな。でも、実際に脱出した奴はいるけどな」

「えっと・・・テセウスとイカロス、だっけ」

「ああ。テセウスはミノス王とパシファエの娘であるアリアドネか  
らダイダロスが作ったと言われる糸で。イカロスもまた、ダイダロ  
スが作ったと言われる蠟で固められた翼で。でも、イカロスは歌で  
も歌われているように、興奮のあまり太陽に近づきすぎて蠟の翼が  
溶けて海に落ちて死んじゃったけどな」

「親の言う事は聞いておくものなのにな」

「まったくだな。俺なんて母さんにそんなことしたら命が幾つあつ  
ても足りないっての」

と、いつの間にか学校に忍び込んでいるという事実を忘れて語り  
合っている愁と葵。

そんな二人を、桜花は横で複雑そうな表情をしてみていた。

「テセウスってひどいよね。献身的に尽くしてくれたアリアドネを  
ナクソス島に置き去りにするなんて」

「でも、アリアドネはそこでディオニソスと結婚して・・・ん  
？どうした桜花」

いつの間にか、桜花が愁の腕に抱きついていて。顔を伏せていて  
どんな表情をしているのか分からないが、何故か耳が真っ赤になっ  
ていた。

「・・・別に」

「？」

愁はいつもと違う桜花の様子に首を傾げたが、隣にいる葵は、優

しく小さく微笑んでいた。

そうしているうちに、いつの間にか目的の場所に来ていた。三人の目の前にあるのは重厚な造りをした両開きの扉。重く、ずっしりとしたそれだけで、周囲とはまったく違う場所・時間に来てしまったのではないかと錯覚してしまう。更にそれによるが生み出す暗闇が加えられ、それは取っても不気味な「何か」を発していた。

「そういえば、今さら何だけどさ」

「ん？ どつたの愁くん」

「お前が聞いた噂って、わざわざ夜の校舎に忍び込んでまでしてようやくお目にかかれるものなのか？ 別に放課後に此処に来てよかったんじゃないよ」

「えっ？」

愁の言葉に何故か驚く葵。

「お前……まさか忘れてた、なんてことはないよな」

「あ、あははは。そんなわけ、ないよ」

完全な棒読みに愁はじとーっとした目を葵に向け、向けられている本人はそれを逸らすように別の方向を見る。

「ま、まあ大丈夫だよ。ああゆうのって、やっぱり夜に出てくるイメージがあるし」

「いや、イメージとかそういう問題じゃあ」

「聞こえる」

その時。ずっと黙ったままだった桜花が、扉をまっすぐ凝視したまま言った。

「えっ？聞こえるって……桜花？」

いつの間にか扉の近くに立っていた桜花はそれを、まるで壊れ物を扱うかのように優しく、そっと触れる。

「この先に、何かいる……」

「ほんとう！？ やっぱり何かあるんだ！」

葵は桜花に抱きつくように驚き喜んでいるが、愁はその言葉を聞いて表情が一変した。

『この子は特異体質ですね。この子は　　に　　えないものや  
ものも　　で感じるはずです』

「……やっぱし、そうだったのか」

ふつっ、と溜息をつき、苦虫をかみつぶしたような顔をするがそれもほんの数秒の間だった。

「……気にしても仕方ない、か」

「愁くん、何やってるの？ 桜花ちゃん先に入っちゃったよ」

今更ながら小さくぼそぼそと言う葵。どうやら考えていたときに  
行ってしまったらしい。

愁は頷くと、葵と共に部屋に入っていった。

夜の空に浮かぶ満月が地上を照らしている。その光は微弱ながらも、強い力を秘めていると昔の人々は思っていた。

「……………」

そんな月のある場所で眺める一人の男。黒い薄手のコートを見に  
纏い、夜でありながらも月の微弱な光によって幻想的な明かりを出  
している銀髪。

そしてその表情には、感情といったものが一切なかった。

「……………綺麗だな」

そう呟いた言葉でさえも、無機質なそれに近い。

「月というものはいつ見ても綺麗だな」

違う言葉でも同じ言葉。

「……………ようやく来たな。郷風愁」

男はその場に腰を下ろす。

そこは、愁が昼に寝ていた場所　学校の屋上だった。

「今日この時。お前は这个世界の予定された運命という鎖から解放された、束縛デウス・エクス・マキナから解放されし者になった……………」

機械が喋っているような、そんな声で呟く。

「お前はどんな物語を私に見せてくれるんだ？　どんな物語を書くつもりだ？」

言い終えた途端、男の姿はそこにはなかった。

## 五話・恋の悩みと学園探索（後書き）

タイトルも少し変えてみました。内容も最初の方を付け加えたりと、結構変わっていると思います。自分的には、前のよりはましになっていると思いますが……感想、指摘など、どんどん書きちゃってください。

六話・愁が苦手とするもの。意外な結末。

どうして学校の廊下と言う物は、夜になるとこんなにも恐ろしい雰囲気を出すのだろうか。まさかこう言う雰囲気を醸し出すように設計者がそうしているのだろうかと思つてさえしてしまう。

まあ、廊下本人も出したくて出していないのかもしれないけど、とりあえず怖いものは怖い。めっちゃ怖い。

昔っから、こういう暗闇が苦手。もとい怖かった。

今もそれは変わっていないと思う。

まあ、こんなこと考えている時点で恐いと言っているようなものか……。

小さな頃　小学校低学年ぐらいの時だったか。桜花の家族と一緒に家で晩ご飯を食べた日だった。

二人ともすぐに食べ終えて退屈していた時に、親父が「これでも見るか？」と言つて一本のビデオテープを俺に差し出した。俺が何？　つて答えると、親父は「映画だ」と一言言っただけですぐに桜花の親父さんと酒を用いて語り始めた。

なんだか俺は得体の知れない「何か」を感じ取っただけど、案の定、桜花が「おもしろそ〜」。見て見ようよ」と言いだしたので俺の部屋で見る事に。

一体どんな映画なのだろうかと、ほんの少しの期待と大きな不安を胸に秘めたまま、デッキに入れて再生。

テレビ画面に流れるのは、暗闇をテーマとしたサスペンスホラー。

内容は全く覚えていない。

と言うのも、見ているうちに気絶してしまつたらしく、内容がす

っぱりと抜けてしまったから。

今思い出してみると、随分と情けない記憶である。これは俺のメモリの一番奥にしまっているから、知っている人は少ない。

気がついた時には、目の前に心配そうに俺の事を見ている桜花の顔があった。

その日から、俺はホラーの類が大の苦手となった。

そして、暗闇も。

でも、そんな事を言っている場合じゃないんだよな。今は。

俺の目の前にいるのは、一昨日鎮めた奴と同じ雰囲気を持つ化け物。

でも、大きさが半端じゃない。これは反則だろう。

まあ、そんなことは本当は関係ないんだけどな。どんな相手だろうと俺にかかれば同じようなもの……

なんていうことは、絶対に思わない。

たとえ相手が小さいだろうと大きいだろうと、強いだろうと弱いだろうとしても、絶対に気だけは抜かない。

もしそれをやったら、その時点で俺の人生に終止符が打たれるだろうな。

「なんと言うか。俺って非日常に好かれてるのかな……」

ふつつと、今日で何回目になるか分からない溜息をつくと、右手に持つ刀をしっかりと握り直す。

「さて、ちょっとばかり本気でいきますか」

そう言って、なんともまあ似あわないセリフだと自嘲する。

化け物に向けていた視線をほんの少し、後ろに向ける。

そこには、壁に寄り掛かって気を失っている葵と、力が抜けているのか、その場に座りつくして俺を見ている桜花がいた。

最初に出てきた感想は「本の匂い」だった。

葵と一緒に入ったその部屋には、本が出す独特な匂いが充満していた。新しいものじゃなく古書。しかもかなり古いものだと思われる匂いがそこにはあった。

「これは……本だね。結構古そう」

葵が懐中電灯で照らした先には、無造作に積み重ねられていた本の山が幾つもあった。その中には自分が知っているようなものもあり、それらはかなりの年代物で結構な価値がある。どうしてそんなものがこんなところに埋もれているのかと不思議に思ったけど、分からない人から見ればただの古い本に過ぎず、何十年もほったらかしにしている部屋にあるのなら当然かと、少しの疑問を残して勝手に納得した。

「あっ、桜花ちゃん」

桜花は入り口から少し入ったところに立っていた。葵が嬉しそうにぴょんつと跳ねて抱きつくが、立っているだけで無反応だった。変だなと葵が桜花の顔を見ると、その表情に困惑が生まれる。

「お、桜花ちゃん？」

どうしたのかと愁も桜花の顔をのぞく。

「……桜花？」

そこにいたのは目が虚空を漂っているような、ただぼんやりとした表情の桜花がいた。

「……いる」

「えっ？いるって、なにが？」

「……近くに、いる」

と、それを言い終えた途端、桜花の顔に生気が戻っていくような感じがした。

「……あれ？ここは……どこ？」

「あっ、桜花ちゃん！ようやく元に戻った」

「葵ちゃん……あれ？ここって……」

「どっって、あの扉の向こうの部屋だよ」

「え、そうなの？」

よく分かっているのか、少しの間おろおろとしていたが、愁と葵の説明でようやく状況を把握すると、部屋をあちこちと調べ始める。結果、ここには本、しかもかなり古く価値があるものが何冊もかさばって置いてあること。埃が積もりに積もって衛生上悪い環境

にあることしか分からなかった。

「う〜ん、なんかがっかりだな。本と埃以外何も無いなんて」

「そうか？ この本だけでもかなりの発見だと思うけどな。明日、おっきい鞆持ってきて何冊か貰っちゃおうかな・・・」

「うわ〜、愁のどろぼうだ〜」

「泥棒なんて人聞きの悪い。有効活用と言ってほしいな。どうせここには人が入らないし、誰もこんな古い本になんか興味ないと思うし」

「ふ〜ん」

まあ、こんな所だろうとは思っていたけど、まさかの収穫だったな。て言っても、いくら放って置かれていたとはいえ、勝手に学校の所有物を持ちだすのはまずいか・・・。

それに、図書室で毛利から聞いた話も気になる。

この部屋がおかしいとか言ってたけど、見た感じ本と埃しかない。変な気配も何にもない。まあ、この部屋自体が変わっているとは思うけど、それ以外に見るべきものは何もない。

あいつの勘違いだろうか？ それならそれで良いんだけど・・・。

何て事を考えている間、女性二人は何を話しているのか、もうこの場所についての興味を無くしてしまったようだ。

「それにしても、何でこんなに古書がいっぱい置いてあるんだか」

別に何でも無いように呟いたその一言が、今日ここに来た理由だったような気がしたけど、なんと言つかどうと言つか、如何せん面倒臭くなってきた。

「まあ、別にいいか」

そうと決まったら、こんな怖い所（暗いのが怖いのであってそれ以外は何ともない。本当に）はさっさと後にしようと二人に声をかける。

「おい。もう良いんじゃないか？」

「うーん、そうだね。変な音なんてならないし、期待してたほど良質なものは何にも出ないし」

「じゃあ、帰る？」

桜花が葵に尋ねると、「うーん」と唸っている。まだ何か物足りない、と言った顔をしている。

つても、他にいったい何があるんだか……

「ん？」

ふと、ある一冊の本が目にとまった。

その本だけ、周りの本と違ってタイトルが無かったからかもしれない。その本に、自分の第六感的なものが何かを感じ取ったのかもしれない。いずれにしても、その本が俺の目に止まったことは変わらない。

手に取り、表紙についている埃を払ってから開く。

それは、手書きの文章だった。書き方から見て、どうやら男のようだと分かったけど、重要なのはその内容だった。

「今日、俺は大きな罪を犯してしまった。もうどうする事も出来ない。彼に謝る事も出来ない。何にも出来ない。それに僕は逃げてきてしまった。あの図書室から逃げてきてしまった。」

最低だ。最低だ。最低だ。最低だ。

僕は愚か者だ。どうしようもない。救いようもない、愚か者だ。

彼に酷い事をしてしまった。

もう、取り返しがつかない。

だったら、彼の後を追いかけて謝らなければ。

幸か不幸か、この部屋には誰も立ち寄らない。此処で最期を迎えるというのなんだか変だけど、そんな事も言っていられない。

此処の壁を少し壊して、内側から直す。

そして、その中で……」

そおっと、辺りを見回してみる。

少しして、一か所だけ、周りの壁とは何処か違うような所を見つける。

そこに行ってみて、そおっと、壊れ物を触るように軽く撫でるように触れてみる。

……壁の材質が明らかに違う事が、素人でも分かる。

「……」

「？ 愁、どうかしたの？」

「……いや、なんでもない」

「？」

桜花が不思議そうに首を傾げたが、それ以上追及することなく葵との話に戻っていった。

「……まったく。お前さんが探している『彼』は、今でもこの学校にいるのにな」

なんだろうか、やるせなくなってきた。

まあ、あの二人には言わない方がいいだろう。

俺は今この場所この瞬間で「知らぬが仏」と言う言葉の意味と重みを理解したような気がした。

結局、この謎の部屋の正体は分からないまま（俺は偶然知ってしまったが・・・できれば知らない方が良かったのかもしれない）本日はお開きと言う事になった。二人の好奇心を満たすことはできたらしく、一応は良かった。

それと、すぐには無理だけど、あの壁の向こう側にいる「少年」を出してあげないとな。

いくら人が来ないとはいえ、あのままにしておく訳にもいかないし。それに、あんな窮屈な所にいたんじゃ可哀想だしな。

（にしても、何にも起こらなくてよかった・・・）

左手に持っている「それ」を見る。

毛利が言っていた事も少し気になるけど、気配を探っても特に何にも感じなかった。

とは言っても、ここで気を緩んでもいられない。一応警戒しておく事に超したことは無いし。

ふと、前を歩いている桜花に目が止まった。

昔と変わらない、屈託のない笑顔。

それを見ているだけで、頬が緩んでいることに気付く。ほんと、あいつにだけは敵いそうにないな。

どんなに自らの技を磨いても、どんなに心を強くしても。

桜花のあの笑顔に勝てそうにない。そう思う。

（やれやれ、だ）

あの日あの時に出会ったときから変わらない。

だからこそ、知られる事が怖い。自分の全てを教えていない自分に腹が立つ。

矛盾しているこの気持ち。

( いったいどうすりゃいいのやら )

ふう、と思わず溜息。こんなに悩むんだったらいつその事、全部話してしまおうか。いやでも、それはそれで怖い。「何で今まで黙ってたの！」何て言われるのがオチだろう。どっちにしる怒られそうだ。

「あれ？」

そんなことを考えていた時、葵が素っ頓狂な声を上げた。

「ん？どうした葵」

「え、いや、いま前に何かいたような気が」

刹那、風が廊下に吹き荒れた。

それは突風ともとれるほどの強さで、たちまち三人とも後ろに飛ばされてしまう。

「くっ！」

咄嗟に近くにいた桜花を抱きよせて庇う。その後すぐに、壁に叩きつけられる衝撃が襲ってきたが、こんなことには慣れている愁はなんともなかった。

「つと。大丈夫か」

「えっ？ う、うん」

突然の出来事に混乱しているのか、曖昧に頷くことしかできなかったが、ぱっと見た感じ外相はどこにも見当たらないので大丈夫だろうと思うと、隣に倒れている葵を見る。衝撃が強すぎたのか気絶していたが、こちらも外傷はなかった。

ホツとしたのも束の間、明らかに敵意のある気配を感じて前を見る。

そこにいたのは、昨日対峙した奴と同じ、漆黒色の化け物。

「いや、同じじゃないか」

まったく、桜花たちがいなかったら笑っていたな、これは。

俺たちの前にいるのは、廊下の天井に当たるか当たらないかくらいの大サイズの巨大な化け物だった。いや、得体の知れない化け物と言うより、「獣」と言う言葉の方が合っているかも。

直径十センチ以上はある太い四つの足。裂かれただけで中の肉まで完全にえぐれるであろう鋭利な爪を持つ。体躯は百獣の王であるライオンをアフリカゾウの大きさにしたような感じで、顔は狼っぽい。漆黒色のた手紙を靡かせ、真紅に染まった双眸をこっちに向けている。

これでもか、と言えるほどの殺気。ふうむ。どうやら戦う気満々らしい。

桜花の方を見てみると、化け物を真っ直ぐ見て怯えている。まあ、そりゃそうだよな。っても、悲鳴あげたり取り乱したりしないだけ凄いなと思うけど（昔っからそういうのは平気だったな）。

でもまあ、これは作りものじゃない訳で。

消し去る方法はただ一つ。

「……しかたない、よな」

毛利の忠告も無駄になっちゃったな。でもまあ、「あれ」があるだけましか。

俺は立ち上がると、さっき床に落としてしまった「あれ」を捨て、前に少し出る。

「えっ、しゅ、愁!？」

何をしているのかと、桜花が驚きの声をあげている。

まあまあ、桜花さんや。とりあえず見ておいた方がいいぞ。

今から見せるは、幼馴染のもう一つの姿。この世を跋扈<sup>はうこ</sup>せし者たちを討つ者の姿。

そして、今までずっと隠していた姿。

……なんて。そんなカッコいいものじゃないけどね。

「まあ、とりあえずっと」

結んである紐をほどき、袋の中から「あれ」を、無銘の刀を取り出す。

取りだした時、後ろにいる桜花の息を呑んでいるのが分かった。

何か言いたいのを我慢して、抜刀の構えをとる。

兎に角、早く終わらせる。

ただそれだけを考える。それ以外の物を思考の中から一時的に消し、それだけを考える。

そうしないと、太刀筋が乱れそうな気がしたから。

六話・愁が苦手とするもの。意外な結末。（後書き）

連続更新です。続けてどうぞ。

小説の感想や評価など、ずばずばとお願いします。

## 七話・終わりから来る始まりと、桜花の回想

時々、今起こっていることが夢ならいいのになあ、なんて思うことがある。

こんなことを聞くと、何か不幸な事にでもあっているのか、なんて大袈裟に聞こえちゃうと思う。まあ、そんなことを思うのは大抵やりたくないこと、面倒くさいことが目の前にある時で、絶体絶命の状況と言つ訳ではないのである。

でも、

本当に、今この時だけは、全部夢だったらいいのにと、強く、強く願っている自分がいる。

愁がゆったりと漕いでいる自転車の後ろに乗って学校に向かった事も。二人でいつまでたっても来ない葵ちゃんを待っていた事も。

夜の校舎に忍び込んで誰も近づかない部屋を調べた事も。帰る途中で突然出てきた怪獣みたいな「何か」も。

そして、刀を持って私の前に立って背中を見せている愁も。全部、全部。

こんなに強く思ったのはきつと初めてだろう。今までのなんてただ何となく、こうであってほしいななんて感じだった。変わらないうなら変わらないで、何の問題もなかった。しょうがないな、位で片づけていた。

だって、私の傍には、いつも愁がいてくれたから。

どんなにぶつくさ文句を言っても、どんなに面倒臭がっても、愁は傍にいてくれた。それだけでとても嬉しかった。それを言葉で表

すのはとても恥ずかしいけど、とにかく嬉しかった。

前に、愁が私に「お前の笑顔は見ていてなんかホツとするな」なんて言われたことがあった。その時私は、それは私もなんだよ、と心の中で小さく呟いた。私も愁が見せてくれる笑顔に何度も励まされた。何度も助けられた。

そんな愁の事を私は、何でも知っていると思っていた。

好きなもの、嫌いなもの、趣味、性格。今何を考えているのか。とにかく、何でも知っていると思っていた。

愁を知っているという事は、同時に愁が私の事を知ってくれてくれるように思えて嬉しかった。

それが、ただの「驕り<sup>おご</sup>」だったということに気付かずに。

だって、今私の目の前にいる「愁」は私が今まで見た事のない「愁」なのだから。

本当なら、静かさだけがあるこの時間の学校の廊下。

でも今は、私と愁の前にいる大きな黒い狼みたいな動物が出す唸り声が漂う。

愁は私と黒い狼の間に割るように立っていて、左手にはさつきは竹刀だつて言っていた物　本当は刀だった物を持って構えている。

いままで見た事のない、とっても真剣な後ろ姿。

大抵、ボンヤリとしているか柔らかい笑みを浮かべている愁。今の愁は、そのどちらにも当てはまらない、私の知らない愁。

別の誰かに見えてしまうのが、気のせいだと思いたい。そうであつてほしい。

私の少し後ろには、さつきの強い風のせいで気絶した葵ちゃんがいる。見た感じ怪我はしてなさそうだけど、ちよつと強く頭を打つたみたいだったから大丈夫かな。私は愁に抱きかかえられて平気だつたけど。

空気がとても重い。普段以上に重力がかかっているような感じ。それは多分、あの黒い狼がいるせいだとは思うんだけど……何でなのかな。あの狼を見ると、何故か悲しい気持ちになるのは。

私たちを見ているあの赤い瞳には、私でも分かるくらい殺気だっているのに。今にも飛びかかってきそうなのに。どうして、どうしてこんな気持ちになるんだろう。

後ろからじゃよく見えないけど、愁も何だかそんな感じみたいだった。何処か憂いを浴びている、そんな感じ。

「グルルルルツ……」

唸り声を強くする黒い狼。

ああ。そうすると、余計に悲愴に聞こえる。  
この子は悲しんでいるんだ。そう思う。

「　　っ！」

刹那。愁が狼に向かって走り出した。

それは普段の走る速さを優に超えているように感じる。普段だつて速いのに、あんなに余力を残してたんだ。なんて、場違いな言葉が浮かんでくる。

狼の真ん前についたその瞬間、左手に持っていた刀の柄を右手で握り、そのまま切りつけるように抜いた。確か、抜刀って言うんだっけ？ それは取っても速くて、視力は決して悪くない私でも振りぬいた事がやつと分かるくらい速かった。

愁の動きを知っていたのか、狼は愁の一閃を紙一重でかわして後ろに下がる。

そして、下がったと思ったら一気に愁の元まで小さく跳躍。右前脚の鋭い爪を愁に大きく振るう。でも愁もそれを読んでいたので、鞘を投げ捨てて左手を刀の峰部分に支えるようにして刃の方でそれを受け止める。

ガキンツ！ と大きな金属音が響き、愁の顔が険しくなる。

振り下ろされた足を、刀で滑らせるように左の方へと受け流し、狼の左前脚を切りつける。

普通だったら、切り口からは血が吹き出る。

でも、それは「普通」だったらの時だけと言う事を思い知った。切り口から血は吹き出さず、黒い霧のようなものが代わりに出てきた。

「はっ！」

短い掛け声と一緒に、また一閃。相手に隙を与えない鋭く素早い

動き。

また一つ、狼の脚に大きい切り傷がつく。

そこで愁は攻撃を止めて、後ろに軽く飛んで間合いを取った。

まだ攻める事が出来たのに、どうして？

なんて、そんなこと思う必要なんてないのに。

さつきも思っただけど、愁もやっぱり気付いているんだ。この狼が持つ悲しみに。この狼が纏まとっている孤独に。

孤独。そうだ。やっと分かった。喉につつかえていた魚の小骨がようやく取れたような、そんな気分になる。

狼は、孤高ここうってイメージがあるけど、彼らは群れをなしている。

やっぱり彼らも私たちと同じように、一匹では生きていけないのだ。でも、目の前にいる狼は、一匹 独りぼっちだ。まるで、群れから一人逸はくれてしまったかのように。

孤高じゃなくて、孤独。

この子の淋しさは、悲しみはそこから来ているんだ。

何で寂しがっているのか。悲しんでいるのか。私には分からない。

分かるのは、今の私には何もしてあげられないという事だけ。

でも、

「.....」

愁は黙って狼の事を見ていた。

愁なら、なんとか出来るんだよね？

そう思える自分に驚いてしまう。

今さつきまで、愁の事を別の誰かに見えてしまうと思っていたのに、いまのその思いは、普段の愁に思う事であって。

「.....」

「いったい「愁」って、何？」

何て事を考えているうちに、愁はもう一度、狼に向かって走り出す。

狼は、何もしていない。ただ、そこに立っているだけ。

愁はそのまま、狼に向かって大きく切りつける。

狼は何もしない。防ぐ事も、かわす事もしない。ただ、そこに立っているだけ。

懐に入って、下から大きく振るう。

その動作が、そこだけが時間の流れが遅く感じた。

ゆっくりと、狼の首元を侵食していく刀。それに合わせて黒い霧が吹き出てくる。断末魔の叫びは無い。ただ、されるがまま。さつき出していた殺気も、最初から無かったかなのよう。

多分、狼はこうされる事を望んでいたのかもしれない。

何でそう思ったか。はっきりとした理由は無いけれど。

何故か、そう思う。

だって、切られているのに、あんなに穏やかな表情をしていて、それ以外に何が思いつくのかな。

気がつけば、黒い狼は吹き出た黒い霧と一緒にあって霧散していった。狼なんていたのだろうかと思ってしまうほど、綺麗サツパリといなくなっていた。此処にいるのは、愁と、私と、倒れている葵ちゃんだけになった。

「……………」

愁はその場に少し立ちつくし、黙って虚空を見ていた。

どうしたのだろうかと思っただけ、突然私の方に振り向く。

その時、少しだけ、本当に少しだけ、私はビクツと震えてしまった。

怖いと思った。いつも一緒にいてくれる大切な人を、怖いとそれに気付いたのか、困ったような、寂しいような顔を作る愁。

それを見た時私はひどい事をしちゃったと思った。でも、それでも、やっぱり怖いと思ってしまう。

「……………なんともない、よな」

「……………うん」

私はただ頷いた。聞きたいことが山のようにあるけど、いまこころでは聞かない方がいいと思った。

それを聞いちゃったら、愁がいなくなっちゃいそうで怖かったから。

そんな私に愁は小さく微笑むと、葵ちゃんの傍まで行って様子を確かめた。そして何も無いと思ったのか、葵ちゃんをおんぶして、いつの間にか入れたのか、竹刀袋に入れた刀を肩に掛ける。

「行くぞ。こんな所にいたら気が参っちゃう」

私はその言葉に黙って頷いて、愁の後ろを歩き始めた。

歩いている途中、私はあることを思い出した。  
それは過去の映像。記憶。私が愁と出会った、十年前のとある小さな思い出。

何でそれを今思い出したのか、私にはよく分からない。  
でも、もしかしたら、確認したかったからかもしれない。  
目の前にいる人が、「郷風愁」なのかどうか。

八歳だったその頃、私はお父さんの仕事の事情でいま住んでいる涼月市に引っ越してきた。

ずっと住んでいた所に別れを言うのは淋しかったけど、これから住むことになる新しい場所への好奇心のほうが強かったと思う。  
引っ越してきた当日。新しい家と、此処に来る途中ずっと窓から見ていた町の風景に興奮していた私はこの町を見て回りたいとせがんだ。けど、まずはご近所さんへの挨拶の方が先と言われて、ちよっぴり不貞腐れていた。

早く色々な所を見てみたいのに。知りたいのに。

そんな事を思いながら、最初に挨拶に行つた家が、愁の家 郷  
凧家の家だった。

ベルを鳴らして出てきたのは愁のお父さんとお母さん、俊瑛さんと眞由莉さんで、最初に抱いたほのぼのとした印象は今も変わらない。

でも、大人の話なんてのは、子供にとっては暇以外の何者でもなくて。

早く終わらないかななんて思っていたら、

「うわっ……なんかにぎやかだね」

そこに、今と全くと言っていいほど変わらないぼさぼさ頭で眠そうな顔をしながら愁がやってきた。

「愁、起きたのか。今ちょうど、前に言つたご家族が来てるんだ。そしてほら、この子が桜花ちゃん。これからお前と一緒に学校に通う子」

「んー……そんなこと言つてたっけ？」

「おいおい、もう忘れたのか？ 老人じゃあるまいし」

そう言つて、愁の頭をわしわしとする俊瑛さん。

「あらあら。すぐに忘れてしまふんですからこの子は。誰かさんにそっくりです」

「うおっ、何も言い返せないな」

そんな和やかな雰囲気の中に、ちよつとすると愁のお姉さんの絢香さんもやって来てまた一段と盛り上がった。私以外は。

小さい頃の私は極度の人見知りで、同い年の事付き合つのが苦手だった。前に住んでた所でも友達と言える子は指で数えるくらいしかいなくて、ましてや男の事なんて。話しかけられただけで固まっ

ちゃってたから、その時はどうしていいか分からなかった。

そんな私の様子に気付いたのか、それとも別の何かだったのか、今になってもそれは分からないけど、突然、

「えつと……おうか、だっけ？」

「!!!」

愁がお母さんの横で黙って立っていた私に話しかけてきた。けど、返事をする事も出来ずにただ固まってしまった。

「ごめんね愁くん。桜花、男の子が苦手だね。同じ年の女の子とも同じような感じなのよ」

「えつ、そうなの？」

愁は何処か申し訳ないような顔になって私を見る。でも、それも少しで、それから考えるような顔になって、数分後、

「……よし! じゃあ、いっしょにあそびに行こう。この町のおんないもいっしょに」

どういう考えでそんな結論に至ったのか。突然、私の手をとると「ちよつとあそびにいつてきま〜す」と言って走り出した。最初は何がなんだかさっぱり分からなくて頭がこんがらがっちゃったけど、ちよつとしたらそれも無くなった。

これから私が通う事になる小学校。その学校の近くにある駄菓子屋さん。翼友達と遊んでいるという公園。特に珍しい場所じゃなかったのに、愁が案内してくれたその時にはなんだか、特別な場所のように感じた。

久しぶりに、本当に久しぶりに同年代の子と笑い合っている自分がそこにいた。

そんな時間が過ぎるのはとても早くて、あっという間に夕方になつていた。

そろそろ帰らなきゃ そう思ったけど、まだまだ愁と遊びたいという思いもあった。今までまともに男の子と話すらしなかった私は、その思いにとても驚いた。どうしてなのかと悩んでいると、目の前にいつの間にか愁の顔があつた。それに気づくと私は顔を真っ赤にして後ずさつた。

今思えば、この時からなのだろう。私が愁を好きになつたのは。出会つた初日に一目惚れをするなんて考えてもみなかった。そんな事があるのは物語の中だけだと思つていたから。でも、それ以外の考えではこの気持ちの説明できそうにもなかった。

後ずさつた私を見て、どうしたのかと小さく首を傾げる愁。そんな状態が数分続いたけど、愁が「さいごに見せたいところがあるんだ」と言つてまた私の手を取つて走り出した。

その場所は少し遠いところにあつた。数十分くらい走つて着いたその場所は、涼月市全体を見渡すことのできる丘だつた。そこには銀杏の木が一本生えていて、その近くに小さなベンチが一つ置いてあるだけの誰もいない場所。

でも、その場所に私は惹かれた。そこから見た夕焼けがとても綺麗だつたから。

日が沈むまで二人でそれを見て、それから手を繋いで一緒に帰つた。

その後、お母さんたちに怒られちゃつたけど、全然気にならなかつた。そんな事よりも、ついさつきまで愁の手を握つていたということが大事だつたから。

いつの間にか、校舎を出て校門についていた。

そこで背負っていた葵ちゃんを起こすと、「あれ？ いつの間にか帰って来たんだっけ？」って言うてたけど、私と愁が適当に誤魔化しておいた。

最初は首を傾げていたけど、そのうち納得して恥ずかしがりながら笑って、少し話をした後「じゃあまた明日ね〜」って言うて自転車で帰っていった。

そして私たちも、帰路につく。

さっきから一言も話していなくて、重い空気のまま家に向かっていた。

何か言わなきゃ。何か話さなきゃ。そう思っているけど、どうやって話しかければいいのか分からないでいた。いつもならこんな事にならないのに、殺気のある出来事のせいで一変しちゃった。

聞きたい。さっきの事を。あれは一体何だったのか。あの黒い狼は。

「愁」は、何なのか。

その反面、聞きたくないという気持ちもある。

どうすればいいのか、全然分からない。

「……愁」

聞こえないように、小さく、小さく、愁の名前を呟いてみる。愁の背中を掴んでいる手を少しだけ、強くしてみる。

そうしていないと、愁がどこか遠くに行ってしまうようで怖いから。

でも、一体愁が何なのかと思う気持ちがあつて。

……私、どうすればいいんだろう。



七話・終わりに来る始まりと、桜花の回想（後書き）

ちよいとペースが落ち気味な葉月です……。もつちよつと  
急げるように頑張ります。

小説の感想、評価など、どんどんお願いします。

## 八話・母の言葉と決断と

晴れた日の朝と言うものは実に清々《さすが》しいものである。もやもやしたものがすべて吹っ飛ぶというか、兎に角、何か考え事をしている時に外に出ると、大抵はさっぱり出来るのではないだろうか。

しかし、それはやはり「大抵」であるのであって、全ての人があるうとは限らない。

「はあー……………」

太陽が東の空から昇り出てきて間もないこの時間。愁は家の外に出てもやもやとしたものをさっぱりしようと思っただが、逆に減るところが増えてしまったらしく、大きな溜息を一つつく。

「結局あれから何にも話してないもんな……………」

昨晚のあの出来事の後、放課後の帰り道と同じように帰路に着いたが、何も話す事もなく、家に入る時もただ黙って行ってしまった桜花。愁はその後ろ姿をただ黙って見送ることしかできず、今この時までもやもやが心に溜まっている。

はあつ、とまた一つ溜息。

空は雲一つ浮かんでいない快晴なのに、愁の心は雲で溢れ返っているようだった。

郷風家の朝の食卓は、いつもと違って重い空気に包まれていた。テーブルには既に眞由利が作った朝食が置かれているが誰も手につけようとせず、愁の話をただ黙って聞いている。

昨日、家に帰った愁は何にも話すことなく黙って部屋に戻ってさっさと寝てしまったので誰も事情を知らない。帰って来て様子がおかしい事に全員が気づいていたが、愁が自分から話すまで詮索をせず、そっとしておいた。

話が終わると、頬をつきながら聞いていた俊瑛は小さく嘆息する。

「ついにはれちゃったか。しかも最悪のパターンだな、それ。いくら不意に現れると言っても、時と場所は考えてほしいものだね」

髪をくしゃくしゃと掻く。俊瑛が困っている時にやる癖だった。

「というより、愁も少し不注意が過ぎるんじゃないの？ その図書室にいる幽霊くんから前もって知らされてたんでしょ？ だったら何でもいいから止めればよかったのに」

「まあそう言うな絢香。最初は気配がなかったって言ってたろ。姿が巨大な狼みたいなのでも、力が強くなかったんだろ。だから周囲に溶け込んで気配を完全に無くしていて、いくら愁でもそれに気付けて言うのは無理があるって」

「そっただけだよ……」

父親の言葉に絢香は思考するように口元に指をやる。絢香は今日、休みを取ったので久しぶりに家族全員が朝の食卓にそろっていた。が、一向に食は進まず、進む気配もない。

「で、だ。どうするんだ愁。前はあの時のことを覚えてなかったから何とか誤魔化せたけど、今回ばかりはそうはいかないぞ」

「……………うん」

曖昧に返事を返す。何かを考えているように見えて、実の所何にも考えていない。と言うより、考えられないでいた。

「昨日の夜起きた出来事だけを消すのも良いけど、それじゃあ何にも解決しないもんな。お前だってそれは分かるだろ？」

「……………うん」

「だったら、だ。桜花ちゃんに正直に話した方がいいんじゃないか？別に非合法なことをやってた訳じゃないんだから。桜花ちゃんが本当の事を知っても、別に今までと変わらないと思うけどな」

「……………でも、昨日、怖がってるように思った。俺のこと」

「そりゃ、何にも知らないからだろ。本当に突然の事だったんだ。

何の前振りもなく、な。誰だって怖がるさ。そんな事にいちいち怯えるなんて、俺は意味のない事だと思うけどな」

俊瑛の言葉に押し黙る愁。

そりゃそうだろうさ。親父が言っていることは正しい。いちいち怯えるなんて。そんなんじゃ、掴みたい物も掴めない。

でも、それでも。

あの怯えた目を見ると、折れそうになる。

初めて会った時から、何をするときも一緒だった女の子。好奇心が強い女の子。男が苦手だったけど、少しずつ、少しずつ、俺と一緒に過ごしていくうちになれていった女の子。そのくせ、誰よりも一人になる事が嫌いで、寂しがり屋の女の子。

それが、睦月桜花。俺の家の近所に引っ越してきた女の子。

最初の印象は、「人付き合いが苦手そう」だった。桜花のお母さんの後ろに隠れてじっとこっちを見ていたから、もしかしたらと思

った。そしてそれは当たって、俺が近づいて話しかけたら固まっていた。

その頃の俺は知り合いは沢山いたけど、本当に気の置ける奴というのが指を数えるくらいで、周囲に溶け込んでいたものの何処か疎外感を感じていた。

やっぱり、周りのみんなとは違う、「特殊な環境」にいたからかもしれない。

だから、桜花を一目見たときから、こいつとは気が合うんじゃないか、なんて事を小学生の頃の俺は考えていた。今思えば割と変だったのかもしれない。今以上に子供のくせに、周りには沢山知り合いがいたのに疎外感を感じるなんて。

まあでも、それも当たっていた。

無理やり手を取って一緒にいるんな所を見て回って、そうしている時に感じていた。こいつとは、桜花とは本当に気が合いそうだと。

そんな気持ちはいつしか、「守りたい」という思いに変わっていった。今でもそれは変わらない。変わるはずが無い。

でも、

なんでだろうか。

急に、目の前にいた桜花という存在が、消えてしまうんじゃないか、なんて考えてしまうのは。

知られてしまう事で、急に目の前からマジックのように、煙と一緒に消えてしまうんじゃないか。何て考えてしまうのは。

「でもさ、いきなりそんな事はなされても分かるかな。そりゃ、桜花はそういう所はしっかりしてるけど。それでも、本当に正直に全部話していいのかな？ 私は……あんまりよくないと思うな」

絢香の言葉にも黙る愁。

二人の意見はどちらも正しかった。どちらが正しくてどちらが悪かというのはいつもない。

でも、それだからこそ、どっちを選んでいいのか分からない。俊瑛が言うようにきちんと伝えるべきか、それとも絢香が言うようにもうしばらく時間を開けてからの方がいいのか。

分かっている、それを選択できないことがある。

それがどんなに正しい事だとしても、「もしかしたら」という恐怖が頭から離れない。

怖い怖いコワイ怖い怖いコワイ怖い怖いコワイ……

そんな言葉の羅列が頭の中を流れていく。これは今まで感じたことが無い怖さ。

拒絶されるのではないか、というものが頭から離れない。逆に思考をどんどん侵食していく。

どうすればいいのか、分からない。

「愁さん」

突然、今まで黙って聞いていた真由莉が口を開いた。

「本当に正しい事なんて、この世にはないですよ」  
「……………えっ?」

その言葉になんて返せばいいのかわからない愁。が、そんなのはお構いなしでも言っているかのように、真由莉は話を続ける。

「人は生きていれば必ず何かを選択する時が来ます。その殆どが辛いものばかり。どちらか一方を選ぶ、だなんて、本当は簡単にできることじゃないんですけどね」

「母さん……………」

「二つに一つ。なんて言うけれど、それは大きな間違いです。本当はどっちも正解で、どっちも間違いなんです」

「……………それって、答えなんて無いと思うんだけど」

「そうです。選択すること、決める事に模範回答なんてないんです。ただ自分が選んだ選択を信じれば、それが正解になり、逆に信じられなければ、その選択は間違いになってしまう」

真由莉はそう言うと小さく微笑む。いつもの穏やかな微笑がそこにはあった。

「だから、あなたがどの道を選択しようと私は何も言いません。でも、これだけは覚えておいて」

少し間を開けて、はっきりと伝える。

「自分を疑っては駄目。信じぬいてください。そうすれば、何もかもうまくいくはずですから」

「……………自分を信じる」

「はい。ちょっと難しいかもしれませんが、愁さんなら出来ますよ。なんとって、俊瑛さんの子なんですから」

それを聞いて俊瑛は小さく笑う。

「俺はそんなことした覚えは無いんだけどな」

「いえいえ。あなたはちゃんとしていましたよ。自分で気づいていないだけで」

「そうかな？」

ようやく雰囲気是和やかになり、さっきまでの張り付いた空気が薄まる。

「まっ、何か最後は眞由利に取られちゃったけど、そういう事だ。

俺たちはお前の意見を尊重する。ただし、決めたからには貫き通せよ。それが」

「それが郷風の家訓だ。でしょ？」

「その通り。まあ、別の答えが見つかったら破っても良いけどな」

「家訓台無しね……」

笑いがこの場に生まれた。

部屋に戻るとそのままベッドにダイブ。学校に行かなければいけない時間だが、愁の頭の中からその選択肢は消えていた。その証拠に制服を着ていない。

先程の眞由莉の言葉が頭の中で何回も響く。

あれを聞いてから、愁の中で答えは既に出ていた。

後はそれを実行に移すだけ。

「……ちゃんと言わなきゃ」  
『それでこそ主だな』

姿無き女性の声。

『私が言えることは一つだけ。全てありのままを、だ』  
「分かってるよ。でも、それをどう言葉にすればいいのやら……」  
「・」

『ふふっ。悩め悩め。そうしている主もまた素敵なものだ』

「そりゃどうも」

『ふむ。私は結構本気だったのだがな』

一応その言葉を無視しておく愁。いつもこんな調子だから本音が全く分からない。

『それにしても主よ』

「ん？」

『伝えるのであれば急いだ方がいいのではないか？』

「どうして？」

『……主よ。今日は平日。普通なら学校に行くのではないか』  
『？』

「……そうだった」

ようやくその事を思い出した愁はベッドから飛び起きる。まだパジャマのままだったので急いで着替える。制服ではなく私服に。

着替え終わると階段を下り、玄関へと向かう。

「愁」

振り返ると、そこには絢香の姿があった。

「男なら、バシッと決めてきなさいよ」

「……………うん」

その言葉に笑顔で返す。

「それと忘れもの。これは必要でしょ」

そう言って放り投げられたのは紺色のショルダーバッグ。愁が出かける時に使っている愛用のバッグだった。

「さんきゅ」

「行つてきなさい。骨くらいは拾ってあげるから」

その言葉を背で聞きながら、外に出る。

桜花の家は本当にご近所で、走って三十秒もかからない。急いで向かおうとしたその時、

「……………」

愁は知るのを止めて立ち止る。

目の前に、今会いに行こうとしていた人が立っていたから。

「……………おはよう。桜花」

桜花が、愁と同じように私服姿で立っていた。

「……………おはよう。愁」

いつものような笑顔ではないものの、小さく微笑む桜花。

気まずい空気が辺りを漂う。こうなることを覚悟していたとはいえ、この空気は些か重すぎる。

ふうっ、と息を吐くと、愁は先程とは打って変わっていつものほんやりとした、優しさがある顔になる。

「桜花。今日は学校サボろう。そして一緒に来てもらいたい所があるんだ」

「……………うん」

微笑がふつと消えて、真剣な表情になる。

「……………ちゃんと、話してくれる？」

桜花の疑問に、愁は、

「うん。ちゃんと話すよ。嘘偽りなく、正直に」

じつと愁を見つめる桜花。

嘘か本当かどうかを見極めているというより、そこに愁がいるかどうかを確かめているように見えた。

八話・母の言葉と決断と（後書き）

ようやく八話・・・道のりは長いですが、まだまだがんばります！

## 九話：迷いし少女と図書館と

ガタンゴトン。ガタンゴトン。

不規則に響く電車の音。

通勤ラッシュを過ぎているせいか、車内に人が殆ど乗っていない。そんな中に学生服の男女二人組というのは結構目立っていた。

ガタンゴトン。ガタンゴトン。

不規則に響く電車の音。

窓の外の風景が次第に変わっていく。だんだんとビルらしきものが一つ、二つと増えていき、都会の雰囲気が漂ってくる。

「.....」

「.....」

互いに黙ったまま、顔を見合わせて話すことなく座っている愁と桜花。一応隣り合って座っているが、二人の間にはほんの少しの空白。この空白が、今の二人の心の距離を表しているかのよう。

ガタンゴトン。ガタンゴトン。

不規則に響く電車の音。

二人の間に流れる微妙な空気。

このままではいけないと互いに分かりつつも、どう切り出しているのか分からないでいる。とてももどかしく、とても気まずい。

そんな時、桜花の左手が愁の右手の甲に触れようとした。が、その時に互いの目が合う。数秒の硬直。

ハツとした顔をするや否や、触れようとしていた手をすぐに引込め、視線もそらす。

こんな状態が、電車に乗った時から続いていた。

今から約三十分前。愁が桜花に「全てを話す」と言った後、二人はいつものように自転車に乗り家を後にする。が、行き先は学園ではなく駅だった。

割と大きい規模を持つ涼月駅で自転車を駐輪場に止め、切符売り場で二人分の切符を買い、改札を通りホームで少し待つ。やがてやって来た電車に乗り、ちょうどよく二人分開いていた席に座ると二人ともずつと黙って今に至る。

ラッシュを過ぎているため、乗客の数は少ない。学生服を見かけることもない。

「  
」

沈黙する二人。

愁はいつものように、ぼんやりと眠たそうな表情で少し俯きながら何かを思考している。

桜花も似たような表情をしており、目の前をただじっと見つめていた。

(  
)

(  
)

同じことを考えているのに、互いに互いを遠慮している。

初めて出会った時から互いに「遠慮」ということがなかったからか、こういう時に何をし、何を話せばいいのか分からないでいた。

普通、と言っているのか。兎に角、男女の間と言う物は結構、遠

慮が多い。そうしていく内にだんだんと互いの事を知っていくのが多いだろう。

でも、この二人は最初からとつても近い訳で。だからこそ、こう言う時に崩れてしまうと、それを直すのが難しくて。

二人の間に、ほんの少しの壁が出来てしまっている。それは嫌なことなのに、それを壊せないでいる。本当に少し、膜のように薄いものなのに、壊せない。

二人とも、その壁の存在に気付いているのに、気付かないふりをしている。

(・・・情けないな、俺)  
(・・・駄目だなあ、私)

ふう、と小さく息を吐く二人。

愁は全てを話す事で、自分の前から桜花がいなくなってしまいう事を恐れていて。

桜花は今までの愁といまの愁。その二人がごちゃごちゃになって、どれが「愁」なのか見分けられない事が怖くて。

根本的なものはどちらも同じなのに。それが分からなくて。結局そのままの状態が続き、互いに何も話すことなく目的の駅に着いてしまった。

着いた場所は「第二の霞ヶ関」と呼ばれている宝楼町<sup>ウツロウ</sup>。行政が管理するビルが並ぶ場所であり、普通の学生なら間違いなく縁のない場所だった。

改札を抜けると、周りは厳肅な風格を身に纏ったスーツ姿の人の流れがあちこちにあった。

そんな流れの中に私服姿の二人組。傍から見て、とても目立っている。

事実、横を通り過ぎていく人たちが二人をちらちらと横目で見ていた。が、それを口にはせず通り過ぎていくだけ。

「……なんか凄い所にいるね。私たち」

「そうか？ まあ、確かにいつもはこっち側には来ないからな」

「？」

「それも後で全部話すよ」

電車に乗っている時よりは若干、和らいだような気がするがそれでもまだ、二人の間にある壁は壊れていない。

その事に、愁は、桜花は自らを憤っていた。

「よし、ここから少し歩くから。行こう？」

「えっ、う、うん」

曖昧な返事を返して歩き出そうとすると、

「えっ？」

ごく自然な動作で桜花の手を取り、そのまま前を歩きだす愁。愁を、「愁」を見てみる。

その顔はいつもと同じようにぼんやりとしていて、少しだけ眠たそうにしている。髪の毛も毎度おなじみのぼさぼさ。

何一つ変わっていないかった。いや、変わる変わらない以前の問題だったのかもしれない。

それを見た桜花は驚くと、温かい何かに包まれるような、そんな

気分になった。

人の流れの中に入り、二人もその流れと一つになる。

周りを歩いている人たちの表情は何処か疲れているけど、それを隠している。そんな表情ばかりだった。

それを見ていると、こつちまでそういう顔になりそうだと思う愁と、大変なんだな〜と思う桜花。

兎に角、歩いている。駅はもう見えなくなり、大分歩いてきた。でも、歩みは止めない。

一体どこまで歩くのだろうかと桜花は思ったが、それを口にすることはしない。

愁が、「話す」と言ったから、それを信じる。ただそれだけ。

一方、愁は目的地に近づくにつれて気が重くなっていた。

あーあ。いままで隠し通してたなんて。何か無駄だったのかな。巻き込みたくなかったから。桜花には笑っていてほしかったから。ただそれだけだったのに。

でも、それも勝手な判断だったのかも。

自分でただそう決めていただけ。その決めた事も、本当は自分で納得していなくて、無理やりに納得させていた。これでいいんだ。正しいんだ。知らない方がいいんだ。何て思っていた。

でもそれも今日でさようなら。

ちゃんと全部話すって言ったから。決めたから。

ちゃんと自分で納得できているから。

迷いなんて、ない。

そして、目的地に到着。

「着いた着いた。ここだよ」

「……………えっと、本当にここ?」

「本当にここ」

桜花の疑問は至極当然だと言えるだろう。

二人の前にある建物は周りにそびえ立つビルとは違い、巨大で古典的な洋館の姿をしていた。この建物だけ周りの時間とは別ではないかと思わせるには十分だった。

「でも、ここって、図書館……だよ？」

そう言つて桜花が指さした先には、

『国立公文書館』

と、大きく書かれていた。

「そう、図書館。ここが目的の場所」

「……うん」

「まあまあ。とりあえず中に入ろう」

疑いの眼差しを向けてくる桜花を連れて進む愁。

入口の所で警備員と思われる二人に止められて理由を問われたが、愁が一言二言話すと何故か相手は慌てて敬礼をし、二人を通した。

中に入ると、外観以上の広い円形の形をした空間がそこにあつた。書架が何千、何万と綺麗に配置されており、そこに収まる書籍も寸分の狂いもなく収納されている。更に、清掃員の人がよくほどの潔癖なのか、ただ単に几帳面なだけなのか、ここには埃という存在があまりにも少なく、天井につるされている巨大なシャンデリアが放つ明かりを反射するほどだった。それが三階まであるというのだからとてもじゃないが信じられない。

「うわっ……すごい」

思わず感嘆する桜花。昔からあまり図書館とは縁がなく、最近になって愁を見習って本を読み始めたが、近くにある図書館よりも学園にある図書室の方が蔵書量や品質が良い。その原因は図書委員である愁と、図書委員長のとある先輩がありとあらゆる手を尽くした結果によるものである。そのせいか、桜花の中では「懐かしい」の対象になっている。

「さてと、こつち」

普段の愁ならこの光景を見ただけで目を輝かせるが、やっぱりいつも来ているからなのか、周りの書架には目もくれずに建物の奥へと進む。

やがてどこにでもありそうなドアノブが付いた扉を開けて中に入ると、そこにはデパートとかで見かける様な大人数が入れるエレベーターがあった。それを見た桜花は昨晚見た、あの重厚な両開きの扉を思い出した。

「あれ、愁君？ こんな時間にどうしたんですか？」

そう言ってきたのは、エレベーターの扉の前で来るのを待っていた一人の女性だった。

ふわふわとした焦げ茶色の長髪に真由理のような気品を感じる整った容姿のその人は何冊かの古書を抱えていた。

「この司書さんだろうかと桜花が思っていると、愁がそれを解決してくれた。

「おはよう冬実さん。どうしたのか、と聞かれるとちょっと説明しにくいんだけど……。とりあえず、色々あったんです」

「色々、ですか……。あら、後ろにいる子は……?」

桜花に気づいた冬実と呼ばれる女性が小さく首を傾げる。

「あつ、えつと……涼月学園二年の、睦月桜花です。愁とは小さいころからの幼馴染で、」

「桜花ちゃん？ それって」

名前を聞いて驚いた表情をすると、愁に視線を向ける。あきらかにどろろという事なのかと問いかけている表情だった。

「もしかして……ばれちゃいました？」

「ちゃいましたね」

苦笑する愁とは反対に、何処か複雑な表情をする冬実。

「そうでしたか……やっぱりそうなっちゃいましたか」

そう呟くと、顔を桜花の方へ向けてにっこりと微笑む。

「一応、初めましてですね。ここの司書を務めています、あまなわふゆみ天沢冬実  
と言います。よろしく願いますね」

「は、はい！ よろしく願います……」

一応、と言ったのが少し気にかかったが、とりあえず今は何も言わないでおこうと思った。

「此処に来たという事は……愁くん、話す事にしたんですね」  
「ええ。もう隠してもしようがないと思って」

「その方がいかもしれませんね。まあでも、絶対にこうなると思っただけだね」

「？ どういう意味ですか？」

「ふふっ、どついう意味でしょうね」

意味ありげな笑みを浮かべている冬実だが、その意味が全く分からない愁は首を傾げる。

桜花はと言つと、その意味に気付いたのか頬を赤く染めていた。

「でも愁君。学校が終わってからでも良かったんじゃないですか？」  
「まあ、それもそうなんですけど……なんか落ち着かなくて、  
つて、そうだ。あいつは」

「今日は丁度、急用が入ってきたので中にいますよ。誰かさんと違って、ちゃんとした理由で休んでいますからね。彼は」

「うっ……でも、いるのなら丁度いいや。あいつからも説明してもらつた方がいいし」

「では、行きましようか」

二人の話が終わると同時に、チンツという音がするとエレベーターの扉が開いた。冬実、愁、桜花と続いて入る。扉が閉まると降下を始める。

五、六分経つただろうか。どれくらい下に続いているのかと桜花が思ったその時、ようやく止まり、扉が開く。そこにあつたのは先程と同じ広さの小さな部屋で、その先には更に先程と同じドアがある。

「では、ようこそ。深淵の地に存在するもう一つの書籍館、【霽月館】へ」

冬実がそう言いながら扉を開ける。

「……えっ？」

そこには、膨大な数の書籍が納められた光景があつた。



九話：迷いし少年少女と図書館と（後書き）

編集終了・・・・・・・・・・ようやく九話。まだまだ長い・・・・・・・・

十話・よつこそ。深淵の地にありしこの場所へ

そこは、とてつもなく巨大な空間だった。

先程の図書館の中とは比べ物にならない。いや、比べることすら躊躇ってしまうほどの広さだった。

その空間の形はさつきと同じ円形をしているが、その大きさがとてつもない。端から端まで約百メートル近くあって、その中心には巨大な円柱状の書架がそびえ立っていた。その長さは一キロは軽く超え、円柱を支えているはずの天井でさえここからではまったく見えない。

更に、その円柱を囲むように何十万はあるのではないかと思ってしまうような書架の量。その間には何百もの精巧な木製の扉があり、所々に階段が幾つもかかっている。

「……なに、これ」

その途轍ついでもないその光景に、桜花はそう言うだけで精一杯だった。アメリカの議会図書館やイギリスの英国図書館、フランスのビブリオテーク・ナショナルなど、中学校の時に愁と共同の自由研究で調べて凄いと思っていたのに、更にその上に行くものが存在していたことに驚きを隠せない桜花。

啞然としている桜花を見て愁は小さく笑った。

「すごい大きいだろ？俺も最初に見たときは驚いたな。今はもう慣れたけどな」

「そういえば愁君、最初に来た時に迷子になって五時間ぐらい迷っていましたよね。心身ともにくたくたって感じてしたね」

「……何でそんなこと覚えてるんですか」

「ここで起きた出来事は、私にとって一つ一つが大切なものばかりですからね」

そう言っただけで微笑んでいる冬実だが、その表情には何処か陰りがあった。その理由を知っているのか、愁はそれを見て渋い顔になっている。

何でだろうか、それを見て桜花は少しムツとしてしまった。

「さて、いつまでもここにいる訳にもいかないし、あいつのいる所に行きますか」

「そうですね。早く桜花ちゃんにちゃんと話してあげないと」

二人はそう言うと、あの巨大な円柱状の書架に向って歩き始める。桜花もそれについて行きながらも一度周りを見まわす。

恐ろしいほど膨大な蔵書量。何百万どころじゃ済まないであろうその圧倒的な量はどこからやってくるのだろうか。と、ふと疑問に思った。見て見る限り、書架に並べられている本の共通点は、全て辞書並みに分厚く、古書であるということ。そんな本がこれほどまであるのだろうか。

そこまで考えて、結局やめた。どうせこの後全部分かるんだ。だったらその時に色々聞いてみよう。

ふんっ、と小さくはない気を荒げガッツポーズをとる桜花。

「? どうした桜花」

「えっ!?! あっ、な、何でもなしよ」

今の行動の一部始終を見ていた愁が首を傾げながら尋ねる。それにあたふたしながら答える桜花を見て、冬実が小さく笑う。

「まあまあ。愁君には多分、分からないことだと思いますよ」

そう言って桜花に微笑みかける。

その時だった。不意に桜花の周りに光の粒子が集まったようなものがぐるりと桜花をかこうようにして集まって来た。それは、赤、青、緑、黄色と様々な色彩で溢れており、とても美しかった。

「えっ？　こ、これっていったい」

「ああ、そうだった。そのこと忘れてた……。大丈夫だよ桜花。それはある種の防犯システムみたいなものだから」

「ぼ、ぼうはんしすてむ??？」

「とにかく、じっとしていれば大丈夫ですよ」

冬実の言葉に従い、落ち着いてじっと待つ事に。  
すると、どこからか声が聞こえてきた。

此処は深淵に構える、無限の知識が集った宝物庫。

此処は深淵に構える、人

の英知が集った宝物庫。

此処に入ろうとするあなたは、いったいだあれ？

此処に入ろうとするあなたは、どんな目的があるの？

知りたいな。知りたいな。

あなたがどんな人が、知りたいな。

それは幼い少女の声。水のように澄んでいて、穢れを知らない声。光が、桜花の手に少しだけ触れる。それと同時に、集まっていた光がパアッ、と弾けて広がっていく。

その光の一つ一つが夜空に浮かぶ星々のように見える。それはまるで、織姫と彦星を隔てている天の川の流れを彷彿ほつぷつさせるものだった。桜花は指でそれに触れてみる。それはさらさらとした砂のようだった。でも手には何も付かない。まるで空気に触れているような、不思議な感覚。

不意に桜花は、この感覚をどこかで感じた事がある、そんな思いが浮かぶ。そんなはずはないとそれを否定するも、懐かしいような感覚は消えず、むしろより色濃くなっていく。が、それは光が少しずつ消えていくのと同じように薄れていき、全てが消えたときにはその思いは最初から無かったのでは、何て思ってしまうほどだった。

あなたは一人の少年を想って此処にやって来た。

貴方はその少年の事を知りたくて此処にやって来た。

それはとても純粹で、

それはとても真っ白で、

邪よこしまな穢まけれを感じない願い。

さあ、どうぞ。

あなたの為に、扉をあ

けましょう。

あなたは今この瞬間、私の友になった。

声は余韻を残すように消えていった。

「……今のは？」

「此処守っている精霊の声だよ。彼女に認められる事が、この先へ

行くための鍵なんだ」

「セイレイ？」

「ほら、よく漫画とかゲームとかで出てくる妖精みたいなやつ。あれだよ」

「ふーん」

桜花は先程の少女の声を持つ精霊の姿を想像してみる。小さな天使の輪が頭の上に浮いていて、小さい羽根を生やした女の子……まんまだった。

「うう。でも、さっきはあんな事があるなんて言っていなかった」

「いや、その事を今の今まで忘れてた」

「もう、忘れないですよ……スーッゴク、ビックリしたんだから」

「わるいわるい。以後気をつけます」

何て真面目に言っているか、口元は笑っている愁。それを見た桜花は少しふて気味。

「ふふつ。さて、桜花ちゃんから先にどうぞ」

ガチャリと扉が開く音。前を見てみると、冬実がこれまた大きな扉の前に立ち、それを開けていた。それに頷くように返すと、桜花は扉の奥へと進む。

それに愁が続こうとした。が、入ろうとした時、左腕を冬実に優しく、だがしつかりと掴まれる。どうしたのかと思い見てみると、そこにはいつもの穏やかな表情ではなく、とても真剣な表情をしていた。

「ん、なんですか？」

「……こんなこと、私が言うのもなんですけど。とりあえず言っちゃいますね」

少し間を置いて、言う。

「愁君は、この選択に後悔していませんか？ もししているなら、今からでも桜花ちゃんの記憶を消すことだって、」  
「いいんですよ。これで」

冬実が言い終える前に、愁が割って入る。

「後悔していないか、って言われたら、めちやくちや後悔してますよ。今の今まで知られないように隠してきたんですからね。今だって、あいつには知られたくないなって思ってますよ。でもね」  
「でも？」

「後悔しているから何なんだ、って話ですよ。これは母さんからの受け売りなんですけどね。別に後悔しても構わない、って言ったんですよ。人は生きていれば必ず後悔してしまう生き物だから。でも、だからと言って後ろばかりを見ていいってわけでもない。大切なのは、いつまでも後ろばかり見ていないで、それを原動力にして前を見て進むことだって」

そこで言葉を止めて、桜花が入っていた扉の奥を見つめる。

「だから、俺は前を見ます。桜花を守ります。というか、今までもそうだったんですけどね」

言い終わるや否や、愁は扉の中へと入って行く。

その後ろ姿を見ていた冬実は、やがていつもの表情に戻っていた。

扉の先にあつたのは、お金持ちが住んでいそうな広い部屋だった。

煉瓦と木が見事に調和されていて、どこか温かみがある。何かに例えるなら、眼鏡をかけたあの某魔法使いの少年が学んでいる学校の居住空間と似ていた。

ここにも書架が幾つかあるが、部屋の雰囲気のせいか、先程のような威圧感の様なものがなくどっかの有名な教授の書斎のように感じた。置かれている全ての家具は一級の家具職人によるものなのか、全てが繊細で尚且つ、どっしりとした感じがある。

この部屋には三人、人がいて、なにやら話し込んでいた。

一人は二十代後半といったところだろうか。黒髪で、背は愁より四、五センチ高いくらい植人のような理知的で冷たい雰囲気を持ち、その顔は整っており、カッコいいと言っても誰も文句は言わないだろう。が、身なりを気にしないのかどうなのか、着ている服は結構ボロボロだった。

一人は……あれ小学生なのだろうか？ と思ってしまうほど背が低かった。桜花も女子の中ではそれなりにある方だが、その少女？ はとても小さかった。愁と同様、もしくはそれ以上のぼさぼさとした水色の長髪を無理やり三つ編みにしている。

そして、最後の一人もその少女と同じくらい背が低かった。愁の母親の眞由莉や絢香と同じ黒青色の髪に幼げな、性別の判断がつきにくい柔和な顔立ちだが、声から判断して少年という事が分かる。そしてその少年は、桜花にとって、かなり見慣れた人物だった。

「ゆ、雄真くん!？」

「……へっ?」

少年 霧月雄真きりげつゆうまは桜花の方を向くと、とても驚いた表情になる。

「お、桜花さん！？ なんでここに!？」

「そ、それこっちの台詞だよ。なんで雄真くんがここに……」

愁にとつて、弟のようであるように、桜花にとつても雄真は一つ下の弟のようなものだった。

桜花が涼月市に引越してきた時、愁が最初に紹介してくれたのが雄真だった。小さい頃から丁寧語を使って話していたこと。周りの子とはずば抜けて頭が良いということ。身長が平均よりも低いこと。全くと言っていいほど変わっていないのが雄真だった。

「俺がここに連れてきたからだよ」

「愁さん？」

桜花の後ろから愁と冬実が遅れてやって来る。

「…… 此処に連れて来たつてことは、桜花さんに話すつもりなんですか？」

「そのつもり。と言うか、昨日学校で俺が想影と戦った所を見てるし」

「想影が学校に？ 全然気付かなかつたです……」

「気付かないくらい弱い奴だったからな。で、そんな時に見ちゃつたんだ。桜花が」

「そうですね……」

一瞬だけ表情を曇らせたが、桜花の方に向くと一変し、いつもの柔らかい感じではなく、先程の冬実と同じような真剣なものになる。

「分かりました。えっと、僕からも色々と補足しますね。何で僕が此処にいるのか、とかですけど」

「うん。ありがとうね雄真くん」

「そんな。お礼を言われる事じゃありませんよ」

そう言つと、横にいる二人を紹介する。

「冬実さんの名前は聞いてますよね？ えっと……こちらの

男性は

「ふうれんあすか風蓮飛鳥だ。宜しく頼む」

雄真が言い終える前に自分で名乗った飛鳥という男は、それ以上は何も言わない、と言わんばかりに壁に寄りかかる。その行動で寡黙だという事がすぐに分かった。

「あと、こちらの女性はもちしきめくみ望月恵さんです」

恵と呼ばれたその女性？ むしろ少女と言つても通用するその人は二カツと不敵に笑つと桜花の方へと近づく。

「恵だ。宜しく頼むな。えっと……桜花ちゃん、だったな」

「あ、はい。宜しくお願ひします」

「うむ、良い返事だ。なんならメグたん、と呼んでもいいぞ」

「め、メグたん……?」

人を見た目で判断してはならない。という言葉がそのまま当てはまると桜花は思った。

「因みに、メグさんは今年で三十路だ。飛鳥さんより年上なんだよな」

「ええっ!？」

信じられない、と言っているような眼で恵を見る桜花。

「こら愁ちゃん。女性の年齢を人にポンポンと話すものではないぞ」  
「いや、女性って言われてもな……。全然しつくりこないんだけど」

「なんだと! まったく、失礼な奴め。そういえば愁ちゃんと初めて会った時もこんな会話をしたような気がするが」

と、いつ間にか子供じみた応酬に変わっていた。それを見て雄真は苦笑を、飛鳥は溜息をついた。

それからちよっとして、雄真の小さな咳払いで終わった。

「お二人とも……。こう言う時ぐらいそういうことはやめて下さいよ」

「すまないな雄真……。メグさんがこんなだからつい」

「ほほう。愁ちゃんはそうやって他人のせいにするのかい？」

そしてまた応酬。全く懲りない二人であった。

「……。とりあえず、あの二人は放っておきましょう。いつまでたっても始められないので」

「う、うん」

諦めた雄真はこほん、とまた小さく咳払いをして、

「あらためまして、ですね。この書籍館  
めています、霧月雄真です」

【せいげつかん霧月館】の館長を務

柔らかい顔で、そう桜花に言った。

十話…よつこぞ。 深淵の地にありしこの場所へ（後書き）

一章もあと僅か……早く出来るよう努力いたします。

## 十一話・打ち明けたその先に

「……館長さん？」

桜花の口から出てきた感想。館長だから何なのか、と含まれた言葉だった。

「雄真。俺らはその意味を分かっているけど、桜花に言ったって分からないっての」

「あつ、そうでした。すみません」

申し訳なさそうに謝る雄真。

立って話すのも何なので。と言った雄真がここにいる人間を全員、近くにあったテーブルを囲むようにして座っている。いつの間にか用意したのか、冬実が紅茶を用意していた。「こう言う時にはうってつけなんですよ」と言いながら差し出された琥珀色に輝くそれは、重くなった空気をほぐすのに十二分の効果があった。

130

「うむ。ふゆみんの淹れる紅茶は本当に美味しいな」

「ありがとうございます。御代りもありますから言ってくださいね」

「あ、冬実さんおかわり」

「早っ！ 愁ちゃん早すぎだろ」

こうして見てみると和気藹々な感じがするが、実際問題、この空気を和らげようとしているのであり、そしてそれはあまり効果のないものだった。

「ま、簡単に言えば此处が一番偉いのが雄真なんだよ」

「へえ」

至極簡単な愁の説明を聞いて、感心するように雄真を見る。その視線を受けている本人は「いえいえそんな」と顔を赤くして否定している。

「僕なんてまだまだですよ。そんな大層なものじゃありませんって」「まあそう言いなさんな雄真ちゃん。雄真ちゃんは正真正銘、この霽月館の館長なんだから。もっと自信を持てい」「いや、それはそうなんですけど……」

すっかり委縮してしまった雄真。

桜花はその姿を見て、学園で会ったときや一緒に遊んでいる時の姿と何ら変わりないと思う。いつも丁寧語で話して、自分の事をいつも下に見てしまう癖。それらすべてが普段の雄真と重なって見える。

だったら、愁は？

愁だって、雄真くんと一緒のはずなのに。そう見る事が出来ない自分がいる。

雄真くん以上に、愁とは一緒にいたはずなのに。

こんなのは、やなのに。

とつても辛い。

「えっと、桜花さん？」

「……え、なに？」

「あの、今から話そうと思って……大丈夫ですか？」

心配そうに見る雄真。

気付け桜花以外の全員が「話」を聞く態勢になっていた。

「う、ごめんね。ちょっとボーっとしちゃって」  
「……………」

雄真は何か言おうとしたが、結局何も言う事は無く話し始める。

「では始めに、この場所について説明しますね。先程、桜花さんが  
愁さんと一緒に入った国立公文書館の真下に此処がある事は分かり  
ますね？」

「うん。すっごい長いエレベーターだったね」

「ええ。約五キロはあると言われています」

とんでもない長さであった。それを聞いた桜花は目を真ん丸にする。

「そして、この場所ができた年ですけど……………これは正確な記  
録が残っていないんで憶測にすぎませんが、十八世紀後半だと言わ  
れています。ちゃんとした記録があるのは、そこから百年経った後  
なんですよ」

十八世紀後半。かの有名な坂本竜馬や勝海舟、西郷隆盛などの幕  
末の偉人たちが存在していた時代。歴史に興味がありませんが、  
でも大多数の人が知り、また興味をひかれる時代。その時代からこ  
の場所が存在していることに桜花は純粹に驚いた。

「まず、この場所の目的ですが……………桜花さんは昨晚、学校で  
影のようなものが立体化したようなものを見ましたよね」

「う、うん」

「あれは想影そつえいと呼ばれる、下級に属する実体を持った幽霊みたいな  
ものです」

「実体を持った、幽霊みたいなもの？」

「はい。あれが出現する原因は今のところ、はっきりと分かっているわけではありませんが、あれは、人の負の感情が集積して生まれただ存在だと言われています」

負の感情。そう言われて桜花は心当たりのようなものがあつた。

あれを見た時、風が突然吹いて来たような悲しみが自分に押し寄せてきた感覚になった。

とつても苦しい。まるで深い深い海の底にいるような、そんな感じ。

上がろうとしても、全然たどり着けない。もがいてもがいて、でも届かない。だんだんと酸素が無くなって来て、苦しくなってくる。そして最後には、ただの真つ暗闇。

そこには何にもない。ただただ暗いだけ。

「想影は完全には倒せません。生まれてくる源が人の中にあるんじゃないでしょうか。もし完全に消滅しようとしたら世界中に核爆弾を打ちこめば済む話ですけど」

「ははっ、それは無理な話じゃろうな」

雄真の言葉に笑う恵。笑い終わると、雄真の話を引き継ぐように話し始める。

「話がちよいとずれたな。まあ要するに、桜花ちゃんが見た想影のように、この世には物語だけに登場するような怪物や精霊、魔法が存在する。それらを保護や守護、もしくは破壊・討伐する。それ以外に、魔法に関する書籍や魔道具なんかも保管している。ここの書架にあるのは大抵その類の書籍じゃな。以上、それが霽月館 というより、世界各国の国立図書館が存在する理由なのじゃよ」

「世界各国、ですか？」

「そうじゃ。この日本だけじゃない。アメリカの議会図書館やイギリスの英国図書館なんかにも、この霽月館と似た場所が存在する。それらはすべて情報を共有していて、その繋がりを書籍館同盟と呼んでいる。霽月館もそれに加盟してある。この日本にただ一つの異形専門書籍館じゃからな」

「そして、その書籍館に属している人たちの事を『司書』と呼びます。つまり、僕や愁さん。というよりも、ここにいる桜花さん以外の人は全員、司書という事になります」

雄真と恵の話聞き終えた後、桜花は愁の方を向いてじつと見る。その眼は本当の事なのかと訴えかけていた。

それを見た愁は小さく溜息をつく、小さく苦笑う。

「雄真の言う通り。俺は六年くらい前、かな。そんな時はまだ見習いだったけど。でも、剣を習い始めたのは三歳くらいかな」

そう言った後、桜花にだけ聞こえるように小さく「ごめん」と呟く。

「じゃあ、おじさんとおばさんは？」

「あの二人も昔は司書だったんだ。正確に言えば、親父がある依頼を受けていた時に偶然巻き込まれたのが母さんだったって聞いた」

「そう、なんだ……」

七年。そんなに昔から愁はあの異形の怪物と向き合っていた。

今思えば、愁はその時から何故か傷を作っていた。それは、怪物との戦いで作ったものだったのだ。

自分の知らない所で、そんな危ない事をしていたのだ。

その時、自分はいつたい何をしていた？

時々、何かおかしいと思うことはあった。でも、思うだけで終わ

っていた。

気づいてあげられなかった。

愁の事だから、悟られないように隠していたのだろう。

でも、それでも、あんなに近くにいつもいたのに、それに気付けなかった。

この時、桜花は生きてきた中で一番、自分を恨んだ。

「……なんか、すつごく規模が大きくて想像つかないです」

桜花の溜息を含めた言葉。それを聞いた雄真は小さく苦笑い。

「まあ、それが普通ですよ。いきなりこの状況を理解しろ、なんて言うほうが無理なんですから」

「そうじゃな。でも、桜花ちゃんは結構落ち着いていると思うぞ。立派なもんじゃ」

感心するように恵が言う。

「そんなこと、ないです。その逆です。頭の中がぐちゃぐちゃで、どうしたらいいのかわからなくて……」

だんだんと沈んでいく声に愁は何も言う事なく、ただ桜花の事を見ているだけ。ただそれは、何もしないというより、何をすればいいのか分からないだった。

再び沈黙が流れる。誰もがどうしようかと思いつつも何を話したらいいのか分からないでいたその時だった。

「……そろそろ戻る」

と、短くそう言って飛鳥が席から立ち上がり去るうとして、この

場に止まっていた時間を動かす。

「そうじゃな。私もやる事があったの」

「私も、少し確認したい事が」

「僕も使いたい資料があるので書架の方に行きます」

それを皮切りに次々とこの場から去ろうとする司書たち。それを何も言えないままただ見ているだけの二人。

「……もうお前は答えを見つけている。だから、迷うな」

「へっ?」

桜花の後ろを過ぎていった飛鳥がぼつりと、ただの一人事だと言わんばかりの音量で呟く。

ボタン。と、扉の閉まる音。

そして、ここには二人きりとなった。

「  
……  
……  
……  
……  
」

沈黙。 静寂。 沈黙。 静寂。

雄真たちが部屋を出ていってから十数分。互いに何も話さずにずっと黙っていた。

沈黙。 静寂。 沈黙。 静寂。

二人はいま、近くにあった大きいソファにテーブルで挟むように座っている。

沈黙。 静寂。 沈黙。 静寂。

愁は紅茶の入っていないカップを手にとっているだけで、桜花もただ俯いているだけ。

沈黙。 せいじゃ

「……………なんで」

「……………ん？」

「なんで、司書になつたの？」

ようやく破られた沈黙と静寂のデュエット。それを破つたのは桜花だった。

「聞かせて。何でこんなことをしているのか。おじさんがやってたから自分も、何て答えはダメだよ」

「……………駄目？」

「だゝめ」

くすりと微笑む桜花。久しく見ていなかった笑顔、と言っても半日だけだが、それを見た愁は重しが取れたような、そんな気分になる。

「愁の事だから、そう言う理由じゃないんでしょ？」

「何でそう思うんだ？」

「今まで、どれだけ傍にいたか忘れちゃったの？ そのくらいなら分かるよ。だって、愁だもんね」

その言葉が、愁の中に入り、伝わり流れ、浸透していく。

「……やっぱり、敵わないな。」

心の中で呟く。やっぱり、隠し事は出来なかった。

せめてもう少し、と思っても、神様はもう許してくれないだろう。もう物語は動いてしまったのだから。

「そうだな……。まあ、確かに色々理由はあるよ。でも、

その中で一番、大きい理由として挙げるなら」

「挙げるなら？」

「お前を守るため、かな」

「……へっ？」

予想していた答えとまったく違う事に驚く。

「私を？」

「そう。お前を」

そう言つと愁はソファから立ち上がり、桜花の隣へと移動する。

一瞬、ドキッとしたが、愁はそれを知ってか知らずか、互いの体が触れるのではないかと思うくらい、近くに座る。

「俺は最初はさ、司書になる気は全くと言っていいほど無かったんだ」

「そう、なの？」

「ああ。親父や母さんがそう言う事をしている事には、すっごくかっこいいな、って思ったりはしていたけど、自分も同じ事をやりたい、とは思わなかった」

その大切さを知るまでは、だけどな。

その言葉を呟いた愁の表情は何処か、自分を卑下するような、自嘲するような、そんな顔だった。

「七年くらい、だったかな。お前、怪我して入院した事あっただろ？」

「えっ……ああ、あれかな。車に轢かれちゃった時だったっけ」

突然の回想。それが何を指すのか分からずも、桜花は記憶の糸を手繰り寄せる。

正確に言うと、七年と一月前。桜花は車に轢かれて入院したと言う事になっている。なっている、というのは、その時受けたショックで桜花自身がその事を覚えていないから。

退屈な病院での生活で唯一の楽しみだったのが、愁が御見舞に来てくれることだった。桜花が入院していた病院と愁の家はかなりの距離があったが、毎日毎日遅くまで、愁は桜花の隣にいてくれた。今思い返せば、それはとても凄い事だという事がはつきりと分かる。

「うん。でも、あれは事故なんかじゃないんだ」

「事故じゃない……？」

「そう。あれはさ、桜花が化け物　もとい魔物に襲われて出来たやつなんだよ」

その言葉に桜花は目を丸くする。

襲われた？　化け物に？　七年前に？

全く記憶にない話に戸惑う桜花だったが、それを気にせず愁は話し続ける。

「いつもみたい公園で遊んだ後、一緒に帰ろうとした時に突然、な。色々親父たちから話を聞いていたからすぐに分かったよ。でも

さ、」

一拍置き、そして、

「足がすくんじやったんだ。情けない事に」

笑っていた。でもそれは、喜びや楽しみではなく、自分への憤り。ただそれしかなかった。

「知らなかった・・・そんな事があつたなんて」

「襲われたショックでその時だけの記憶が無くなったって、冬実さんが言つてたよ。まあ、その方がバレないでその時は良かったんだけどな」

「冬実さんが？」

「その時の怪我を見てくれたの、冬実さんだったんだ。まだ入りたての頃だったんだけど、その時から凄かったって親父が言つてた」  
「そう、なんだ」

冬実に最初にあつた時「一応、初めましてですね」という言葉の意味がようやく分かった。昔、桜花は冬実に会っていた。その時は意識がなかったけれど。

「でさ、見てもらったときに、お前の中にある種の『力』があることが分かったんだ。いや、力って言つより体質、とでも言うべきなのかな」

「えっと、それって・・・」

「冬実さんが言うには・・・お前は精霊とか、そういう霊的なものに好かれやすい体質なんだってさ。詳しくはよく分からないんだけど」

ふつつと、息をつく。あまり言いたくないという事がはっきりと伝わってくる。

「どうもその時に、その力が目覚めたらしくて、それに惹かれて化け物が現れたらしいってさ」

「.....」

「でもさ、はっきり言ってそんな事には興味ないんだ。桜花は桜花に変わりはないし。ただ、その時何もできなかったのが悔しかった」

その時の事を思い出しているのか、唇を噛む。

「その時思った。あの時感じた恐怖は、自分が死ぬ事にじゃなくて、桜花が目の前から、俺の傍からいなくなっちゃう事に感じた恐怖だったんだって」

ただその時は、後悔ばかりした。

俺は知っていた。俺は力を持っていた。俺は守れる力を持っていた。

なのに、戦わなかった。守ろうとしなかった。恐怖に押しつぶされてしまった。

その時すぐに駆けつけてくれた親父たちがいなくなったら、俺もやられていた。

自分の身一つも守れない、愚かな奴。子供だったから、なんて言い訳は通用しない。そんな事で納得してしまっではいけない。

その時だった。誰かを失ってしまう恐怖と、傍にいてくれていることが当たり前だった事に。

そしてそれが、自分にとってどんな事よりも大切だと言う事に。

「これが俺の隠し事。なにか感想はある？」

「.....」

桜花は何かを考えるようにただ黙っていた。

愁はそれを見て、そりゃ考えるよな、などと、まるで他人事のよう  
に心の中で呟く。

いきなりこんな事を言われて、いきなり答えを出せなんて、普通  
は無理だ。それは仕方ないと思っっているし、別にこのままでもいい  
と思っっている。

ただ自分は守るだけだ。昔誓ったことを守るために。目の前にい  
る人を守るために。

でも、こんな理由で戦う俺って、ただの馬鹿なのかな。誰かを守  
るためなんて、今どき三流のファンタジーか、って話になるのかな。  
それでも構わないんだけどね。

馬鹿でも全然構わない。だってこれは、俺が選んだ選択なんだか  
ら。

「……愁ってさ」

沈黙を破るように、桜花が口を開く。

「ほんつとくに、バカだよな」

「……へっ？」

桜花の顔を見る。何故か、本当に何故か、桜花の大好きなミルク  
レープをこっそりと食べてしまった時のように。

はたまた、昼休みの時間に桜花の弁当のおかずを食べてしまった時  
のように怒っていた。

「ほんとにそう。いつもいつも、自分で勝手に決めて自分で勝手に  
やる。心配掛けたくないって言うって誰にも何も話さないで自分でほ  
いほい進めてさ。別に誰にも迷惑や心配なんてかかんないのに、い

つつも、いつつも自分でやって、勝手に終わって……ホントにもうっ！」

洪水のごとく、桜花の口から溢れ出る罵詈雑言。それをただ茫然と聞くしかない愁。これはさらに続いたが、言っていることはどれもみんな似たり寄ったりだった。

たまらず、仕舞には目を閉じて、ただただ聞いていた。

「ほんつとつに、いつもいつもいつも！ どうして……」

途中で言葉が止む。どうしたのかと思いつつすらと瞼を開けてみると、

そこには、ぼろぼろと涙を零している桜花がいた。

「……おう、か？」

その光景に驚く愁。桜花は、涙を流していた。

「なんで……なんで、そんなに頑張って、そんなに傷ついて、私を守るうとするの？ ねえ、なんで？ なんでそこまでして……」

そこで言葉が途切れる。ぷつりと、糸が切れたように。後はただ、涙を流すだけ。

「…………えっと。まあ、何というか」

桜花の体が、愁の腕の中にすっぽりと収まっていた。

「そりゃ、さ。うんん。ほら、大切な人だから」

ただ、それだけだから。

そう言っつて、腕に力を込める。

もう二度と、離さないようにしっかりと。でも、壊れてしまわないように優しく。

愁の腕の中で、桜花はただ、涙を流し続けた。

一生分の涙を流したと例えても可笑しくないほど、泣き続けた。

その涙を、愁は黙って受け止めた。

どれくらい時間が経ったのか。その判断も出来なくなった頃、桜花はようやく泣きやんだ。

涙をふくように目を擦ると、晴れやかな笑顔で愁を見る。

「ありがとね、愁」

「ん？ 何か感謝される事でもしたか？」

首を傾げる愁に、桜花は、

「うん。とつてもとつても、ね」

十一話・打ち明けたその先に（後書き）

・ 結構遅くなってしまいました・・・このままだとやばい・・・

## 終話：桜花の願い、決めたこと

時刻は現在、お昼の十二時ちょっと過ぎ。この時間帯になれば、大抵の人はお腹が空くことだろう。

それは霽月館の司書たちも例外ではなく……

「うむ。やっぱりこのパスタは格別だな」

「ありがとうね恵ちゃん。いつも来てもらっちゃって」

「なになに。マユさんにはお世話になりっぱなしだからな。こういう時ぐらいは客としてこなければ」

「ふふ。ありがとう」

楽しそうに話す眞由莉と恵。年は割と離れているのに、周りを漂う雰囲気は二人を同年代の仲良しな友達というのを感じさせる。

「なんかいいですね。こういうのって」

「……そうだな」

「あら、珍しい。あなたがそういう事を言うなんて」

「……別に。俺はただ口下手なだけだ。賑やかなのが嫌いなわけじゃない」

くすくすと笑う冬実に黙々と食べ進める飛鳥。性格が全く正反対の二人だから、見ていてなんだか笑いがこみ上げてくる。

「……ぐー……ぐー……」

一人だけ、椅子に座って寝ている俊瑛。「寝かせてあげてください」と眞由莉の要望のため一人放置されている。

「そついや、今日って本当は学校あるんだよな」

「そつ言えばそつでしたね。なんかこうしていると忘れてしまいますよ」

「まあでも、こういうの好きだな。みんなで楽しくご飯食べるの」

学生組である愁、桜花、雄真は一緒のテーブルで食べていた。時折、学校の話や霽月館での出来事を話しながらご飯を食べていた。

話し合い、というより愁の告白が終わった後、傾れ込むように司書たちが入って来た。本人たちは否定しているものの、ドア付近でこつそりと聞いていたらしい。先程の会話を聞かれたのかと、愁と桜花の二人はいつにもなく顔を真っ赤にした。

そんな時に恵が「お腹すいたからどつか食べに行こう」と言い出し、どこに行こうかと話し合った結果、愁の両親がいる「Esperant」になった。

突然やって来たお客たちに二人は少なからず驚いたが、愁の表情を見ると穏やかに笑って素早く料理を作った。愁たち学生組は普通にパスタを。飛鳥と冬実はステーキ。そして恵はその両方（しかも大盛り）を頼み、賑やかな食事となっている。

「それにしても、やっぱり雄真くんがいたことは驚いたな。まさか！ な人物だったからさ」

「僕も桜花さんが来たときはびっくりしましたよ」

「事が急だったからな。でも、まあよかった」

「？ 珍しいですね。いつにもなく弱気じゃないですか」  
「ん。いやさ、流石にあんな形になるとは思わなかったからな」

そう言うのと頬を掻きながら苦笑する愁。

大人たちはそれぞれのやり取りをしていて、三人の会話を聞いていない。眞由莉と恵は時折笑いながら談笑を。飛鳥と冬実は静かに語り合い。そして俊瑛は爆睡中。ついさっき、あんなシリアスな話をしていった面子とは思えないほどだった。

「でも、無事に解決できてよかった」

「まだ終わってないよ」

雄真の言葉をかき消すように、桜花が言葉を挟む。

「終わってないって……何がです？」

「うん。そりゃ、今まで黙ってたことだよ。どうしてももらおうかな」

「うつ……何を企んでるんだ？」

「ふふん。実はもう決まってるんだ」

「……何だ？」

「私も、司書になりたいな」

「……はっ？」

「……………へっ?」

桜花の突然の宣言に、二人は何を言ったらいいのか、言葉を失う。

「だめ、かな」

「だっ、駄目ですよ、そんないきなり！ 危ないです！ 危険です！」

「でも、もう決めた。私も司書になりたい」

「いやっ、でもですね。って、愁さん！ 愁さんからも何か言わないと！」

必死に反対する雄真。だが、今の桜花にはその言葉は届いていない。そんな桜花を説得しようと愁に援護射撃を頼むが、

「……………別に、良いんじゃないか」

「えっ!?!」

絶対に反対すると思っていた愁が、何故か桜花の味方になってしまった。

「愁さん！ それ本気ですか？ 今まで巻き込まないようにしてきたのに、いまになってそんな」

「今だからこそ、なのかも」

愁の目は何処か虚空を見つめるように、二人のどちらにも向けられていない。

「へっ? それはどういう……………」

雄真が尋ねると、愁は至極真面目、と言った表情で、

「うん。なんていうか……一緒にいられる時間が増えるから、かな」

その表情にはふざけている感じなど微塵もなく、本気で言っただしい。

その言葉に、顔を真っ赤にする桜花と、目が点になっている雄真。何故そんな風になるのか、愁は全然分からなかった。

「……まあ、愁さんらしいですよね」

諦めた、とでも言うように雄真が言う。

「そっだよ雄真くん。もう決めた事だからね」

「そうですね……。これからますます忙しくなりそうです」

兎に角、今分かる事はただ一つ。

これから、自分が関わるであろう非日常が、今よりもスケールアップするという事だけだった。

終話・桜花の願い、決めたこと（後書き）

ようやくと一章が終わりました・・・このペースで出来たらいいのに、と思ってしまう。

## 特別章：対談話 その一

こういう形では初めまして。「郷風愁の日常的な非日常」の著者の葉月陸斗です。

いやはや、何とか無事に第一章を終えることが出来ました。これは読者の皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

さて、前にあとがきでも書いたと思いますが、ここではわたくし陸斗と、登場人物たちとの対談話にしたいと思います（続きを早く知りたい読者様、申し訳ございません……。一回、こういうのをやってみたかったもので）。

はてさて、記念すべき第一回目のゲストは主人公である郷風愁とヒロインである睦月桜花です。

愁「どうも」

桜「おねがいします」

二人とも、第一章お疲れさまでした。初めてなのでちょっと大変だったと思いましたが。

愁「うん。でも、戦闘の場面って最初と中盤だけだね。後は桜花との話だけだし」

桜「そうだね。ちょっと少ないんじゃないかって思っている人もいるかも」

まあ、確かにそうなんですけどね。でも、最初は二人の事について

て書きたかったんです。僕の書く小説の場合、絶対にヒロインとの関係というものがあって、その繋がりを大事にしたいんですよ。

この物語は、やっぱり一番重要な所が二人の繋がりにあって、今後それがどのように変化していくのか。っていうのをちゃんと書きたいんですよね。

愁「なるほどね。でもさ」

はい？

愁「無駄に引つ張りすぎなような気がするんだけど」

・・・申し訳ないです。なにぶん、実力が伴わないので。ちよつとぐだぐだした感じになってしまいました。

桜「でも、これはこれでいいと思うな。やっぱり、愁とのことは大事だし」

あつ、ありがとう！ やっぱり桜花は優しいです。

桜「えへへ。それほどでもないよ」

愁「そうそう。全然たいしたことなんてないって」

桜「むっ」

・・・えっと、険悪な雰囲気になる前に話題変更っと。

ここでは対談もそうですけど、きていただいたゲストの誕生秘話みたいなものも話していきたいと思います。このキャラはどのようにやって出来たのか、みたいな。

愁「なんか面白そう」

桜「うん。私も気になるな」

そうでしょそうでしょ。

では最初に、我らが主役の愁から話していきましょう。

愁は、まあ当然かもしれませんが、最初に出来たキャラです。

最初の設定からほとんど変えていませんね。ぼんやりのほんとしていて、文武両道だったり、まだ出てはいませんが読書狂（簡単にいえば本の虫）だったりというところはまったく変えてないんですよ。

愁「じゃあ、俺は最初から俺だったということ？」

そうなりますね。それを言うと、実は桜花もそうなんです。

桜「そうなの？」

そうですね。桜花の設定も、愁の設定が出来上がった頃にほとんど出来ていて、それから中身はあまり変えていないんですよ。

愁「あんまりってことは、ちょっとは変えたってこと？」

少しは変えました。例を上げると、最初は桜花は愁以上の秀才で世話焼きな子、という設定があったんですけど、それで書いてみたら何故か上手くいなくて、今の桜花の設定に落ち着いたんです。

桜「え〜！？ それはあんまりだよ」

この理由は、愁には持ってないものを桜花に持たせたかった、

ということなんですけどね。

桜「それってなんだろう？」

さあ、それは自分自身に問いかけてみてくださいいな。

桜「ううっ。いじわる」

愁「まあでも、結局俺たちは最初からこのままってことなんだよね」

そういうことです。あと、二人の関係は切っても切っても絶対に切れない、という所もですけどね。

愁「……………」

桜「……………」

あらら、愁まで赤くして。一応設定では超鈍感、ってことになってるんですけどね。

愁「いや、今は流石に分かるって……………」

それもそうですね。これで分からなかったらとんでもないバカですよ。バカ。

愁「二回言う必要ないだろ……………」

桜「でも、愁はそれくらい言わないと分かんないよ。もっと言うちゃえ、もっと」

愁「いや、これ以上はちょっときついんだけど」

流石に堪えたようですね。

でも、愁の場合は、本当に分かっているという訳じゃないんで

すよ。本当は心の部分では分かっているんです。でも、それがいたい何なのかがよく分かっているじゃないんですよ。

まあ簡単に言ってしまうと、その部分だけまだ子供なんです。

桜「うんうん。それは言ってるね」

愁「そうなのかね・・・やっぱり良く分からないな」

いや、分かっちゃうとこれからお話が書けなくなるんでいいですよ。

愁「ああそうかい・・・」

でも、その点は桜花に任せてありますからね。そこところはバツチリです。

桜「おう！ まかしとけ」

愁「なんだか不安だな」

まあまあ、そう言わずに。

おっと、名残惜しいですがそろそろお時間のようです。

愁「なんかあんまり対談って感じじゃなかったな」

こんなものなんです。今の僕の実力では・・・

愁「おいおい、すっかりしろって。お前が書けなくなったら俺たち消えちゃうんだから」

あい。善処します。

桜「えーと、次からはどんな話になるの？」

次回からの第二章は、靈月館司書としての「非日常」を中心に書いていきたいと思っています。司書などまだまだ全員出ていないので、これからもどんどん新キャラが出てくる予定です。

愁「それじゃ、作者に一応は期待しておくか」

そうしてください。じゃないと、途中で連載中止、なんてこともありえますよ。

桜「それはやだな……………」

愁「勘弁だな……………」

そうならないよう祈っておいてください。

では、これにて失礼します。また次のお話出会えることを楽しみにしております。

愁「次の話もよろしく」

桜「よろしく〜」

## 第二章 一話・苦痛と渴望と（前書き）

いつの間にか99000PV以上に…！  
本当にありがとうございます。

## 第二章 一話・苦痛と渴望と

「過去」という言葉を辞書で調べてみると、「既に過ぎ去った時」という意味が出てくる。

過ぎ去った時。まさに文字通りだ。

その時間は、どんなに足掻あがこうと、決して戻ることはない。時の流れとはすでに一定であり、それが逆流するなんてことはあり得ないことだから。

私は、その現実を叩きつけられた。

耐え難い苦痛だ。体の痛みならどんな苦痛にも耐えよう。それであの時が戻ってくるのなら、どんな痛みにも耐えよう。

だが、心の苦痛というものは、生易しいものではなかった。

私は苦しんだ。いつも心が悲鳴を上げていた。



その為ならば、時間を……

## 第二章 一話・苦痛と渴望と（後書き）

新章突入です。今回の話は一章の終盤から出てきた雄真にスポットライトを向けたものです。

彼がなぜ幼いながらに霽月館の館長をしているのか、という彼の過去についても書きたいと思います。

## 一話・雨降る日の、二組の出来事

ザー・・・・・・・・ザー・・・・・・・・  
雨音が無数に響いている。

どんよりとした曇り空から降ってくるそれらは、時に人を助け、時に人を襲う。それは気まぐれな風のように。

ザー・・・・・・・・ザー・・・・・・・・

雨というものは、雨粒が一つ一つ合わさって生まれるもの。その一つ一つだけではコップを満たすことはできず、喉の渴きを癒す事も出来ない。それらが集まって、コップの中が満たされ、渴きを癒す事ができる。そう考えると、雨というものは人間と似ていると思える。一人ひとりができる事には限界があるが、人と人が集まる事によって、出来る可能性というものが広がる。それらと同じように思える。

ザー・・・・・・・・ザー・・・・・・・・

六月の中旬に入った今日この頃。ここ最近は何の降る日が続き、アスファルトの大地を濡らしていた。止む気配は一向になく、傘は常に持ち歩かなくてはならない物となっていた。

ザー・・・・・・・・ザー・・・・・・・・

灰色の雲が空を覆っている。透明感のある青の色彩が全く見えな  
い。

雨の日というのは、何となく人を憂鬱な気分させる。どんよりとした曇り空のせいなのか、それともじめじめとした湿気のせいなのか。理由は分からないけれど、兎に角、雨の日というものは気分をもやもやとさせ、口数を減らす。

が、そんな中にも例外というものは当然ながらいる訳で。

「ふんふん〜ん      ふん〜ん」

晴れている日なら空が夕焼け色に染まっている時間。そんな時間の中で聞こえる鼻歌は、雨音に邪魔される事なく響いている。

「ふんふふん　　ふふふん」

鼻歌。鼻歌。鼻歌。

どこにでもありそうな在り来りな音とリズムが響く。適当にやっているようにも思えるが、よくよく聴くとそれらがちゃんとした一つのメロディーを形成していた。

この天気には合わないが、青空に浮かぶ一つの浮雲のような、ふわふわとしたメロディー。柔らかく優しいそれは、奏でている者の心情をはつきりと映していた。

それを奏でているのは、雨の中を歩く一人の少女。

腰まで伸びている黒髪に可愛らしい端正な顔立ちのその少女は、雨がもたらす憂鬱さを微塵も感じさせず、逆に雨が降っていることを楽しんでいる。

「何でそんなにご機嫌なんだ？」

そんな少女の隣を歩く少年

郷風愁きょうふうしゅうが首を傾げて尋ねた。

ぼさぼさとした黒色の癖毛に眠そうな顔。いつもと何ら変わらぬ風貌のその少年とは対照的に、いつもより元気な幼馴染　睦月むつき  
桜花おうかは少年の方へ向くと、朗らかな笑顔で、

「うん？　だって、雨の日って面白いから」

と、単純かつ簡単に答える。そして再び鼻歌を奏でる。

「……………だと思った」

愁は最初から分かっていた、と言つ言葉を含めた言葉を言う。  
つい先程、学校の校門を出た辺りからこの調子で、そしてこれはいつもの事だった。

この少女は何故か雨が降るとご機嫌になる。例え小テストの結果が芳しいものではなくても、廊下が濡れていて滑って転んでも、雨が降る道を歩くと何故か機嫌が良くなる。

そう思った時、愁はある事を思い出した。

それは桜花と初めて会つて間もないころであり、その時は毎日、日が暮れるまで一緒に遊んでいた。

その日も一緒に遊ぶ予定だったが、時間が経つにつれて雲行きが怪しくなり、最終的に雨が降ってしまった。その頃の愁は、窓の外を見ながら雨を降らせた神様を怒っていた。

これじゃ遊べない……。何て事を思っていると、インターホンが鳴る音。桜花がいつも来る時間だったので、玄関まで走って行き、ドアを開ける。

開けた向こうにいたのは、可愛らしい水色の雨合羽あまがっぱを着た桜花が笑顔で立っていて、

『今日は雨だよ！　こんな日は外で遊ばなきゃ！』

何て言つて、当時の愁を混乱させた。

普通、その言葉は天気の良い日に言うものじゃないかと、幼くも思った愁だったが、結局外に出て遊んだ。もちろん、外は雨がざあざあ降っていて、当然の如く二人以外遊んでいる子供は誰もいなかった。

でも、それがとても面白かった。

ただ雨の中を走り回っていただけだったのに、いつもと違う何かがそこにあつて、結構面白かった。

シャーッ、と言つ音を聞いて愁は少しだけ横にずれる。その直後、

二人の横を軽自動車走り去り、愁が歩いていた所に水が跳ねた。

「大丈夫？」

「ん。すぐに避けたから平気」

雨の日の厄介な所は、車が走ると雨水が跳ね、最悪、靴や足が濡れること。あのぐじょぐじょとした感覚が愁はあまり好きではなかった。昔はなんとも思わなかったのに、何で成長するとそう言うのを気にするようになるのだろうか。なんてボンヤリと思った。

「にしても最近、雨が多いな」

「梅雨だから、じゃないの？」

「まあ、そうなんだけどさ。ここの雨の日が続くと、頭がぼんやりするというか……」

そう言って人差し指を頭に向けてクルクルと円を書く。

「愁はいつだってボンヤリでしょ」

「ははっ。確かに」

くすりと笑い合う二人。とても優しい時間がそこに流れていた。

いつ頃からののかも忘れてしまった時から一緒にいる二人。幼稚園も小学校も、中学も、そして、高校も一緒に二人。どこにでもいるような幼馴染だと互いに思っていたが、少年の方はかなり違っていた。

司書という肩書を持つ少年。その肩書の重みを、二週間前に桜花は知った。今まで、ボンヤリとしているけど優しく、いつも一緒にいてくれる男の子としか知らなかった桜花にとって、その衝撃は少なからずあった。

けれど、それでも二人は変わらなかった。それどころか、進展さ

えした。

最初はぎこちなさがあったものの、今ではそれはすっかりと消え、  
今までと変わらずに接し、そして、

「・・・・・・・・」

不意に、桜花の手が愁の手を包むように握る。

その行為に一瞬だけ驚いた愁だったが、やがて小さく微笑み、ぎ  
ゅっ、と軽く握り返す。

二人並んで歩いていきたい。

それが、二人が望んでいること。願っていることだった。

「うん。雨の日も悪くないな」

本音を口にする。「でしょ」と同意の声を上げる桜花。

「まあでも、こう続くっていうのは流石に、な」

「うん、そうかな？」

二人同時に空を見上げる。

灰色の雲が立ち込めるその空は、二人の思いなどお構いなしとい  
った風に雨を降らし続けている。桜花はそれをただ見ているだけだ  
ったが、愁の表情はどこか憂いを帯びたものになっており、それに  
ふと気付いた桜花が尋ねる。

「？ どうしたの、愁」

「ん。ちよっと、な」

慌ててその表情を消したものの、じーっ、と見つめてくる幼馴染  
の少女。苦笑して誤魔化しているものの、それが長く続くはずもな

く。

「……桜花はさ、雨が好きだって言ったよな」

「えっ？ うん、そうだけど」

「まあ、何て言うか……あいつはその反対なんだよな、なんて思ってたさ」

「あいつ？」

桜花が首を傾げるも、その問いには答えない愁。その幼馴染の少年を不思議そうな眼で見っていたが、大切な事と思ったのか、それ以上は何も聞かなかった。

あいつにとっては、ほんと、何て言うか……

そう呟き、また空を見上げる。

雨が止む気配は、今の所なさそうだった。

「うーん。どうしよう……」

場所は変わって、涼月学園の中等部校舎入り口。そこで小さく溜息をつく少女が一人、佇んでいた。

「はあ……ほんと、ついてないよ」

はあつ、と、また小さく溜息一つ。少女は先程からこの行動を繰り返していた。

小さなポニーテールを二つに分け、左側に三つ編みを作った焦げ

茶色の髪に可愛げな顔の少女  
り困っていた。

北條小夜（ほうじょう せいや）は見た感じの通り、かな

殆どの生徒が帰宅するか部活動に参加しているこの時間。校舎の入り口には小夜以外に人の気配は無く、その雰囲気は何とも寂しい感じだった。

「あゝあ。雨さんの意地悪……」

などと愚痴を零してみるが、返事など返ってくるはずもなく、逆にその眩きが更に溜息を作る要因となってしまうていた。

この小夜嬢。いつもなら今日は所属している部活の活動日だったのだが、顧問の先生の突然の用事で中止になり、だったら早く帰ろうと思い降りてきたまでは良かったが、持ってきていた傘を忘れていた。あゝあ、と溜息をつきながらも教室に戻り傘を持ってさ帰ろうとしたのだが、肝心の傘が見当たらず、どうやら誰かが間違って持って帰ってしまったよう。

そんなこんなで、今現在、入り口で途方に暮れているといったところであつた。

「雨、止んでくれないかな……」

そんな淡い期待を抱き、空を眺めてみたが、そんな希望をあざ笑うかの如く、止む気配は微塵にも感じられなかった。それどころか、先程から少しずつ強くなってきているように思った。そしてふと、朝見た天気予報で今日は一日中、雨は止むことなく降り続くと言っていた事を思い出す。

「……」

無言で空を眺める小夜の表情がだんだんと陰鬱を帯びていく。



「はい。今までちょっとした用事があった」

そう言っつて小さく笑う雄真。それを見た小夜は更に顔を真っ赤にする。

(うつつ・・・かなり重症なのかな、あたし)

この様子から察するように、小夜嬢は雄真少年に恋心を抱いている。が、その思いを打ち明けようとは全くと言っつていいほど思っつていなかった。小夜嬢は、自分は雄真少年から見たら「クラスメイトの一人」としか思われていなくて、更に自分よりも頭が良くて綺麗な子など幾らでもいるから自分は釣り合わないなどと、かなりマイナスの方面で事を考えてしまっつていた。

この考え方のせいで、告白しようと思っつても、自分何かとでは、と思っつて諦めていた。それでも、こうして会話していると、雄真への想いを募らせている自分がいる事を知っつてしまふ。どうすればいいのか、自分でも分からないでいた。

「北条さんはどうしたんですか？ 今日には確か、部活の活動日と伺っつていますけど」

「うん、そうだったんだけどね。顧問の先生の急用でやらないっつてことになっつちゃっつて。それで、だっつたら早く帰ろっつつて思っつたんだけど・・・」

はあ、と小さく溜息。

「持っつてきた傘を誰かに間違われて持っつて行かれちゃっつて。今は知っつて帰ろっつかないっつて思っつてたんだ」

あはは。と乾いた笑いをする小夜。雄真は「そうだっつたんですか・

「……」と、何故か申し訳なさそうな表情をしている。

「じゃ、じゃあ、お先に失礼するね」

とりあえず、雨が強くないうちに帰ろうと、再び走る姿勢をとる。

「あ、ちょっと待って下さい」

と、何故か雄真に呼び止められる。

雄真はどうしてか、制服の両袖を捲<sup>まく</sup>る。それが終わると今度はポケットから一枚のハンカチを取り出し、それを広げて自分の右手の上に被せる。更に空いている左手もハンカチで被せ、揉み手の形を作る。何をするのかと小夜は不思議そうな顔でそれを見て、それを見た雄真は何処か悪戯っ子が見せる笑みを浮かべる。

「では……ハイッ！」

言ったのと同時に、ぐつ、と両手に力を込める。しばらくの沈黙。ふうつ、と一息ついて手を解き、ハンカチの中から出てきたものは、

「えっ？」

雄真の髪の色と同じ、黒青色をした小さな折り畳み傘がその手に握られていた。

「はいどうぞ。この雨の中を濡れて帰るのを見送る訳にはいきませんから」

「……あ、ありがとう」

折り畳み傘を受け取りつつ、今の手品が生み出した驚きに、小夜は支配された。雄真は両袖を捲っていた。だから袖の中から出てくる、という推理は最初に消える。というより、この大きさの傘が袖の中に入っていたら絶対にバレル。かといってハンカチに細工がしてあった、という事もありえない。本当に魔法のように、一瞬にしてそこに現れた。

顔が熱い。自分の顔が熱を帯びていることに気付く。きっと雄真くんから見たら、すっごく顔を真っ赤にしているあたしが見えるのかな……。そういえば、あたしはいつも雄真くんに助けられている気がする。あの時だって、

「あの……。北条さん？」

「はひ!？」

先程からぼーっとしている小夜に不思議そうな眼で見ていた雄真。そしてそれに気付いてあたふたと慌てる小夜。対照的な二人の様子。

「なんだか雨脚が強くなってきていますし、そろそろ此処を出た方がいいと思います」

「えっ、あ、う、うん! そうだね!」

外を見てみると、確かにさっきより雨が強く降っているような気がする。ザーツ、という雨音が地面に打ち付けられる音が強くなっている。

「じゃあ行きましようか。確か、途中まで一緒でしたよね？」

「……………えっ?」

思いもしなかった展開に再び変な声を上げる小夜。そんな小夜の様子など露知らず。雄真は傘を開いて外に出る。

「？　どうかしましたか？」

この時、小夜が心の中で飛び跳ねるくらい喜んでいたことは、雄真には分かるはずもなく。

「うん！　なんでもないよ！」

先程の憂鬱さは何処へやら。小夜の元気パラメーターは満タンになり、勢い良く外へと飛び出した。

二人並んで校門を出た後右に曲がり、そこからは互いに別れるところまでずつと真っ直ぐな道。その道を、雨が降る音を耳に響かせながら歩く。道中、学校で起きた他愛ない出来事を話し、和気藹藹とした雰囲気になっていた。

「そういえば今日、先生に呼ばれたよね。どうしたの？」

「ああ、あれですか……。実は、この間やった中間テストの回答についてなんですけど」

「うん。」

「その時、学校で教えていない……。というより、普通だったら絶対にやらないような計算で解いてしまって、これは一体何なんだ、って泣きながら尋ねられてしまって……。」「

「……。一体どんな計算だったの？」

「うん。それについてはノーコメント、お願いします」

困りながらそんな事を言う雄真に、

そういつた会話の中で、小夜は雄真とこんなにも話した事が初めてだった事に気付く。普段、席も近いので割と話している方ではあったけど、こうやって二人きりになって話すことは実は無かった。そう思うと、胸の奥がポカポカと暖かくなってきた。

そんな時、「にゃー」と、猫の鳴き声が一つ聞こえてきた。

「？」

鳴き声をした方を見ると、そこにはコンクリートの壁の上に座っている黒猫が一匹、二人の方を見ていた。

「あつ、シフじゃないですか」

「雄真さんの知りあい猫さん？」

「はい。愁さんの家の猫なんですよ」

そういうと、雄真は黒猫、もといシフの元へと歩き、小夜もその後ろにくっ付いて行く。

近くで見ると、とても不思議な雰囲気纏う猫だな、と小夜は思った。特にその中で一番目を引いたのは、金色をした双眸そつぱうだった。こんな目を持った猫がいるんだ、と思いながらそれを見ていると、その目が持つ何かに引き寄せられる、そんな感覚になった。

「君は雨が降っていても関係ないんですね」

「にゃー」

よしよし、とシフの頭を撫でる雄真。チリン、と首にかけてある鈴が鳴る。

「ね、わたしも触って大丈夫？ 人見知りとかする？」

「いえ、平気ですよ。シフは大人しいですから」

ほら、と行って座っていたシフを抱きかかえ、小夜の方へ向ける。「にゃー」と小夜に挨拶するように一鳴きするシフ。

それを聞いて、シフの頭に優しく触る小夜。さらさらとしている

毛並はとてさわり心地が良かった。シフも撫でられて気持ちがいいのか、目を閉じてすりすりとしてくる。

「へえ。人懐っこいんだね」

「ええ。でも、北条さんは特に気に入られたみたいですね」

「そうなの？」

「こうして自分からすり寄ってくることは、初対面の人では殆どないですね」

そうして暫くシフいじりを続けていたが、雨が先程四強くなり始めてきたのでシフから手を離れた。すると、シフは雄真の手からすりりと抜け、再び壁に上って一人歩いて行った。

「行っちゃった」

「いつも一人ですからね。今日は雨だからあのまま帰ると思いますけど」

「ふーん……。あつ、そういえばさ」

「はい？」

小夜はシフを撫でていた時に思った事を雄真に話す。

「シフ、だっただけ。あの子、こんな雨の日なのに全然濡れてないように思っただけど……。私の勘違いかな？」

手がシフの頭に触れた時、毛が乾いていることに気付いたが、そんなことはないと思い特に気にしなかったが、よくよく思い返してみると、体の方も全然濡れていなかったような、そんな気がした。

「……。たぶん、気のせいだと思いますよ」

「うーん。そうだよな」

どうしてか、雄真が引き攣ったような、そんな笑みをしていた。雄真のその表情も気になったが、自分の勘違いだろうと思って疑問を消した。

ザー…………と雨は降り続けている。傘に当たる雨音も先程より大きくなり、強くなってきたな、と思い、そろそろ行こうかそう雄真に言おうとした時、

「…………雄真、くん？」

雄真は空を見上げながら、小夜が今まで見た事のない、色彩が、感情がない顔をしていた。

「……………」

聞こえていないのか、聞こえないふりをしているのか、小夜の言葉に全く反応しない雄真。一言で表現するなら、抜け殻だった。入れ物だけがそこにあって肝心の中身がない、抜け殻。

その突然の変化に小夜は戸惑ったが、そういえばと、思い出した事が一つ。時々、本当に時々、雄真は今のような状態になる事があった。ふと何気なく彼の方を向いたとき、そこにいたのは、今のような抜け殻な存在。よく目を凝らしていなければ、周囲に溶け込んで消えてしまいそうな、そんな儂い存在。

そして、そんな状態になる時は必ず、雨が降っていた。流星にこれ以上は、と思った小夜は雄真の肩にそっと手をのせて呼びかける。

「雄真くん」

「…………えっ」

ようやく気がついたのか、それと同時に色彩と感情が下書きに絵の具を塗ったように戻る。最初に小夜の顔を見て、そして自分の肩に触れている小夜の手を見て、

「　　っ！！！」

ボンツ！　と理科の水素実験のときに出た音を十倍に弾き出したような、そんな爆発音と共に顔から煙がもくもくと上がる。顔全体が熟した林檎のように赤みを帯び、いまにも溶けて崩れてしまいうだった。

「あ、あわわ、あああ、あわわわわあああああ」

言語能力さえも失われ、今この状況を理解できなくなってしまうている。それを見ている小夜も「え、えええっ！」と同じようにパニック状態に。

しばらくこんな状態が続き、先程の神秘的な雰囲気はどこ吹く風となった。雄真はしきりに頭を下げて「すみませんすみません！本当に申し訳ないです僕の事を心配して下さいなのにこんな事になるなんて本当に申し訳ございませんあ何て僕は最低なんだかこんな時にあんなに取り乱すなんて本当にもう」と嘔まずに謝罪の言葉を延々と続けていた。小夜は「そんな、大丈夫だから………」と、そんな雄真を宥めていた。

雄真の唯一の弱点、と言ってもいいだろうか。この幼顔おさながおの少年は女性に対する免疫が皆無と言っていいほど無い。別に普通に会話をするだけなら何も問題ない、のだが、女性の体の一部がほんの少し触れるだけで、先程のように取り乱してしまう。

小夜がこの事を知ったのは、今から一年とちょっと前。同じクラスになった時に女子生徒の誰かがちょっとしたおふざけで雄真に抱きついた事があった。が、その時に小爆発を起こして次の授業を丸

々一時間を保健室で過ごすという事件が起こり、それ以来、女子たちは雄真に触れないようにと気を配るようになった。それでも、やはり不可抗力というものがあり、その度に顔を真っ赤にしてしまうのは仕方ないことだろう。

「えっと、どうしたの。急にぼーっとして」

ようやく落ち着きを取り戻した雄真に小夜は問いかける。途端、雄真の顔にはほんの少し陰りが生まれた。それを見たとき、聞かない方が良かったかな、とも思ったが、話さなくてもいいよという前に雄真が話し始めた。

「……北条さんは、雨、好きですか？」

「？ 雨って……この雨のこと？」

「はい。この雨です」

唐突にそんな事を聞く雄真。その質問の意図はまるで分からないが、雄真の表情がいつになく真剣だった。

「うーん、そうだね……わたしは、好きな方かな。よく、雨が降ると憂鬱になる、とかあるけど、私は逆かな。なんか、自分の中にあるもやもやしたものの全部、雨が流してくれそうな、」

此処まで言って、何て恥ずかしい事を言っているのかと思ったが、雄真は笑うことなく「そうですか……」と言ってまた空を見る。

「雄真くんは、雨、嫌いななの？」

思いきって聞いてみると、困ったような、そんな笑みを浮かべた。

「そう、ですね。僕は雨が嫌いです」

そう答えて「そろそろ行きましようか」と言って再び歩き始める。

それを見た小夜は、霧月雄真という少年の心の深淵となる部分を、

少し、ほんの少しだけ見えたような気がした。

そこにあっただのは、灰色をした、哀しみという感情だけだった。

二話・雨降る日の、二組の出来事（後書き）

ここらで変わったことが二つ。一つは小夜の苗字が北条に変わったこと。一つは小夜の髪型が変わったことです。

この二章はかなり文章が変わると思います。多分、前のよりは良くなっていると思つのですが……

感想、誤字脱字の指摘など、よろしければお願いします。  
それでは、また次回。

### 三話：メグさんの説教＋帰って来た司書二人

カツン、カツンと足音が響く。

意識していないのに、このようにリズムよく出る音を発している足は愁の足で、この音が響いている場所は霽月館にある一つの長い廊下。なのだが、この廊下の壁にも書架が隙間なく綺麗に配置されている。それに納められている物は殆どが分厚く古いものばかりで、その中には既にこの世に存在しないとされているものも数多くある。

確かここは宗教についての本がある所だったかな……一体どれくらいあるんだか、なんて考える愁。

実際、この書籍館に保管されている書物の数を正確に知る人物は誰もいない。どこにどんな本があるのかは知ってはいるが、それがどのくらいなのか、というのは分からない。

と言っても、特に気にもしていない、というのもあるが。

つい先程、桜花と別れた時、ある一つの用事を思い出して此処にいる訳だが、何故にこのように瞬時に来られたのか、と疑問に思いかもしれない。と言っても、その問いの答えは実に簡単。司書たち全員には魔術式が組み込まれたカードが配られており、それをどれでもいいから扉にかざして開けるとあら不思議。一瞬にして公文書館の地下五キロ下にある秘密の部屋の霧困気を醸し出しているこの場所に行けてしまうのだ。

桜花も一緒に行こうかと申し出たが、愁はそれを断った。理由は、本来ならば今日は司書にとって数少なく、尚且つ貴重である「休日」だから。

それでも愁は、今日の内にやらなければならぬ事があった。

しばらく歩いていたら愁だったが、やがて周りの風景から見事に外れている重厚そうな扉が出てくる。愁はノブに出をかけると引っ張って中に入る。

「メグさーん。いますかー？」

扉の中の部屋は広くて明るく、そして色々な物でごちゃごちゃしていた。

広さは小学校の校庭くらいだろうか。かなり広い空間で天井にはいくつもの照明が付いている。その中にある物は多種多様な機械類。そのほとんどが愁には理解できないものばかりだが、何かを作るといふ目的を持った作業用機器ということとはなんとか分かる。

霽月館の中でもかなりの規模を持つこの部屋は、【霽月館技術開発研究所】という長つたらしく味気ない名称があるが、司書たちは【ラボ】と、こちららも味気ないが実地的確で尚且つ簡略化されていることからこちらの方で呼んでいる。

「おろ？ 愁ちゃん。今日までは休暇だった筈じゃが」

疑問の言葉が奥から聞こえてくる。それから少しすると、両手で部品類が入っている箱を抱えている少女。ではなく、女性。とは外見だけでは絶対に言えないほどの幼い容姿と、愁と同等かそれ以上にぼさぼさとした水色の長髪を三つ編みにし、眼鏡をかけた人物がやって来た。

「おつす、メグさん。相も変わらず、って感じだね」

「その言葉に多少の侮辱が含まれていると思うのはわしだけじゃろうか？」

と、恨めしつつも笑っている女性。望月恵は手に持っている物を近くの作業台に置き、愁の元へとやって来る。

「で、だ。本当にどうしたんじゃ、急に」

「うん。ちょっと、ね」

「……まあ、手に持っている物で大方の予想はつくがの」

ふう、と小さく溜息をつく恵。

恵の視線の先には愁の右手があり、そこには直径が約一メートル半くらいのケースが。視線が向けられていない左手にも、麻色の鞆袋に包まれた何か、もとい刀が握られていた。

「どれどれ、ちょいと見せとくれ」

愁は右手にあるケースを恵に差し出す。それを受け取った恵は作業台の方まで行きそれに乗せる。そしてかちやり、という音と共にケースを開けると、「うおう」と妙な驚きの声を上げた。

「こりやまた随分と派手にやらかしたものじゃな」

ケースの中には、ばらばらに砕け折れた一本の刀があった。普通なら「折れている」という表現だけで十分なはずだが、ケースの中にあるそれは文字通り「砕け折れている」だった。刀身の中心から丸で窓ガラスを金槌か何かで思い切り叩いて割ったように砕けていた。

「これはいつたいどうやって壊したんじゃ？」

「壊すだなんて失敬な。俺が乱暴な扱いする訳ないでしょうが」

ふんつ、と鼻を鳴らして訴えるが、何故か目の焦点が恵に向いていなかった。

「……別に、稽古している時に無茶苦茶してバリン、なんて事はしてないよ」

おもいつきししていた。

恵はその言葉につっこまず、ケースの中から柄の部分だけを取り出す。しばらく色々といじって折れた刃を柄から取り外す。そしてケースの中に散らばっている刀身の破片全てを取り出して作業台の上で一か所に纏めた。

「九本目。稽古中に愁ちゃんによる無茶が原因で大破。と言いたいところじゃが、どの道これはこうなっていたな。刀身の強度を上げ過ぎたのが原因かの……もう少し柔軟性を取り入れた方がいいかもしれないな。じゃが、そうなると切れ味がどうなるかじゃな……愁ちゃんくらいの技量なら多少切れ味が落ちた所で問題ないとは思うんじゃが、やっぱり何かを犠牲にして、というのも納得いかんしな……となるとやっぱりこつちをこつちしてこれを引き上げて」

ぶつぶつと独り言を呟く恵。こういう時は周りの事をまったく気にせず自分の思考の海へ入ってしまうので声をかけない愁。

多分、十分くらい必要かな……そう思ったその時、そういえばと左手の中にある物を忘れていた事に気付く。

「やっぱし、お前以外だと駄目なのかな」

そこに誰かいるように尋ねると、結んでいる紐を解き中にある物、刀を取り出す。全体の長さは柄も含めて一メートルとちょっと。鞘は腰に着けるための金具以外は何の装飾もなく、全体的に質素な造り。悪く言えばこれといった特徴が何も無い物だった。

柄を持ち、一気に引き抜く。

そこに現れるは一つの刀身。だがそこには、刀には付き物の血生臭い穢れが一切無かった。あらゆる物を映すとも思えるほど曇りが無く、純水のように澄み渡りまるで鏡のよう。その投信がある空間

だけが、どこか別の雰囲気を持っていた。

「相変わらず、と言っていていいほどじゃのう」

いつの間にか思考を終えていた恵がそれを見てぽつりと呟く。

「天下五剣の一つ、三日月宗近みかづきむねちかの作者、三条宗近さんじょうむねちかが作り上げた裏刀うらがたなの一つ【水鏡すいけい】。いつ見ても素晴らしいのう」

きらきらと目を輝かせながら見ているその様子は、本当に小学生なのではと思うに十分だったがそれは心の中に留めておく愁。

恵が言った裏刀とは、歴史の表舞台に出てきていない刀剣類を指している。そのほとんどが強力な力を宿しているため別名では神剣と言われる事もある。現在分かっている所で総数わずか十二。そのうちの半分は既に失われており、現存している残りの半分は書籍館で厳重に保管されているか、郷土家のように代々継承されて残っているのみとなっている。

そんなとんでもない物と同じ物を作ってほしい、なんて無理じゃろつて　　と思っていた恵だったが、そんな時、

「あのさ、メグさん」

「ん、どうしたんじゃ？」

「えつと、その、大変、申し上げにくいことですけど……」

また愁の目が右往左往している。

「その、さ。メグさんに作ってほしいって言った刀の事なんだけど」「うん？」

「その、」

ぼそぼそと聞きとりにくい声で伝える愁。それを聞いた恵は、

「はあ!？」

とつてもご立腹だった。

「ちょ、ちょいまでい愁ちゃん。なんだ、本当にそれでいいのかわしの聞き間違え、なんて事じゃなかるうな」

「……いえ、今言った事は全て本当のことです」

しゅわしゅわという音が聞こえそうなくらい縮こまった愁。一体何を言ったのか。とにかくとつても縮こまっていた。

「このバカたれい!!! そういうことは最初から言わんかい!!!  
! こつちは睡眠時間を削ってまで作つとつたんじゃぞ。まったく」  
「ほんと、すみません……」

その後、約一時間ほど恵の説教を受けた愁なのであった。

「それで、今の今まで叱られていた。ということか」

パチン。

「まあ、そんなところです」

パチン。

「で、結局言い忘れていたというのは一体何なんだ？」

パチン。

「それはちよいと内緒です。それ言っちゃうと静穂しずほさんがすぐに相手しろ、って言いそうな気がするから」

パチン。

「成程。確かにあの人ならあり得る話だな」

パチン。

「げっ、そこに打ってきたか……」

「ふふっ。これならどうだ？」

場所は変わって中央室。前に桜花が来たときに雄真たちと話をした部屋である。

そこで愁は将棋をしていた。昔からこの手の遊びは好きで、暇があればこうして打っている。

いま愁の相手をしているのは一人の女性。淡青色の長髪で、男装でもさせれば見分けがつかないほど、と言っても可笑しくないほどの端正な顔立ち。

この女性。愁と同じ司書である美作凛みまさかりんという名で、つい最近まで

東北の方に行っていたため不在だったが、つい最近依頼を終えて帰って来たのである。

「うーん。やっぱし凜さんは強いな」

「これに関しては、お前に負ける訳にはいかないからな」

「ちえっ」

髪をくしゃくしゃと掻く愁。どうやら愁の敗北という事で勝負がついたらしく、駒を片づける二人。

「そつえば、あつちで何してきたんすか？」

手を動かしながら何気なしに聞く愁。

「ああ。【貫く剣】デュランダルからの協力要請があつたんだ。福島の方に大型の魔物が現れた、という情報が出たということだった」

「情報？」

「なんでも、夜に現れて日が出始めた頃には姿形もなく消えた、という事だった。現れるだけ現れて何もしていないんだがな」

片付け、と言っても箱に駒を入れるだけだが。も終わり、凜の話に耳を傾ける愁。

「でだ。樹いっせと二人で現地に行き、そこにいた【貫く剣】のギルドメンバーと一緒に搜索した。そして夜になると」

「現れた。ということですか」

そついう事だ。とは言わず黙って頷く凜。

「中々に手強かった。と言っても、討伐した訳じゃなく封じただけ」

なんだがな」

「へえ……どんな奴だったんですか？」

「それが、かなり昔に封じられていた荒神こうじんだった」

荒神。文字の通り荒ぶる神。人に危害や不幸を与える神々の総称である。何でも地域によつては荒神信仰なる物も存在しているみたいだが、基本的には人に恩恵などは与えない。

「成程ね。でも、夜にしか現れないって言うのは何か変だな」

「ああ、それについては分かっている。そいつが封じられていた場所にほんの少し、本当に少しだけ亀裂が入っていてな。そこから奴の一部が洩れていたんだ。そして夜とは、そう言った類の奴らが活性化する時間帯だ。夜の力を受けてようやく実体化した、という事だったんだ」

「へえ。じゃあ、その封印は？」

「ちゃんと修復しておいた。周りにも強力な人避けの結界を張っておいたから、何も起こらなければ、大丈夫だろう」

「……引つかかる言い方だね。っても、どうせどっかの誰かが人為的にやった、でしょ？」

疲れたような顔をしてそう言う愁。その言葉に同意するように小さく頷いて溜息を零す凜。

「まあな。だが、あまり安直に考えない方がよさそうだがな」

面倒臭い。という言葉がハッキリと顔に出ていた二人であった。荒神の封印が解けた。それだけ聞くとかなりの一大事なのでは、と思うかもしれないが、此処に所属している二人にしてみれば何らいつもの非日常と変わりなく、面倒な問題が一つ増えた、という事にしかならないのである。

「おつ、なんやなんや。二人とも此処におつたんか」

そんな時に聞こえてきた陽気な声。その声に二人とも振り返ってみると、扉の所に約一名、男が人懐っこそうな笑みを浮かべて入って来るところだった。

「にしても、相変わらず他の奴らは忙しいのう。もう少しはゆとりつちゅうもんを持っておつた方がええつてのに」

深緋色の短髪しきびのその男は、司書の一人である白縫樹しろぬいじゅ。凧と共に東北に行つていたため最近まで不在だった。

「おつ、樹さん。これまた久しぶり」

「おう愁。ワイがなくて寂しかったやろ？ ワイの胸に飛び込んできても」

「いえ全然」

「……そこは嘘でも寂しいつて言うところやろつが」

愁の躊躇ためらいの無い一言にしょんぼりとする樹。この男、大阪出身でもないにも拘らず大阪弁を使う、いわゆる似非えせ関西人なのである。前に愁が、「どうしてそんな喋り方なんですか？」と聞いても、「さあな」とはぐらかされた。

「つと、そうや凧。雄真に報告済ませといたで」

「そうか。すまない、助かる」

「いや、別にええつて。凧はそういう所は律義やな。ホンマ変わらんわ」

感心しているのか、呆れているのか、はたまた両方なのか。その

どちらか分からない言葉を呟く樹。この二人は司書になってからの付き合いなのだが、二人でいる事が結構多い。樹曰く「運命の赤い糸で結ばれとるんやな」ワイラ。いやはや神さんも捨てたもんじゃないな」などと言っているが、凜曰く「籤運くじうんが悪いだけだ。他意など金輪際、無い。あり得ない。そんな物があつたら切り捨ててやる」らしい。

「これが私だということだけだ。何か問題でも？」

「いや。確かにそうなんやけど……もうちよい、かるくした方がもつとええんやけど」

「ちよいちよい樹さん。凜さんは樹さんと違って真面目なんだから、樹さんカラに染めないでくださいな」

「……最近、愁のツツコミも冷たく鋭くなってきたな」

しょんぼりと落ち込む樹だったが、見ても全然同情の念など湧かないのでそのまま放置する愁。凜は元々樹の方を見てもいなかった。

「そう言えば愁」

「ん？」

ふと思い出したように尋ねる凜。

「桜花とは、あれから何ともないのか？」

「……うん。信じられないくらい何ともない」

一週間前に桜花が来たことは既に周知になっている。というより、七年前に起きた事件でもう桜花のことは知っていたので、いざれこ言う時が来るんじゃないか、とは誰もが思っていたりしていた。それが何とか治まってホッとしている、という所である。

「まっ、何にしても良かったやないか。そこは桜花ちゃんに感謝せんとな。なかなかいないで、そんなええ子は」

「……分かってますよ」

噛み締めるように、呟く。

もう二度と、あんな思いはしたくないから。他の誰かにも、あんな思いはさせたくないから。

だから司書になろうとした。沢山努力した。くじけそうになった時も何度もあった。それでも辞めなかった。

くじけそうになった時に浮かんだのは、いつも無邪気な誰かさんの笑顔。

それを見て、思って、そして立ち上がった。

そしてようやく、司書になった。

なってから知った、「守る」というとっても重い責務。  
でも、

それでも、

「俺は、守る人たちの笑顔を守りたいです」

誰か、というのは大体決まっているけど。

「笑顔を守りたい、か。なんかどっかで聞いたことあるような言葉やな」

「まあ、確かに請売りうつけいではあるんですけど。でも、俺は笑顔を守りたいんです」

至極真面目な顔でそう言う愁を馬鹿にすることなど誰も出来る筈が無かった。二人とも、その言葉の重みを知っているから。だからこそ、

「……何にしてもだ。どの道、私たちの責務はそれに尽きるんじゃないのか？」

凜が優しいな笑みを浮かべてそう言う。それに賛成するように樹を笑い返す。

「そつやな。ワイらは結局それをやってる訳やしな」

二人ともこう言う。

そんな二人を見て、愁も微笑み返した。

「さて……愁。このあと少し付き合ってくれないか？」

「ん、いいんすか？ 帰って来たばかりで疲れてるんじや」

「なに、どうってこと無い」

「成程。だったら行きましようか」

そう言う二人とも立ち上がり、自分の傍に置いてあった武器を手取る。愁の手にあるのは先程も出てきた刀【水鏡】。そして凜の右手にあるのは、装飾が施された柄に細身の刀身が特徴的な細剣レイピアと、左手には細剣と併用して使われるバリーイング・ダガー。フランス語では左手を意味するマンゴーシュと呼ばれる短剣を手にしていった。

「今日は勝たせてもらう。と言っても、この言葉をどれだけ口にしてきたのやら……」

「負ける訳にはいかないんだよね。って言っても、何回言ったかな、この言葉……」

この二人、たまにこうやって稽古をすることがあるのだが、戦績

の方は約半々。互いに一步も譲らず、かなりマジになってやっているので時たま雄真が飛鳥が止めているのである。

「あゝあ、しゃあないな。今日はワイが審判務めたるわ。互いに怪我せんといてな」

そんな樹の忠告も虚しく、二人はいつものように体中に擦り傷を作るのであった。

三話：メグさんの説教＋帰って来た司書二人（後書き）

愁君が言った「笑顔の守るために戦う」という言葉は、仮面ライダークウガのオダギリジョーさんが主役を務めた五代雄介が常に言っていた言葉です。綺麗ごと、なんて思うかもしれませんが、そんな綺麗ごとをできるような人と言うものに憧れます。愁君はそんな「綺麗ごとが出来る人間」という風に書きたいのです。

えー、ここで新しい司書たち登場。司書たちは基本、重要なキャラなのでどうか応援の方、よろしくです。

## 四話：雨上がりに

翌朝。久方ぶりの雲一つない澄みきつた青空。今まで雨雲に隠れていた太陽が姿を現す。道の所々には水たまりができていて、日の光を受けて宝石のように輝いていた。

その水たまりを数人の小学生たちがわざと勢い良く踏みながら楽しそうに遊んでいた。ばしゃんばしゃん、という音と一緒に無邪気な笑い声が辺りに響く。

「懐かしいな」

そんな光景を、少し離れた所から歩いて見ていた愁はポツリと言葉を落とす。

登校の途中、ふと耳に小さな子どもたちの喧騒が入ってきてそっちを見てみたらその光景がそこにあった。

きゃっきゃきゃっきゃと笑いながら走り去っていく小学生たち。

その光景は五日の自分にも当てはまっていたもの。それを見ていた愁はつい懐かしんでいた。

「昔は俺もあんなだったな」

そう言っつて、なんて爺臭いことを言っているのだかと思う。なんだか一気に年を食った錯覚に襲われる。

愁が小学生だった時も、雨が降った後の翌日には桜花や雄真たちと一緒にわざと水たまりの所を踏んで駆けて行った。

そんな純粹無垢な小学生だった自分も、もうすぐ十七歳。いやはやなんと早いことやら……

「どしたの愁。なんかしみじみとしちゃって」

今までの思い出を懐かしんでいた愁に横に並んで歩いていた桜花がふと尋ねる。

「ん。なんかさ、俺も昔はあんなだったなー、って思っていた今日この頃」

「なにが……って、あれのこと？」

桜花は水たまりを踏みながら走っている小学生を見て尋ねる。

「ああ。俺も小学生の時はあんなことやってたなー、って」

「なつかしいね。私も覚えてる。えーっと、確かあの時は雄真くんもいたよね？」

「よく覚えてたな。疾とつくの昔に忘れてると思った」

「そりゃ覚えてるよ。愁が水たまりを踏んだら滑って転んでばしやくん、ってなったからね」

「……そういう赤っ恥なエピソードは忘れても十二分に構わないんだけど」

桜花がそういったせいで、確かにそんな事もあった、と思いだしてしまった。一瞬にして懐かしい思い出が昔の自分の痴態に変わってしまった今日この頃であった。

何だかとても虚しい気持ちになった愁だったが、その時に愁の左腕をぎゅう、っと腕を組んでくる桜花。

「……どうした？」

「なんでもないよ、うん。なんでもない」

明らかに何でもあるだろ。と心の中でツッコむ愁。

傍から見れば学生同士の甘酸っぱい様子。だが流石に愁も外で、しかも朝の通勤や通学で人が多いこの時間にこう言った事をするのはあまりよろしくないのでは。という考えは持っていた。

でもそれは愁だけであって、桜花には無い訳で。

何と言っかこのところ、桜花がこうやって愁に甘えてくる事が多くなっていた。最初は特に気にしていなかった愁だったが、日を重ねるごとにその回数及び甘え方のレベルが少しずつ上がっていき、しまいには人の目がある外でさえこうして腕を組んでくる。くっついてくる。

「……なあ桜花」

と言いかけたは良いものの。

「？ どしたの」

ちょこんと首を傾げて尋ねる桜花。

「……やっぱりなんでもない」

「？」

こんな感じで終わる。

まあ別に、嫌なことと言っ訳ではなかった。

嫌なこと、という訳ではないのだが、

(……当たってるんだよな)

ふっつ、と心の中で溜息をつく。

そう。思春期の男子なら誰もが気にするであろう、女子の「膨らみ」部分である。愁はそういった事には疎いが、疎いと言っただけで知

らないと言つ訳ではなく、そう言った知識は周りの男子と同じであると言つ事を覚えておいてもらいたい。

さて、愁の腕に抱きつくように組んでいるということは即ち、その「膨らみ」が上腕に当たると言うことであり、その感触が腕に伝わると言つことであり、力が増えられれば加えられるほどその感触が伝わるのが強くなるということである。

これは余談ではあるが、桜花の「膨らみ」は一般的な女子の基準と比べるとそれ以上なのである。

つまり、

ふに。

流石の愁もこれには参ってしまったのであった。

と言つても、桜花がこうなつた原因は分からない、という訳ではなかつた。

愁は桜花がこうして甘えてくるのは、自分が今まで隠してきたことと司書について全て話したからだと思っている。

今まで隠してきたことを全部話したから。桜花は多分、その事が嬉しかったのかもしれない。だからこうして甘えてくるのかもしれない。

だったら、拒む理由なんてどこにも無かつた。恥ずかしいけれど。

「そういえば、昨日は霽月館に行ったんだよね」

「ん？ ああ、ちよつとな。メグさんに頼みごとをね」

「頼みごと？」

「そう。ちよつとばかり難航しそうな感じだったけど、何とかかなりそうだった」

凜との訓練？ を終えた後、もう一度恵の所に行った愁は自分の頼み事は大丈夫かと聞いてみた。そして帰ってきた返事は、

『まあ、何とかかなりそうじゃな。さつき愁ちゃんが言った条件だけなら三日と言ったところかの』

というものだった。

ちなみに今日からまたお仕事の始まり。これでまた当分は非日常とお付き合いになる愁であった。

「愁」

「ん？」

不意に、先程までの明るい表情を一変させ、真剣な顔になった桜花。その表情を愁はいつか見たことがあった。

「……今はまだ無理だけど、いつか絶対に愁の隣に立てるように頑張るから」

何か強い決意をした、そんな表情。それをじつと見る愁。

二週間前に桜花が司書になると宣言した次の日、特例で霽月館司書見習いとして所属することになった。と言っても司書のように常勤ではなく非常勤の為、司書同様の権限は持ち合わせていないが、本来なら司書になる場合には所属している司書二人以上の、見習いでも一人の推薦が必要となり、桜花の場合は愁の推薦によって見習いと認定された。

とはいえ、ついこの間まで一般人だった桜花が何かしらの技術面で秀でていると言う訳ではないので、しばらくは冬実の指導の元、細々とした雑用を少しずつこなしていきながら【魔術】を習っていくという方針で決まった。

【魔術】というのはそれぞれ一つずつ異なったものであり、例えば火や水と言った自然の力を行使する理式<sup>しつくりしき</sup>。外傷や病、人間以外の動

植物の治療と言った治療式ちゆうじき。物質のみを精製する練成式れんせいしきといった十数種類に分かれており、それぞれ数百から多くて数千の術式あると言われている。

そして、その上位に位置するのが【魔法】である。

【魔法】と【魔術】。この二つの言葉を同一と見ている人が大多数だと思うが、根本的な意味を見てみるとこの二つは全く異なる物である。【魔法】は西洋由来の「神秘的な力とその方法論」である Magic の訳語として、仏の法である仏法に対し、仏ならぬ魔の法である「魔法」としたものであり、逆に【魔術】は手品師の興行にあたっては、「魔法」や「魔道」では宗教的な意味合いを持つので不適切であったため、それらから独立した表現として【魔術】という語が好んで用いられるようになったことから「神秘的な力」ではないと言いう意味を持っている。

これらのことから、【魔術】は自然の力を行使すると言いう種がある物であり【魔法】は種が無く本当の意味での「神秘的な力」という意味になる。その区別からそれを扱う者の名称も異なり、【魔術】のみを扱う者を【術師】。そして【魔術】と【魔法】の両方を扱う者を【奏者】と分けている。

話を元に戻すと、桜花は冬実に【魔術】を習う訳である。と言ってもそれは口で言うほど簡単なことではない。

それでも、桜花はやると決意した。

理由はただ一つ。「愁の隣に立つため」。

「愁は今までいつも一緒にいてくれてたけどさ、それは『幼馴染』としての郷風愁だけで、『司書』としての郷風愁はそこにはいなかっただよなね？」

だから、両方の「愁」と一緒にいたい。

そう言おうとした桜花だったが、それは今それを伝えようとした人物によって遮られる。

ぺちんっ、と桜花のおでこに軽く指で弾く。

「……桜花、お前は勘違いしてるぞ」

ほんの少し怒ったような、そんな感情が入った言葉を紡ぐ愁。

「俺はさ、どんな時でも『郷風愁』なんだぞ。確かに司書のこととは隠してたけどさ、だからって、応対まで変えている訳じゃないっての。お前という時も、司書として活動していても、だ。そこんところは勘違いしないこと。という訳だから、」

少し間を開けて、言う。

「そんなに深く考える必要なんてないっての。焦らないで、ゆっくり着実に、だ。そんなお前はらしくないって」

につこりと、はにかむような笑顔を見せる。

それを聞いた桜花はポカンとしていたが、やがていつもの笑顔に戻ると、

「うんっ」

元気よくそれに答えた。

ふに。

が、それと同時に腕に込められる力も強くなる。そうになると、必然的に桜花の「膨らみ」が強く当たるといふ事になるといふ事で。

「……あのさー、桜花」

「なに？」

「……いや、やっぱりなんでもない」

「？」

今まで胸の中で抱えていた問題は片付いたが、当面の問題が前のよりも大変だとまた小さく心の中で溜息をついた愁であった。

「……はあ」

霧月雄真は悩んでいた。兎に角、悩んでいた。

中等部二階にある三年生の各教室。一から六まであるクラスの内、雄真は三組に所属している。

その三組の教室の窓側の席で、一人溜息をついていた。

まだホームルームまでは時間があるので教室にいる生徒の数はあまり多くはない。そんな中で雄真の溜息は結構響いていた。

「どうすればいいんでしょうか……」

そう言ってまた溜息を一つ。

ふと窓の外を見てみると、そこには雲一つない澄み渡った青空がある。

自分の心もあの空くらい澄み渡ればいいのに、なんて思ってしまっ  
う今日この頃。

「おはよう雄真……っと、今日は朝から元気が無いな」

「あ……誠さん。おはようございます……」

と、声のする方を見てみれば、そこには雄真の友達である浅賀誠あさがまことがちょうど登校してきたところだった。

二人とも一年の頃からの付き合いで、よく二人でいることからクラスメイト達からは「凸凹コンビ」なんて名称を付けられている。どこら辺が凸凹しているのかというと、それは体格の差にあった。雄真は平均身長よりも低く華奢な感じだが、誠はその真逆で身長が約百九十センチに加えて体躯が良く、実際に柔道部に入って鍛えていて高校生相手にも引けを取らない強さらしい。実際に雄真はそれが真実だという事を直接見て分かっている。

そんな二人だから凸凹。だが互いに気が合い、今現在こうしている。

「えつと、ちよつと色々ありました」

「色々、か。郷風先輩と喧嘩でもしたのか？」

愁や桜花とも親交があるため、可能性は低いがとりあえず言ってみる誠。それに対して雄真は「いえ、違います」と否定する。

「まあ、幾らなんでもありえないか。だったら、いったいどうしたんだ。別に言えない事なら無理に言う必要はないが」

「言えない、という事でもないんですけど……」

顔を少し赤らめてごにょごにょと呟く。本当に一体どうしたのかと誠は少し頭をひねってみると、ある一つの事が思いつく。

「雄真、まさかお前……」

「えっ、い、いったい何ですか？」

ビックリして聞き返す雄真。そんな雄真をじつ、と真剣な眼差しで見つめる誠。

そんな誠の口から出た言葉は

「……いや、やっぱり止めておこう。お前にはまだ早すぎたな」

「ええっ！ 一体何を言おうとしていたんですか！？ そこまで言われたら気になりますよ！」

なんとまあ、な結果だった。一体何を言おうとしたのやら。

何故か顔を真っ赤にして「いやいやいや、何を考えているんだか僕は。幾らなんでも誠さんがそんな事を言うはずはない」「などと言っている雄真に「まあそれは置いておいて」と言う誠。結局のところ置いておかれてしまった。

「でだ。結局のところどうしたんだ？ 話せることなら遠慮なく言え。雄真は友達なんだからな」

「誠さん……」

混じりけのない真っ直ぐな言葉にじーんときた雄真。

この誠少年。外見だけで判断してしまうと「本当に中学生？」と疑問詞が付いた言葉になってしまいが、その中身は「純朴」という二文字だけで出来ているからか、誠少年を慕う人は結構多い。

「そう、ですね。ここは第三者の意見も聞いてみたいですし」

決心がついたのか、少し小難しそうな顔をしながら何を言おうかと少し俯いて考える。誠は何も言わない。こう言う顔をしている時の雄真に何を話しても意味が無いことを知っているから。小難しそうな顔をしている時は、自分の思考の海の中に入って考えている時。それを邪魔することは愁でさえできない。

「……はい。終わりました」

それから数分。ようやくまとまったのか、俯いていた顔を誠に向ける。

「実は……教室に来たら、これが入っていたんです」

そう言っ  
て雄真が差し出したのは、一枚の便箋だった。

話は遡ること約四十分と少々。いつも他の人よりも早く登校する雄真は今日この日もいつもの時間に教室に着いた。そしていつものように教科書を机の中に入れようとした所で問題の物を見つけた。

薄い水色の清楚感の便箋。

まあ簡単に言っ  
てしまえば、雄真宛ての恋文だった。

最初、それを見たときは何なのだろうかと、いつも通りの冷静さでそれを見ていた。が、とりあえず何なのかと中身を見て読んでみた所でこれまたいつも通りボンツ！と景気の良い音を顔からだし、教室にいたクラスメイト達が一体何事かとこっちを向いてきたから何とか言い繕って再度中身を読んでどうしようかと悩んでいたのがある。

当然、そこに書かれていた内容は雄真への愛の告白だった。

入学した時からあなたが好きです。付き合っ  
て下さい。と、言った内容で、更に今日の放課後に屋上に来てほしいとのことだった。

こうして見てみると、思春期突入中の男子学生にとっては最高のシチュエーション、なのかは分からないが、兎に角何だかライトノベル的展開になっていることは間違いないようが無かった。

さて、そんな嬉し  
展開に雄真は、

「……どうすればいいのでしょうか」

と、疲れた顔で悩んでいたという所であった。ただでさえ女性が苦手と来ているのに、こう言った類の話は雄真の専門外だった。話を聞き終えた誠は「とりあえず」と切り出す。

「言えることが一つあるな」

「なんですか？」

「それはな、この話を最初にしたのが俺で正解、という事だ。他の奴に話していたら間違いなく恨まれるぞ」

「……否定できない所がまたなんとも、ですね」

今度は二人して溜息の二重奏。デュエット

先程も言った通り、思春期突入中の男子学生にとってこんな話をしたらどうなるのやら見当がつかない、という事なのである。

「でだ。お前はどうしたいんだ？」

「……それですよ。自分がどうすればいいのか、全くと言っていいほど分からない。です」

暗い表情で俯く少年が一人。

「……どうせお前のことだ、断るんだろ？」

「……はい」

「答えは決まっている。なのにどうしてか悩んでいる。となると、だ。その宛先人に対してどうやって断っていいのか分からない、だろ？」

「……はい」

やっぱり分かっただけで済みましたか。と思う。

目の前にいる長身の少年とは付き合いこそ愁や桜花ほどの年月は経っていないものの、二年と数ヶ月という時間以上を一緒に過ごし

てきたと思うことがある。だからこそ、このように心配してくれる。それが雄真にとってはとても有り難かった。

「人間誰しも、誰かを傷つけてしまう事がある。それは仕方のないことだ。でも、問題なのは誰かを傷つけることじゃない。大切なのは、相手を傷つけてしまっても、そのことだけに囚われてしまわないようにすることだ」

不意に、誠の口から紡ぎだされる言の葉。

「……昔、ある人が俺に言った言葉だ。今のお前にぴったりだろう  
と思っとな」

「……」  
「まあ、あんまり深く考えすぎるな。相手の事を思う事は悪いこと  
じゃないが、かと言って考え過ぎて流砂の中に入ってしまう事は良  
くない。素直に、自分の気持ちを伝えればそれでいいんだ。相手に、  
真っ直ぐとな」

ある人。その言葉に一人の人物の顔が思い浮かぶ。

……やっぱり、まだまだ勝てませんね。

そう思いながらも、雄真の心は先程よりも澄み渡っていた。

「ありがとうございます、誠さん」

「別に。俺はただ人の言葉を代弁したに過ぎない」

「それでも、ですよ」

ふっ、と笑い合う二人。

「そついえば、誠さん」

「ん？」

「それを言われた、ってことは、僕と似たようなことでもあったんですか」

「……ノーコメント、だ」

そして逆に曇ってしまった誠であった。

#### 四話・雨上がり仁（後書き）

かなり久々の修正です……夏休みなので何とか頑張りたいと思います。

## 五話：雷光纏いしその一閃

「ねーえ、凜さーん！」

「どうしたー愁ー！」

少し大きな声で尋ねる愁と、こちらも少し大きな声で返す凜。

「とりあえずー聞きたいことはいっぱいあるんだけどー。今はーと  
りあえずーつだけー。ーつだけどうしても聞きたいことがあるんだ  
ー！」

「いったい何だー！」

そう聞く凜に、愁は

「どうしてさー、俺たちっていつもこういう状況にいるのかなー」

午後五時三十七分。そろそろ帰宅者が増えてくる今日この頃。郷  
風愁と美作凜は一地上から約一キロ離れた上空を翔ける一頭の飛竜

の背に乗っていた。

事の始まりは今から三十分ほど前。

今日から非日常に戻った愁は自分の作業機に向かって束になつて  
いる書類と格闘していた。休みが終わって早々、いきなりなんとも  
味気ないものだと思いつつも、とりあえず黙つて、黙々と文明の利  
器<sup>ン</sup>で印刷された活字に目を通しながら記入する所には記入を、間違  
っている所には修正をしながら一時間が過ぎようとしていた。

「あー……眠い」

ぐうつと背伸びをして椅子にもたれかかる。

愁がいるこの部屋は司書になったときに与えられたものであり、  
広さは約二十畳ほど。因みにここは昔、俊瑛が使っていた所で、彼  
が残した者がそこら辺にまだ残っている。他には愁が好んで読んで  
いる様々なジャンルの本が詰まった本棚や、仮眠用のベッド、郷風  
家が代々引き継いできた刀が数本、立てかけられている。

つい先日、恵に刀の制作を頼んでいた愁だったが、別に刀が無い  
と言う訳ではない。というより、十分なほどに刀はあるのである。  
ただ今回、愁が頼んでいるのは「ある事」の為にどうしても必要と  
言うだけであり、普段の戦闘で必要なものは全て此処にちゃんとあ  
るのである。

「少し寝たい……」

などと口にはするものの今寝たら確実に睡魔にやられて夢の国へご招待、なんて事になることは目に見えているのでベッドにダイブしたいという誘惑を振り切って再び書類の方へと目を向ける。

その時、コンコンと部屋の扉がノックされる音がしたらと思ったらガチャリと扉が開かれる音。

「愁、茶を沸かしたんだが飲むか？」

とりあえず一通り終わりを迎えたちよūdごその時、ちよūdごいいタイミングで凧がやって来た。ちよūdご何か飲みたかったと思つて振り返り見てみると、いつもは整えられている髪が少しだけ乱れているのに気付く。礼節を重んじている凧は髪の手入れも毎日欠かしていなかった。

「さんきゅう凧さん。で、もしかして昨日泊まったの？」

「ああ……まあ、そんなところだ」

そう答える凧の声に疲労が宿っているように思った愁。ここ最近  
は昨日以外あまり顔を出していなかったから、いま此処（露口館）がどうなっているのか分からないでいた。といつても、忙しいと言ふ事（事）に変わりは絶対ないだろうが。

愁の前にお茶が入った湯呑を置くと、近くにあつた椅子に腰をかけると目をぎゅっと抑える凧。余程疲労が溜まっているのか、昨日会つた時より老けて見えてしまつくらいだった。

「疲れているみたいだけど、何かあつたの？」

「ああ……ちよūdと『家』の方が、な」

「あー……成程ね」

それを聞くとつい苦笑してしまう愁。

凜の実家である【美作家】のことを愁はよく知っていた。いや、この書籍館にいる司書全員は知っているだろう。それほどにまで周知であり、そして思わず苦笑してしまう事なのである。

美作家は歴史の表では明治維新後に偶々やってみた海運業が大当たりして、一気に富裕層に転じた成金の家である。それは現在も続いており、今では日本の約三十パーセントを占める貿易を行っているほどで、その筋の人で知らない人はいない。が、それもやはり表の姿であって、裏の姿は霽月館を支えるスポンサーの一つである。それに加えて、美作家は武の名門としても知られており、凜自身も愁に負けず劣らずの細剣の使い手である。

そしてその美作家現当主であり、凜の父親である美作郡司ぐんじは、今現在も一流の剣士として知られており、巨大な貿易会社【美作商事】のトップにいる人である。

これだけを言ってしまうと、立派な人物なのだ、という印象だけがありがたそうだが、ここ霽月館で働く司書たちにとってはそれだけではなかった。

郡司氏はとつても、いや、大変な子煩悩であった。

一人娘という事もあってか郡司氏は、それはもう、こつちが引いてしまうほど凜の事を可愛がっており、それは二十代後半である今現在も継続中だった。

「子供思いの良い父親、といえは聞こえはいいが、結局は向こうが子離れ出来ないと言ふことにもなると言ふのに……」

「あははは……」

ふつつと溜息をつく凜に苦笑するしか出来ない愁。

「でも、俺は凄いなだと思っけどね。凜さんがどう思っけかは別として、人間としてはとつても出来ている人だと思っけな」

「まあ、それはそうなんだが、な」

「またもや溜息をつく凧。その様子に愁はふといつもと違う何かを感じた。いつもだったら最後に「まったく」といってそれで終わりなのに対して、何故か今回はやたらと沈んでいた。」

「なあ凧さん。なんかいつもと違うような気がするの俺の気のせいかな？」

「とりあえず思いきって聞いてみることにした愁。」

「……ああ。やっぱりそう言う風に見えるのか。いまさっき飛鳥にも言われたよ」

「飛鳥さんに？」

「ああ。いつもと様子が違うからどうしたのか、とな」

ふつと苦笑する凧。

「実はな……ついさっき電話で話をしていたんだが……その時に、見合い話を切り出されたんだよ」

「み、見合い？」

「これは流石に予想外の事で、愁は眼を真ん丸にして驚いた。」

「驚いたか？」

「そりゃあ、ね。まさかあの親バ　あ、ごめん」

「本人がいる前では流石にと思った愁はすぐに謝ったが「いや、気にするな。本当のことだしな」と言って流した。」

「いやでも、まさかあの人がそんな事話すなんて思いもしなかった」  
「私もだ。突然、電話がかかって来て何事かと思ったら、急にその話だったから少し困惑してしまった」

普段冷静な凜が困惑する所を思い浮かべて思わず噴き出しそうになるのを堪える。それを知ってか知らずか、話を進める凜。

「相手は取引先の社長の二男で、私と同年代だそうだ。明照大卒で今はその研究機関の責任者を務めているらしい」

明照大とは明照理科大学の略で、理科系では東大を凌ぐと言われている超難関大学の一つ。その卒業生で、しかも研究機関で責任者ともなれば経歴はとても輝かしい物と言える。

「その人とは何回か会った事があってな。とても仕事熱心な人での関わり合いを大切にしている素晴らしい人だ」

それを言う凜の表情は何処か慈愛に満ちていた。それを見るに相手の事を悪く思っているどころかむしろ好意的に思っていることは言うまでもなかった。だったら、どうしてさつきはあんな表情をしたのか愁には分からなかった。

「だったら、と思うだろ？ でもな、自分でも分からないんだ。何で拒絶したのか。その場の勢いなのか、それともその人以外に気になる異性でもいるのか」

まったく、私も我が儘なものだな、と自らを自嘲するかのようになそう呟いた。

そんな凜にどう言葉をかけたらいいか分からない愁。どうしようかと悩んでいる時、じりりり、と一つの音で静寂が破られる。それ

はこの部屋に置いてあったアンティーク風のダイヤル式電話の音で、内心ちよっぴり助かったと思いなから受話器を取る。

「はいもしもし」

『愁ちゃん！ すぐに中央に来てくれんか』

電話の相手は恵だった。が、いつものノンビリとした口調と違ってやや声が荒かった。

「メグさん？ 一体どうしたの？」

『説明は後じゃ！ そこに凜ちゃんもいるんじやる？ 二人ですぐに、大至急！ あんまり時間が無いから本当に急いでくれ！』

ぶちりと乱暴に会話が途切れる。

なにやらとても急いでいた。そして、こういう電話の際、一体何が起こったのか愁はとっくの昔に理解していた。

「凜さんメグさんから。大至急、中央に来てくれってさ」

「分かった。すぐに行こう」

凜もいちいち聞いたりせず、すぐに状況を理解していた。

愁は壁に立て掛けてあった刀【水鏡】を手にとって腰のベルトに付ける。凜の方も傍に置いておいた細剣を装備し、二人して部屋を後にする。愁の部屋から中央室までは五分と少々。二人は駆け足で向かう。無駄な会話は一切せず、無言で走る。かちやかちやとベルトと刀、細剣を繋いでいる金具が鳴らす音以外何も聞こえず、足音も無い。

ボタンッと大きい音を響かせて扉を開ける。部屋には恵が一人、ノートパソコンの画面に向かっていた。

「メグさんどうしたの？ ていつても、大方の予想はつくけど」  
「おお、二人とも。ちよつくらこれを」

と言つて二人の方に画面を見せ、それを見て二人の表情が一気に硬くなる。

画面に映し出されていたのは電車が線路を走っている映像だった。愁はこれを見て、初めて桜花とここに来る時に乗った弥生線の電車と言ふ事に気付く。ただしそこには一電車の屋根に灰色一色で統一された服装の細身の男がいた。更にその男の前には三人、別々の服装で男を囲むようにして立っている。その三人の手にはそれぞれ、グラディウス長剣やら銃やらが握られていて何処かシニールに見えた。

「これ……【貫く剣】？」  
デユランダ

「そうじゃ。弥生線涼月駅始発の電車上空でこれを録つておる。【貫く剣】が一ヶ月前から追つていた奴らしい。名前は島津しまづしんすけ信介。性別は男で年齢は三十五。練成式を主とする術師で、【幻想曲】ファンタジア日本支部に所属。じゃが、一ヶ月とちよつと前に不法実験がばれて除名され逃走。ようやく見つけたらこの通り、という訳じゃ。」

愁や恵が言っている【貫く剣】や【幻想曲】というのは、よくRPGなどに出てくる【ギルド】と呼ばれる組織であり、書籍館とは協力関係にある。【貫く剣】は『こちら側』で起きた小から中規模の犯罪を取り締まりつつ魔物を倒している討伐ギルドで、【幻想曲】は全ての術師の把握や術式の管理を務めている魔術ギルドである。齋月館はこの両者に深い信頼を持たれており、愁や凜に関してはこの二つのギルドマスターと友人関係にある。

「ふーん、成程ね。でもなんだってこんな所に」

もつともな疑問を口にする愁。

「それがじゃな、何でも十数分前にここに逃げてきたと思ったら一時停止みたいに動かなくなったんじゃとよ」

「……また何とも理解しかねることだな」

「まあ、その理由は本人に聞けば済むことじゃて」

肩をすくめる恵。

「ところで今思っただけど、この電車って普段走っている奴と外見が随分違うけど」

よくよく見てみると、本来なら電車の屋根に着いているはずのパンドグラフ 電車が通る空間の上部にある電気が流れている架線から電気を集める集電装置がそれには付いていなかった。愁のその疑問に恵が答える。

「なんでもこの電車は最近、鉄道会社が開発中の試験車両らしいの。従来の架線から電気を流して動かすのではなく、車両に大型のリチウムイオン二次電池を何個も搭載してその電力で走っているみたいじゃの」

「で、その試験中にこいつがやって来たってこと？ またなんと言うか……」

疲れたように溜息をつく愁。

「では、私たちが呼ばれたのは加勢、という訳か」

「そうじゃ。今し方【貫く剣】から要請があった。今からすぐに此処に向かってくれんか？」

「それは全く構わないが……ちなみにこの電車は今、何処を走っているんだ？」

弥生線は他の路線と違って終点が無く、ぐるっと一周する形になっており、この霽月館がある宝楼町もそれに含まれている。それ自体に特に問題はないが近いことに越したことは無い。他にも、これはあくまで通常通り運行している電車であり、乗客に危害が及ばないかなどの心配もあった。

「今は宝楼町と名護町なごまちとの間じゃな。ああ、それに乗客の心配はいらん。どうも遠隔操作できるみたいでな。車掌もいなければ乗客もいないんじゃないよ」

「そっか。ほんじゃま、ちょっとくら行きますか」

「そうだな。だがどうやっていく？ 車やバイクだと追いつけるとは思って……」

などと思索を始めようとした凧を手で「まあ、すつつぶすつつぶと制する恵。」

「凧ちゃん。今さらはぐらかしても仕方が無かるつ。【あれ】が苦手なことは知つとるが、今この状況で【あれ】を使う以外なかるつて」

「……やっぱり、【あれ】しかないのか？」

珍しく難色を示す凧に、ああ、と愁は独り心の中で納得して苦笑する。

「凧さん。今回は流石に【あれ】じゃないと無理そうだよ。だからがまんがまん」

「……仕方無い。【あれ】で行くか」

また一つ、溜息をついた凧は愁と共にこの場を後にした

「 以上で回想終わり、と」  
「 ? 何か行つたかーっ！」  
「 いやいやー気にしない気にしない。どうせ俺らの次元だと確認できない人たちに、今この状況を説明したものだから」

愁の返答に首を傾げたものの、すぐに今はそれが問題ではないという事を思い出し、ちよつとは良くなりかけた顔色が再び青くなるのを愁はちらりと振り向きざまに見た。

びゅうと強い風が二人の顔に叩きつけるように吹き荒れている。髪の毛は当然の如くごわごわになっていて、寝癖頭の愁の髪の毛はいつも以上に酷いことになっていた。凜の髪の毛は愁ほど酷くはないが、今本人は髪の毛を気にしている所では無かった。ぷるぷると小刻みに震えながら愁の腰の辺りをぎゅっと掴んでいる姿は普段の凜を見ている限りでは想像できない姿であり、その姿を見て愁は噴き出しそうになるのを必死で堪えていた。

恵が言っていた【あれ】というのは、司書が非常時用の移動手段として契約式けいやくしきと呼ばれる、ある特定の存在 ゲームで言う所の精霊と言つた存在との繋がりを作る術式を用いて契約をした【飛竜】の事である。因みにこの飛竜と契約をしているのは愁で、体表全体を覆う鱗が白銀なことから、名を月華げっかと呼んでいる。因みに、二人と一匹の飛竜の周りには薄い半透明の天幕のようなものが包み込むようにある。これは凜が張つた隠蔽ハイディングの術式で、周りからは見えないうようになっている。

地上からいけない。だったら飛べばいいじゃないかと言わんばか

りの物凄い飛行だが、凜はこれが大の苦手だった。というより、美作凜。大の高所恐怖症なのである。愁がこの事実を知ったのはちょうど三年前。どういう訳か小型飛行機に乗った時だった。初めて乗った愁は仕事としてでもほんの少しの楽しみを持って搭乗したのだが、一緒に組むことになった凜はと言うと終始顔がほんのりと青く、少しでも揺れるとびくんとして屋根を突き抜けてしまうのではと思うくらいのビビリようだった。あの出来事は今でも忘れる事が出来ないとても印象強いものになっている。

そんな事を思っていると、急に飛竜が地上へとゆっくりと降下し始める。本当にゆっくり、乗っている人間に全く負担を描けない程度にもかかわらず、凜の握る力が先程より増していて半端なダメージを受ける愁。

「り、凜さん……そ、それ以上掴むと生命の危機が……」

「む、無理だ！ こわくてこわくて……はっ！ もしちょっとした弾みで此处から落ちてしまったら……」

「いやいやいやそれは幾らなんでもありえないっての」

パニック寸前の凜を宥めつつ、だんだんと見えてきた電車の屋根の状況を確かめることに。

六両編成のその車両の屋根には男が四人。が、先程恵が見せてくれた物とは状況がかなり変わっていた。まず、ただ立っているだけだった灰色の服の男。島津が両腕をぶらりと垂らし、無表情だったその顔はにたにたと卑猥な笑みを浮かべており口元からはだらしなくよだれが出ていていかにも、と言った感じだった。

そして島津から少し離れた所にいる三人の男。ギルド【貫く剣】の団員だが、一人の男を除いて二人が膝をついて息遣いが荒い。霽月館から出て大体十分程度。その間に一体何があったのか、と思っただったがその思考を振り払うように消す。

「まあ結局のところ、いつもの『非日常』だしね」

誰に言う訳でもなくポツリと呟く。

「凜さん。そろそろ降りるよー」

「わ、分かった」

こくりと頷く凜を見て、愁は「頼むぞ、月華」と白銀の飛竜に言うところから一気にスピードを増して電車に接近する。後ろから「うわっうわっうわっわっ！！！」などと聞こえるが無視する。

周りの風景が走馬灯のように過ぎていき、電車の屋根にぶつかるとかという距離まで近づき二人はそこで月華から降りて綺麗に着地。その時に凜が「生きていてよかった……」と言った事に対してはあえて聞かなかった事にする。

「ふう。到着っと」

「よし、さっさと済ませるとするか」

つい先程の様子とは百八十度変わっていつも通りの冷静な方に戻った凜が前を見て言う。

遠目でしか見てなかったので詳しくは分からなかったが、【貫く剣】の団員二人が所々に傷を負っていた。特に右にいる男は左肩が大きな刃物で切り裂かれたような切り傷がありそこから出血していた。命に関わると言うものではないものしばらくは動けなさそうな傷ではあった。

「おお！ 愁の旦那じゃないですか。こりゃ心強い」

そう言ったのは団員の中で唯一倒れていない男で、愁の顔を見るや否やかなり安心しきった表情になった。

「ソドムのおやつさん。相も変わらず歳をとったからといって何もかもが老いる訳じゃないことを証明してるね……」

「がはははっ！ そんな旦那も相も変わらずといったところすな」

愁を旦那と言ったその男は【貫く剣】の団員であるソドム・リオルド。現在の中でかなりの古参の剣士で年齢は五十過ぎといった所だろうか。灰色がかった短髪に顔には深い皺が刻まれていてそれが老練といった雰囲気醸し出している。体の方も五十すぎとは思えないほどガツチリとしており、それは右手だけで持つ大剣で示されていた。

「お久しぶりです、ソドムさん」

「おお、美作の御令嬢もいましたか。ならこの場に老いばれは必要ありませんな」

がははと豪快に笑うその様子からは疲労を全く感じられない。愁や凜が最初にあつた時からこの老剣士はよく笑い、そしてその長年鍛えられた腕から繰り広げられる豪快な剣で全てを薙ぎ伏せてきており「まだまだ若いもんには負けられませんな」と言ってはまた豪快に笑ってきていた。この老剣士には年齢というものは全く関係ないようである。

「で、状況は？」

前から吹き付ける風を浴びながら愁はソドムに尋ねる。

「まあ、見てのとおりと言ったところで。あの男、急に動き始めたと思ったら襲い始めました。わしは何とか防ぎましたが若いもん二人が怪我をしまして」

「島津、だっけか。術式で？」

「ええ。やつこさん、【幻想曲】の中でも結構な使い手だったよ。でも、しかも不意打ちときたら……流石に高位の術師相手には若いもんにはきつかったようです」

そう言っているソドムの表情はどこか硬かった。他の二人が傷ついた事に責任を感じているのか。この老剣士ならそう考えると愁は思った。

「なる。ほんじゃま、おやつさんはその二人の介抱を。後のことは、

言いながら、男 島津の方を向き、

「なんとかすつから」

と、軽く笑って言った。

それを見たソドムは頷くと、傍で倒れていた一人を慎重に抱えて車内に入れ始める。愁と凜は島津の方を向き、それぞれ剣を構える。島津は相も変わらず虚ろな表情をしているが、ただ呆けている訳ではないと一瞬で判断する二人。大気中に流れているマナ 術式を使う上で行使する対象となる力を自分の体にため続けているのが二人の目には見えていた。

「にしてもさ……あの不気味な表情は何だと思う？ 見たまんまだとただの異常者にしか見えないけど……」

「分からないな。ただあの男、どうにも奇妙だというのは分かる」

「奇妙？」

「なんと言つか……普通の人間に持っていない何かを持っている、  
というのか」

どうにも言葉で表現するのが難しいようで、濁すように言う凜。

「美作の御令嬢の言う通りですよ、旦那」

そこに、怪我をした二人を運び終えたソドムが入ってくる。

「どうも島津の奴、精神体の構造について研究をしていたようですよ。ただその研究っていうのが人をさらってきてやってみたいみたいで。だから除名されて追われる身になったようですが、どうも逃げ直前に自分に対してその実験途中の術式を施したみたいです」

「実験途中の術式？」

「ええ。どうも精神体に直接干渉してマナの行使量を無理やり上げようしたらしいんですが……ま、結果はご覧の通り、ですな」

と、呆れたように島津を指差す。

術式を使うためには大気にあるマナを行使する。ただし、それらすべてを行使できるという訳ではなく、行使できる限界が個人によってかなり異なる。鍛錬によって上げられるが、島津はそれを無理やり上げようとして精神体を傷つけたらしい。

「成る程。思考領域のところまで術式が干渉してしまい自我が崩壊残っているのは生存本能だけ、ということか」

話を聞いた凜は憐れむような目で島津を見る。そう言う目をしている時は大抵、樹がくだらないことをした時だけに向けていたので愁は少し驚いた。

「……まあ。とりあえず、だ」

そう言うと、しゅるりと鞘から細剣を抜き切つ先を地面に向け下段の構えを作る。

「あいつに施されている術式を破壊すればいい。それで終わる」  
「ですね」

愁もベルトに着けている金具を外して水鏡を鞘ごと左手に持ち、居合の構えを作る。ソドムも加勢しようとして大剣を構えようとしたが、逆に二人の邪魔になると思ひ後ろに下がった。

どんなに相手を警戒していても、必ず隙が生まれる。そこを突く！

自我が壊れているなら警戒も薄いかと最初は思った愁だが、よく見てみると島津の周囲に密度は薄いが煙らしきものが漂っている事に気付く。恐らく、思考がはつきりしていない島津の目の代わりだと思う。

とはいえそれも完全ではなく、時々あらぬ方向を見ている時があり、そこに隙が生まれることに愁は気付き、横目で凜を見てみるとふっと笑った事から気付いている様子。

「……」

風が強く吹き抜ける中、島津の荒い息遣いだけが聞こえる。

どれくらい時間が経ったのか。一秒が一分に。一分が十分に。十分が一時間に感じる世界の中に此処にいる全員がいた。二人は五感すべてを研ぎ澄まし、島津の動きを全て把握していた。まだ隙は出来ない、それでも二人は焦らない。待っていれば必ず来ると分かっているから。

そして、それは意外にも速く訪れた。

突然、風が今まで以上に強く吹き抜けた。その風に島津は少しだけ目を細め、周囲に浮いていた煙もちょうど二人から少しだけ、本

当に少しだけ目を離す。

二人の中に響く、始まりの合図。

愁と凜は同時に、殆ど同時に島津に向かって電車の屋根を一蹴り。破裂したような大きな音と共に二人は一気に距離を縮める。それに少しだけ遅れた島津だったが、術師は鈍重という見解を見事に打ち砕く反応を見せ、迫ってくる二人に向けて左手を突き出すと掌から陣が生まれ、そこから無機質めいた黒く細い紐状のものが溢れ出て二人を襲う。

「っ　っ！」

互いに言葉を交わすことなく、愁は左へ凜は右へ移動してそれを避け、愁はそれを抜刀して切り裂く。さん、という音がしたと思っただ時には黒紐は綺麗に切断され、音もなく消滅する。が、元の部分術式と繋がっている根の部分は残っており、それが再生し再び襲ってくる。

「ま、そんな事だろうと思ってたけど」

特に驚くこともなく次々と迫る黒紐を右に左に避けながら一本ずつ確実に切り落としていく。一本切ったら素早く右に少しの跳躍で避け、その途中で一本二本。着地したと思ったら右回りで回転。後ろから襲ってきた黒紐を切り裂く。

「凜さん、こいつらは俺が引きつけるからあいつを！」

「分かった」

短く会話を交わすと凜は前へ走り始め、愁はそれを遮る黒紐を切り落としていく。永久に出てくるのではと思いきやそうになるが、流石に疲れが出てきているのか。先程よりも再生されている数が確実に

減ってきていた。

さん、とまた一本切ると後ろにバックステップ。着地しその場で前傾姿勢。水鏡を鞘に戻して、

「風月」

鋭く言い放ち、抜刀。素早く抜き放たれた刀身から可視できるまで濃縮された「風」が吹き荒れる。それに当たった黒紐はばさりばさりと切断され消滅していく。

その様子をちらりと見ていた凧は再び視線を島津に戻し、前を防いでいた黒紐を切り落として再び駆けだす。何としてでも阻止しようとして黒紐が凧に集中するが、いつの間にか抜いたのか、左手にはマンゴーシユが握られ、右手の細剣と共に切りつけていく。基本、相手の攻撃を防ぐことを主とするマンゴーシユだが、凧はそれを逆手に持って二刀の形で使いこなしている。

「はっ」

短い気合と共に斬撃。あっけなく消滅していく。

「ガッ……ガガッ……」

見てみると、島津の様子が先程よりおかしくなっていた。陣を展開している左手が小刻みに震え始め、空いている右手で胸の辺りをおさえている。顔からは玉粒ほどの汗がでており、その表情は苦痛に染まっていた。

「何だ……?」

その様子を訝しく思う凧。だがそれがすぐに、無理やり行使量を

上げた副作用なのではと結論を出す。

「なら、この好機は逃せないな」

その場で立ち止まるとマンゴーシユを腰の鞘に戻し、右手の細剣を電車の屋根に接するか接しないかというぎりぎりの所まで下げる。近くでは愁と黒紐が格闘を続けていた。戦いの喧騒が、吹き抜ける風の音が耳に響く。

が、次の瞬間には、それら全ての音がふつと聞こえなくなった。ついさっきまでは周りを警戒していたが、再生速度の低下と愁のおかげでその必要はなくなった。自分の意識を、島津と切っ先に集中させる。普段はある程度隠すが、その必要もない。

ジジッ……ジジジッ……ジジッ……

切っ先から青白い光を放ちながら電気が生まれる。微かな音、わずかな規模しかないそれが、次第に大きく、広がっていき、刀身全体がそれに包まれる。周囲に電気が弾けるような音と共に踊りくねっている。

ゆつくりと、切っ先を島津の方へと向ける。島津は展開している陣を凜に向け、最後の抵抗と言わんばかりに、最初に出した時よりも二倍近い量の黒紐を生み出し、凜に襲いかかる。

が、凜は微動だにしない。むしろ視界にすら入っていない。理由は簡単。その必要が無いから。

「無駄だ。その程度でこの一撃を防ぐことなど」

黒紐が目の前に迫る中、その視線は島津の目を射抜くように据えていた。

「出来はしないっ!」

言い放った刹那。凜の姿が消え、それと同時に轟音が響き、一瞬だけ強い光　雷光が生まれた。

その光に後ろにいた愁は眼を細めたが、それも少しの間だけでなくに視界が開ける。

そこには、泡を吹きながら直立している島津と、その真正面に前傾でいる凜。島津の横腹には、凜の細剣が見事な胴を決められていた。

凜の十八番である、雷の術式を用いた神速の一閃。今回は対人という事でいつも抑えられていたが、それでも普通の人間が食らえば確実に感電死威力であることは疑いようが無かった。

「相も変わらず、とんでもない突きだね」

愁ですら、抑えられた技にも関わらず凜の動きがぶれて見えた。それが悔しいのか、少しむっとした表情をしている。

「まあ、これだけはお前には譲れないな。だが斬りの方はお前の方が上だろう」

「それでもね。ちよいと悔しい」

そんな愁を見てふつと笑う凜。あれほどの動きをしたにもかかわらず、二人は息切れもせず汗もかいていない。

「がっはっはっ！　まったく、私の出番はありませんでしたな」

豪快な笑いと共にソドムがやってくる。

「他の二人は？」

「なに、心配ありません。車両の中で休んでいますよ。傷の手当でもお二人が戦っていた時に済ませたんで」  
「そっか。よかった」

ふうつと一息ついて刀を鞘に納める。

「この後はそちらに任せていいのだろうか？」  
「ええ、事後処理はこっちでやりますよ。ただ……すぐにそっちに回ってくると思いますかね」

ふうつと、こちらは面倒そうに溜息をつくソドム。それに凜が頷く。

「だろうな。とりあえず、雄真か静穂さんにも聞いて」

そう言おうとした時だった。

「カハッ」

それは突然だった。島津が倒れている屋根に黒褐色の陣が現れ、禍々しい色彩を放ち始めた。それと同時に島津の口から苦痛が宿る声が洩れ、体全体が大きく震えていた。

「やばっ!」

とっさに危険だと感じた愁が再び抜刀。陣そのものを切りつけ、光が消えて消滅する。

「今のは……?」

凜がそう呟く中、島津の様子を確認する愁。ぴくりとも動かない島津に少しふれた瞬間、

「え……」

その体は一瞬の内に灰色に染まったかと思っただら、それが崩れ灰になり、風に乗って消えた。

「……こつこつのは、ないだろ」

ぼつりと、そう呟いた。

五話・雷光纏いしその一閃（後書き）

連続です。かなり長くなっております。

## 六話：黙する銃弾

屋上で昼食を食べていた愁たちが菜月たち調理部の面々と挨拶をしていたその時。

小夜が雄真の姿を見つけて顔を真っ赤にしていたその時。

愁が丁度食べ終わって持っていた文庫本を読もうとしたその時。

「……………」

風蓮飛鳥はとある廃工場にいた。

「……………魔物の発見情報か」  
「うむ。情報ギルドにいる知り合いからの情報だから、百パーセン  
ト間違いない」

以前、桜花が愁の事について聞いた部屋にいる飛鳥と恵。

二人は研究員のような白衣を身につけているが、所々がぼろぼろになっており、更に薄汚れていた。髪の毛も愁ほどではないものの、結構ぼさぼさになっていたりする。外に出ないから、という理由で二人とも身なりには全然気を使っていなく、普段ここにいるときは大抵こんな恰好をしている。

二人がいるこの部屋は一応司書たちの集まり場という事になっており、外部からの来客や雄真が何人かに霽月館宛てに来た依頼などの説明をする場所でもある。

といっても、ここの用途は実のところあまりない。その理由は、この霽月館に所属している全ての司書には絶対一つは自分の部屋というものを与えられ、普段はそこで仕事をしていることが多い。一応、さっき言ったようなことは何度かあるが、殆ど談話室的な存在になりつつある。

「それは雄真には……」

「言っていない。というよりも、この情報が入って来たのはついさつきで、雄ちゃんは学校だからな。」

愁ちゃんと桜花ちゃんと一緒に

「そうだな。となると、手の空いているのは俺だけか」

飛鳥は小さく溜息をつく。

この霽月館に所属している人数は、館長である雄真を含めて全員で九人。桜花が司書候補になったため一応十人になるのだが、ついでこの間まで一般人であった桜花を戦力に加えることはない。ということ九人になる。そのうちの三人はまだ学生。こういった平日の活動時間はかなり限られている。そして残りの六人のうち、飛鳥と恵、冬実を除いた三人は今この場にはいない。地方などに出現した強力な魔物の討伐や、書籍館同盟に入っている他の司書たちとの合同調査などで出払っているのだ。

とは言え、いくら霽月館であろうと一々地方の遠いところまで出向いていたら体がいくつあっても足りない。

そこで登場するのが、『ギルド』と呼ばれる組織である。

よくゲームなどに出てくるように、様々な専門分野を得意とする者たちの集まりがギルドである。先程、恵が言った情報ギルドを始め、職人ギルド、討伐ギルド、商業ギルド、などといったものが複数存在する。そういったギルドと霽月館は協力関係にあり、あらゆる情報、技術などを共有しているが、基本的に霽月館に優先されている。これは、やはり実力の差というものであり、決して不平等というものではない。

書籍館に勝てるギルドは存在しない。

これは未だに語り継がれていることであり、現に二十年前、あるギルドが書籍館に対して反逆にも似た行爲を行った所、そのギルドの存在自体が抹消されるという事があった。それ以降、反逆などという言葉すらも存在しなくなる。

まあ、基本的には両者の関係は友好であり、そういったものはごく一部のみのみなのである。

話を戻す。更に、残った三人の中で恵は戦闘の分野においてはかなり不向きであり、魔物討伐の依頼などは基本的に受けない。

で、更に残った二人　飛鳥と冬実なのだが

「ふゆみんは別の依頼で出払ってるからな。で、丁度良く残っていた飛鳥ちゃんに頼もう、ってわけだ」

「それはどうも、だな」

恵の言葉にちょっと不貞腐れる飛鳥。それを見た恵は可笑しくなって笑ってしまう。

「ははは。まあ、そう不貞腐れるな。最近ずっと部屋に籠りっぱな

しだった飛鳥ちゃんには丁度いいじゃないか」  
「まあ、確かにそうと言えばそうだが」

恵の言葉の通り、ここ一週間の飛鳥の日常スケジュールは

午前六時、起床。

午前八時、研究開始。

午後十一時、研究終了。同時に夕食を食べ風呂に入る。

午前一時、就寝。

翌朝、同じように午前六時、起床……

といったものをこの一週間続けていたのである。

だから服がボロボロ、というのもあるが普段からあんなので実際はあまり関係ない。

因みに、司書ごとに扱う内務職が異なり、それぞれ自分の得意分野を行っている。飛鳥は魔術と科学の融合についての研究を恵と共に行っており、例を上げると、物質に術式の力を宿したり、機会の動力に術式を使って出力を何倍にも上げたり、などなど。そのせいか、二人の仲は結構良かったりする。まあ、霽月館全員の仲は良好だが。

「とまあ、そんな訳で飛鳥ちゃん、ここはイッチョよろしく頼むよ」  
「了解した……十五分後、現地に向かう」

いつものポーカーフェイスでそう答えると、飛鳥は恵に背を向けて部屋を出て行こうとしたが「それともう一つ」と恵の言葉に止められる。

「これはまだ不確定な情報なんだが……飛鳥ちゃんには言っておこうと思っただけ」

「……………なんだ」

一瞬、話すのをためらった恵であったがそれも本当に一瞬であり、いつもとは違う真面目な顔になると

「実はな……………」

といった感じで、飛鳥は霽月館がある公文書館から最近買ったバイク（飛鳥はバイク好きで、今乗っているのはYAMAHAのYZF-R1というタイプ）で走って約二十分、魔物が確認されたという廃工場に来ていた。

魔物はこういった昔は人がいたような所を基本的に好む。それは未だに良く分かっていないが、人の負の感情とでもいうのだろうか。想像のように、魔物たちもそういったものに引き寄せられているかもしれない。といっても、普通に街中に現われて人を襲うなんてことはもう珍しくもなるともない。

だからこそ、と飛鳥は思う。

俺たちはいつも、常に命の危険に晒されていると言っても可笑しくない。それは魔物の事に限ったことだけではなくて、普段の日常にだって危険は数えれば幾らでも見つかる。ただ単に自分たちが気づいていないだけであって、実際は危険だらけだ。

だが、魔物が関与する危険は、俺が防ぐことが出来る。

俺が持つ力は、そのためだけにあるものだ。私欲なんかのためにあるものじゃない。誰かを救うためにある力。

「それが、俺に出来る唯一の事だ」

そう言うと飛鳥はバイクを止め、自分の装備の確認をする。

腰にはホルスターに納められた銃がある。が、その形がとても奇妙で、グリップの部分はリボルバーだが、重心がオートマチックのように太い。グリップから重心の先まで約40センチほどのそれは、飛鳥が独自に開発したものであり、言いかえれば、この世でただ一つの銃である。

その他にも、色々な装備が腰に取り付けられてあり、中にはどんな風を使うのか分からない物もある。

銃を抜くと、飛鳥は何の躊躇もなく、昼間なのに薄暗い廃工場へと入って行く。

当然と言ったら当然なのだが、飛鳥以外に人の気配はなく、所々寂れた感じが何処か安っぽいお化け屋敷を連想させた。

「……奥にいるようだな」

人の気配はない。が、魔物の気配はある。

これはもう鍛錬でしか身につけることが出来ず、飛鳥はそれに従って奥へと進んでいく。

恵が暮れた情報によると、この工場が閉鎖されたのは二十年前くらい前で、重工を扱っていて割と賑わっていたが、不景気の波によってやむなく閉鎖になったらしい。いかにも魔物たちが好ましそうな場所である。

進む、進む、進む。

見取り図は先程頭に全て入れてあるので、迷わず奥へとすいすい進んでいく。が、進んでいくのは良いのだが、肝心の魔物の姿がど

ここにもない。こういった場所なら魔物だけでなく、想影が出てきても不思議じゃない。逆に何も出てこないというのが不気味である。何かある。飛鳥は周囲を見回しながらそう思った。

更に奥へと進む。何も現れない。気配はあるのに一向に現れない様子をうかがっているのかと思っただが、この気配から察するに、そこまで知能が高いやつとは思えない。見つけたら即刻襲うはずだ。なのに、それをしない。

「いったいどうなっているんだか」

そう呟いた刹那。止まっていた歯車が動き始めた。

ガタンツ、と背後で大きな音がしたかと思うと、暗闇の中から突然何かが飛鳥目掛けて飛び出してくる。

飛鳥はそれを反射的に横に跳んで避け、引き金を引く。

バンツ！ という大きな音と共に、飛び出してきた何かに当たり小さな爆発を起こす。瞬間、それは黒い霧上になって消えた。

「とつとつ出てきたか」

表情一つ崩さずに、何か 想影が出てきた所を見つめる。

今の突撃が合図なのかのようになり、十数体の想影が出てきた。

「想影だけ……?」

目撃された魔物がどこにもいないことに不信感を抱いたが、とりあえずそれは置いておく。

再び引き金を引く。先程と同じ轟音。爆発が二体の想影を巻き込み、消滅させる。が、その間に一体の想影が飛鳥目掛けて爪を振り下ろす。それをなんなく避けた飛鳥は、そいつに向かって銃口を向け放つ。近くで起こった爆発にちよつとばかり衝撃を受け地面に座っ

てしまったが、何事もなかったかのように立ち上がる。

「数が多いな。炎弾だけでは少し無理があるか……」

言つや否や、手に持つ銃のリボルバーを開く。そこには本来なら入っているはずの弾ではなく、何か文字が刻まれている別の塊が入っている。赤色で書かれた文字の物が発射される位置になっているのを、緑色で書かれた文字の物に変え、入れる。それが済むと銃口を想影に向け、引き金を引く。すると、今度は先程の爆発するものではなく、まるで風が塊になって連続して放出される。それに当たっても先程のような威力はないが、あたった場所が丸々くり抜かれたように無くなっている。弾数と同じ六発までが連射の限度だが、それでも十分すぎるくらいの威力を持ち、しかもリロードの必要がない。

飛鳥は精密すぎるほどの狙撃で相手を打ち抜く。次第に想影の数が減っていき、五分も経たないうちにすべて消滅してしまった。

「……すまないな」

誰に言う訳でもなくただ呟く。そしてまた歩き始めようとしたが、その時になって近づいてくる別の気配を感じる。

「ちっ、まぎれていたか」

思わず舌打ちしてしまう。相手にではなく、気づくことが出来なかった自分に。

そいつはすぐに現われた。いや、飛び出てきた。

牛のような体躯に血のような赤色の毛。巨大で歪んだ形の二本の角。毛と同じ真っ赤な目。

恵の情報通りの魔物。下級のため固有名称はないが、下級の中で

は一番のやつだった。

あの角に貫かれたら一巻の終わり。

「くっ！」

横に飛び込もうように避ける。常人よりかは運動能力は高いが、戦い方が戦い方なので愁のようにアクロバットじみた動きは出来ない。いまのはかなり焦った。

目標を見失い、まっすぐ突っ込んで壁に衝突する魔物。前転して体制を整えた飛鳥は左の方の腰にぶら下げていた刃のようなものを取り、それを銃身に取り付ける。銃剣ガンスレットになったそれを剣を持つような持ち方に変え、ヒュンツ、と横に薙ぐように振る。

それをした途端、シャキンツ！ という金属音がしたかと思うと、刃の部分が高温を帯び、赤く染まる。低い体制をとり、それを大きく振りかぶるように上段で構える。

こちらも体制を取り戻したのか、魔物が闘牛のように構えるともすごいスピードで突っ込む。

飛鳥は避けない。いや、避ける必要がなかった。

上段に構えた銃剣を、一気に下へと振りぬく。

魔物の顔にそれが食い込む。と、まるで愁が切るように綺麗に切断される。

ガッ！ と強い衝撃があったが、踏み留める。

やがて高温を帯びた剣が切り裂くと、魔物の体が灰になり、崩れる。

「……………依頼完了、なのか」

ほんの少し首を傾げ、飛鳥はそう呟いた。



## 六話：黙する銃弾（後書き）

学校が始まるとやっぱり更新は難しいですね。割と時間がなくて結構大変です。でも、諦めずに更新し続けますよ（もう一方の方は止まってしまっていますが・・・）

飛鳥の活躍、どうだったでしょうか。ちょっと少ない気もしますが、そこら辺はご勘弁を。

それでは、また次回。

## 七話：報告、報告。

「そうだったんですか……御苦労さまでした飛鳥さん」  
「問題ない。少しばかりイレギュラーがあつたが何の支障もなかつたからな」

霽月館のとある一室。ここは代々館長が使用する部屋で、当然この主は現館長である雄真である。

司書には必ず一室が与えられているが、ここの部屋は多少作りが違つていてしかも広い。ここにあるものは前館長である雄真の父親霧月昂きりげつすはるが使用していたものをそのまま残している。変えるのが面倒だから、という理由からではなく、父親がここを使つていたという面影を少しでも残しておきたいという雄真の思いだからである。

「想影と魔物が一緒に、ですか……珍しいですね」

「ああ。そう思って色々工場を調べてみたんだが……特に何もなかつたな」

想影と魔物というのは人を襲うという点では一致しているが、人の想いから生み出された想影と自然から生み出された魔物は基本的に相反する存在。近くにいるようなら互いを襲うはずなのだが、今回の飛鳥が遭遇した奴らに関しては全くの別物だった。が、調べても特に何かが出てくるという訳でもなく。結局何も分からないまま、飛鳥は帰還し、丁度来た雄真に報告をしているところだった。

「まあ取り敢えず、それについては置いておきましょう。判断材料が少ない現時点での推測は危険ですしね」

そう言うと、座っていた長椅子に深々ともたれかかりながら、目

の前にあるかなりの量がある書類の一つを引つ張り出して目を通し始める。霽月館の館長の仕事の半分は館に関する様々な「厄介事」を処理することにある。館長になって早三年。この作業に既に慣れている雄真であるが、慣れたからと言つて作業自体が好きになるという事は決してない。いやむしろ、逆にどんどん嫌になって行つていくかもしれない。

それでも、雄真は泣き言一つ言わずに黙々と眼を通してはそこに色々書き入れる。それが済むと更に別の書類に目を通し、また同じ作業を行う。その繰り返し。見ている方も飽き飽きとしてしまうほどである。

「……今回は随分な量だな」

「ええ本当に。まあこの時期は大体こんなものですけどね」

肩をすくめて答える雄真。この時期、と言つが実際は時期など関係なく、悠馬の目の前にある光景が変わることはない。しかもこれが仕事の半分だと言つただから、司書たちよりもかなりの激務をこなしていることになる。それでも体調を崩さず、尚且つ愁たちと同じように前線に向かえるのは偏に雄真の才だろう。そんなことを飛鳥はひっそりと思っていた。

「……ところで、愁のやつはどうした」

「愁さんですか？ 確か……セントラルスタック中央書架の五階だったはずですけど」

中央書架。桜花が初めてここに来た時に見た、巨大な円柱状の書架である。そこに保管されているものは霽月館の中でもかなり重要な部類に入るものばかりであり、司書たちでさえ閲覧するためには館長である雄真の許可がなければ触れることすら叶わないと言ったものである。

「五階……古代言語の資料がある所か」

「はい。なんでも急に必要になったものがあるとかなんとか言っていましたよ」

愁の霽月館で行う仕事は古代語修復。表に出ていないものも含めて、この世界には何千という古代言語が存在する。それを解読し、修復するのが愁の役目のだが、基本は前線に出て討伐やらなんやらの依頼をこなすことの方が多いため、そっちの方の進み具合はあまり芳しくない。それについて御咎めが一切ないのはそれだけ十二分に暴れまわっているという事だが。

「そうか。助かる」

「いえ。愁さんに何か用事でも？」

雄真が尋ねると、飛鳥は表情一つ変えずに、

「ああ。少しな」

短く返答すると、そのまま背を向けて館長室を後にした。

中央書架五階。そこにある巨大なテーブルにある椅子に座りながら、愁は古めかしく分厚い本をひたすら読んでいた。

それ以外にもテーブルの上にはどっさり、いま愁が手に持っているようなものと同じような本が幾つも置かれていた。しかもそれらは今さつき読み終えた物ばかりであり、既に必要な情報は愁の頭の中に記憶されてある。

愁の読書量は普通人と比べることすら愚かしいと思ってしまうほどの量であり、それを知っている人たちからは読書狂ヒプリオマニアなんて呼ばれていたりする。呼ばれている本人はそこまで読んでいないと否定しているものの、一日平均六冊以上という結果が既に出ているためその反論はまったくもって無意味だったりする。

「……ふーむ」

口元に指を当てながら考え込む愁。その表情はまるで謎解きを楽しんでいる少年の顔にしか見えなく、影で世界を支えているなど微塵も思わせないほどの純粹な表情だった。

「これには載ってないか……となると、やっぱりあれにならあるかな」

パタンツと本を閉じると、こめかみをググツと右の指で強く刺激する。一時間以上も同じ体制で瞬きをする時間を惜しむように読んでいたので目が疲れていた。それが済むと先程冬実が置いてくれたいた緑茶が入った愁専用の湯呑を持ち、一気に緑色の液体を仰ぐように喉に流し込む。丁度いい温さ加減のそれが乾いていた愁の喉を潤す。

「ふう。ま、今日はこのくらいでいいかな」

テーブルの上には本の他に、先程まで色々と書いていたノートが数冊置かれている。愁がこれだと思つた資料を元に様々な言語解読を一気に行つてゐるためノート一冊一冊全部が普通の人から見れば何がなんだかさっぱりな言葉が綺麗に並べられている。

んんつ、と背伸びをするとそれから一気に椅子から立ち上がつて本を元あつた場所に戻し始める。挟まれてある番号札みたいなものを頼りに次々と片づけていき、数分後にはテーブルの上には数冊のノートと湯呑しか残つていなかった。

「よしつ、今日のお仕事はこれにて終了。後は部屋に戻つてノートを置いてから訓練室、かな」

この後の予定を確認した後、この場所を後にしようとしたその時、

「愁。少しいいか」

後ろから声。振り返つてみるとそこには、いつものように薄汚れた白衣を着た飛鳥が歩いてきた。

「飛鳥さん？ 珍しいですね、この階に来るなんて」

飛鳥の仕事は魔術と科学の融合。そのためか、言語のみをそろえてあるこの五階にはあまり来ることがない。愁の疑問は御尤もごもつとという訳である。

「少し、な。お前に話したいことがあつてな」

「うわつ、珍しい。どうしたんです急に。司書以外の事を飛鳥さんと話すなんて数えるくらいしかないんですけど」

「・・・そんなになかつたか」

「ええ、そんなになかつたですね」

これを機に、もう少し他人との会話を増やした方がいいのだろうかと密かに思った飛鳥だった。

「……まあ、とにかくだ。さっき言ったように話すことがある。時間はあるか？」

「大丈夫ですよ。いま丁度終わったところですし」

そう言っつや否や、先程と同じ椅子に座る愁。飛鳥も愁の近くの椅子に静かに座る。

「で、どうしたんですか一体。悩みごとの相談、なんてありえないし」

尋ねる愁に向って、飛鳥は口を開くと

「………単刀直入に言おう。少し前に恵から《探査者》の目撃情報を聞いた」

重々しく、一言そつ言った。

「っ!」

飛鳥のその言葉を聞いて、にこやかだった愁の顔が一瞬にして凍りつき、言葉を失う。

「と言っても、不確定だからまだ本当かは分からないが……俺は間違いないと思っている」

いつもの優しさが含まれているポーカークーフフェイスとは違い、今の飛鳥にあるものは本物の冷たさだった。

「……そう、か。やっぱり、そうだったのか」

「まだ雄真には話していないが……言うべきだろうかと迷っていてな」

「話しちゃだめだ」

即答する愁。

「あいつになんて話したら、それこそ我を見失っちゃうよ、飛鳥さん。それ話してなくて正解」

小さく笑ってはいるが、その笑みも飛鳥と同じ冷たさを宿していた。

「兎に角、まだ確定した訳じゃないしね。一応今のところは放っておいた方がいいって感じかな」

「そうか……ならそうしよう。だがこのことは、俊瑛さんたちには伝えておいてくれないか。あの人達には知る権利がある」

「そう、ですね。じゃあ、今日帰ったら言ってみますよ。どんな反応するかなんて今から決まったようなものですけど」

「そうだな」

会話がそこで止まり、重い沈黙が辺りに流れる。二人とも何か物思いにふけるような表情になり、何処か憂いもそこにあつた。表情の変化があまりない飛鳥でさえ、いつもは見せない寂しげな感情を浮かべていた。

「……もし、あいつが俺たちの前に現れたら、お前はどこうする」

不意に呟くように言った飛鳥。その言葉を聞いて愁は何の迷いもなく

「その時は、戦いますよ。あいつ一人だけが、痛みを背負っている訳じゃないんですから」

## 七話：報告、報告。（後書き）

ひっさしぶりの投稿です。遅れてしまって申し訳ないです……。

因みに、もうすぐ学校もテストがあるのでまた遅れるかもしれません。本当に申し訳ないです、はい。

さて、分かっているかもしれませんが、名前を変えました。変えたというよりも、今の名前が執筆活動での本当の名前だったので、直したというほうが正しいかもしれません。今後は葉月陸斗で宜しくお願いします。

あとあと、気づいている方も多いかもしれませんが、前に投稿した話の内容が追加されていた、なんてことがあります。色々とチエックしてみると話が追加されているかもしれませんので、時間があればどうぞです。

あと、短編小説も投稿してみたので、よろしかったらそちらもでは、また次回。

## 八話：ほんの少しの進展

雨が降っている。空を覆うようにしている黒雲から。

昔、父さんが言っていたことがある。雨というのは、空が流している大粒の涙なのだ。だから、雨が降っている日は空が悲しい時間で、そんな時は事情に立つ僕たちも悲しくなるのだと。

僕はその通りだと思った。

雨が降る時は何となく憂鬱な気持ちになる。それがいったいどこからやって来るものなのか全然分からなくて、原因が全然分からなくて。

だから、父さんが言った事が正しいのだと思っていた。

そして、こうとも言っていた。

雨の降る日は、何かしら悲しい出来事が起こってしまうのだと。

愁と飛鳥が話をしている頃、雄真は一人、だだっ広い大きな部屋

ぽつんと立っていた。

この部屋トレーニングルーム司書たちの鍛錬室のような部屋であり、恵が作った特製の機巧像ゴレムを相手に様々な状況に応じた訓練を行う事が出来る。が、今この部屋にいるのは雄真だけで機巧像の姿はどこにもない。

雄真は一日に一回、必ずこの部屋に来ては一人でこうしている。目を閉じ、ただただ心を空っぽにする。余計な邪念を振り払い、何も存在しない虚空を思い浮かべる。

「・・・・・・・・」

柔道着で身を包み、右手には雄真の小柄な体躯とはかけ離れた巨大な得物が握られている。

青色の刀身に細長い柄。その先端には緋色の紐が付けられている。それは薙刀の形状に非常に酷似している。

中国における太刀の一種、青龍せいりゅう偃月刀。有名な三国志演義に出てくる武将、関羽が愛用していたとされる武器。

書籍館に属する司書は必ず何かしらの武術、術式を身につけていることが前提であり、それは館長においても例外ではない。というよりも、館長だからこそどんな司書よりも高度な戦闘技術を身につけていなければならない。

「・・・・・・・・」

閉じていた目を開き、偃月刀を振り回す。

雄真は基本、理式を中心とした多種多様で高度な術式を使用するが、それ以外にも槍術と棒術を合わせた我流で戦うことも多い。雄真の小柄な体躯からは想像できないが、普通以上の力を持ち、一度偃月刀を揮えば周囲に小さな嵐が起るほどの槍舞やぶらを見せる。

斜め右上に薙ぎ、その反動で回転。更に同じ方向に薙ぎ、回転せず止める。

「はっ」

今度は左下に薙ぎ、その途中で刃の向きを変え、右に水平に薙ぐ。そこから回転して偃月刀全体を回し、先程と同じ姿勢で止める。そして今度は左に水平に薙ぎ、また全体を回転させて上段で刀を振るうように上からブンツ、と叩き切るように薙ぐ。

「はっ、はっ」

その動作を何回も何回も繰り返す。この形は雄真の父親である昴あすから教わったものであり、毎日これを何百回も繰り返す。

何事も基本が重要なり。稽古を最初にしてくれたときに教わった最初の教えである。

その教えを雄真は今も忠実にこなしている。

たとえどんなに忙しかろうと、これだけはやらない日は無かった。此処でなくてもどんな場所でも必ず行っていた。

それくらい、雄真は昴を館長として、父親として尊敬していた。

いつも自分の目の前にある、とても大きな壁。

いつか自分も、いつか自分もと毎日自らを磨いていた。それは今でも変わらない。変わる事は無い。

でも、

越えるべき壁はあっても、その壁を作った後ろ姿はもうない。

「はあああああああ！！」

ブンツ、と大きく一振り。

荒い息遣いだけが部屋に響く。

「………父さん」

思わず呟いてしまう。

とうに吹っ切れたと思っっているのに、それでもまだ

「情けないですね……。こんな所、見せられませんよ」

悲しみが込められた笑みを浮かべると、雄真は再び偃月刀を構え直して槍舞を始める。

「はああああああ！！」

何故だろうか、気迫あるその声が虚しいと思ってしまうのは。

夜。愁はリビングで一人頭を抱えていた。

「うーん……」

目の前のテーブルに置かれているのは数冊の文庫本。今日帰りに書店によって買ってきた、愁が好きな作家さん達の新刊である。基本、愁は小説であればとことんどロドロとしたもの以外、ジャンルを問わず何でも読む。

「迷うなー……………」  
「何が？」

振り返ってみるとそこには姉の絢香あやかが頭にバスタオルを乗せたままずいぶんとラフな格好で立っていた。髪の毛に滴が付いていることから風呂上りということが分かる。

「おお絢姉。いやさ、この中からどれを最初に読もうかなーって」  
「……………羨ましいわね。どの本を読むのか、っただけでそんなに悩めて」

「何を言う。俺にとっちや重要な悩みだぞ」  
「私にしてみれば些細なことに過ぎないわよ。私なんてもっと大きな悩みがあるんだから」

「その歳になつて未だ恋人が出来ないこと？」  
「あはは、殺されたいの？」

にこやかに笑って強烈な殺気に向けてくる絢香。それを感じ取った愁は「すみませんでした」と素直に頭を下げて謝る。

愁には桜花が（といつても本人に自覚なし）いるように絢香にも彼氏がいても可笑しくは無いのだが、如何せん世の中というものはそう都合良くは行かないもので。昔からそういったものとは殆ど縁が無い絢香である。と言つても容姿はとてつもなく良いので周りの人間は気にしないという事は無いのだが、本人の希望する男性像が「自分が持っていないものを持っている人」というなんとも難解な条件があり、それが大きな原因となっていることは言うまでもない。

「いいわよね、愁には桜花ちゃんがいるんだから」

「そりゃどういう意味だ？」

「……………ホント、あんたって頭良いんだか悪いんだか」

はあつ、と嘆息を一つ。

「あーあ。私にも出会いの一つ無いものかしら」

「大体にしたって絢姉の基準が意味分かんないよ。自分には持っていないものを持っていてる人、なんて言われてもさ、自分が何を持っているのか分かってない人がほとんどなんだから」

「それは私が見極めるの。まあ今の所、私の周りではそういう人はいないわね」

「そんなんじゃ、婚期過ぎちゃうんじゃ」

そう言い切ろうとした所で絢香の強烈な回し蹴り。司書ではないものの絢香も俊瑛に鍛えられているため常人以上の力と技術を持つ。普通の人では見極めることすらできないその蹴りを、愁はわざと紙一重の所で頭を伏せてかわす。

ブンツ！ と大きな音が響く。

「そう何度も食らわないっての」

「ちえっ、やっぱり私じゃ敵わないか」

苦々しい表情を作ると愁の向かい側にドカツと座る。

「どんどんあんたとの差が開いていくわね。昔は私の方が強かったのに」

「そりゃしかたないよ。俺は司書だしね」

「司書、か」

頬杖をついて愁が言った言葉を繰り返す。

「私も司書になっておけばよかったかな」

「どうしたんだよ急に」

「なんか最近さ、大学が急に狭く感じちゃう時があるのよね。そう感じるとき、霽月館を思い出すのよ。あそこはどんなに恵まれた環境だったんだろうか、ってね」

「そんなもんかな」

「そんなもんなの。だからさ、最近そう思うのよ。あんたみたいに外に出て暴れてなくても、研究職なんかもあるからね」

「まあ、そうだけだよ。母さんには話したの？」

「まだ。というか、自分でもどうしたいのか全然分かって無くて板挟み状態って感じかな」

寂しそくに微笑む絢香。そんな表情をする姉を愁は見たことが無かった。だからこそ、こういう時にどうすればいいのかも分からず、ただ黙っているしかなかった。

ほんの少しの沈黙。それが随分長く感じた。

「……………まっ、何とかなる、かな」

そう言つと勢いよく立ち上がり、愁の頭をくしゃくしゃとかき回すと「じゃあ、おやすみ」と言つて部屋に戻っていった。

「……………難しいね、こつこつなのって」

自分に言うように小さく呟くと、本を手にとって部屋に戻っていた。

翌日の昼休みの時間。屋上にはいつも以上に人が集まっていた。

「では……………どうぞ」

と、雄真が差し出してきたのは漆塗りに蒔絵で飾られた木製の重箱が五つほど。待っていましたとばかりに愁が蓋を開けると、そこには様々な料理が所狭しと敷き詰められていた。エビチリや青椒肉絲と言った手の込んだものや、出し巻き卵にマカロニサラダといったものまで、とにかく多種多様の料理がそこにあつた。

「おお凄いな」

「相変わらず凄いな、雄真くんは」

愁と桜花の賛辞。

「うわあっ！！ 槓人見てよこれ、私こんなに凄いの見たこと無いよ！」

「確かに……………この年で此処までの腕前。流石としか言いようが無いな」

葵と槓人の感嘆。

「……………」

「……………」

言葉も出ない小夜と愛美。

「うん。すっごく美味しいわね」

いつの間にか食していた菜月の感想。

「って、何一人だけ食べてるんですか！」

「だって早く食べないと冷めちゃうし。みんなも早く食べなきゃ」

言うや否や、再び食べ始める菜月。それを合図にしてか、愁たちもそれぞれ端を手に取り食べ始めた。

何故このようなことが行われているかということ、事の発端は昨日の昼食にあった。

偶然出会った愁一行と菜月一行。一緒に食べている時にどういった経緯からか料理の話になり、その時に桜花が

『そう言えば、雄真くんって料理が凄く上手なんですよ』

と言った事からその真偽を確かめるべく、昨日いなかった葵と植人も含めて郷の昼食全部を雄真が作って来るということになった。最初は愁と桜花も手伝うといったが

『いえ、一人で十分ですので大丈夫ですよ』

という言葉に押し切られ、結局雄真一人が作ることになったという訳である。

「うん美味しい。本当に相変わらずって感じだな」

「いえ、それほどのものでもないですよ。家にあった材料だけで間

に合わせたものですから」

「それでこの味が……感服いたしました」

思わず敬語になる菜月に雄真が慌てたように手を振る。

「な、菜月先輩。大袈裟ですよそんな。そんな大層なものじゃないんですから」

「なに言ってるの。こんなに美味しい料理が作れるなんて十分凄い事よ。誇ったって良いんだから」

「はあ……」

曖昧に頷く雄真。

そんな中で桜花、葵、愛美の三名は食べることに勤しみ、楨人はその様子を見て呆れ共あきらめともつかない表情をしていた。

そして、小夜は黙って食べながら、不意に

「霧月君!!」

真剣な、しかしほんのりと赤みがかかった顔で雄真を呼ぶ。

「は、はい! 为什么呢……」

急に名前を呼ばれたので少し焦る雄真。が、小夜はそんなのお構いなしに雄真に向かってこう言い放った。

「お願いです!! 私に料理を教えてください!!」  
「……えっ?」

何を言われたのか今一つ理解できなかったらしく、雄真らしくない間抜けな返事をした。

「えっと、だからその……私に料理を教えてください」

「ぼ、僕が、ですか」

「……うん」

ようやく言葉の意味が理解できた雄真。考えるような仕草をして、それから、

「……僕は基本的に家に帰ったらやらなければいけない事があります。ですから、殆ど時間がとれません。それでもいいですか？」

それが霧月館の館長職であることを小夜は知らない。が、それが大切なことということは顔を見ただけで分かった。

「それでも、いいです。その……霧月君に、教えて貰いたい」

顔を真っ赤にしながらも言い通した自分の気持ち。

「分かりました。微弱ではありますが、力になりますよ」

「あ、ありがとう……雄真君」

思い切って名前と呼んでみる小夜。が、そこは鋭い霧月雄真。ほんの少し驚いた顔を見ると、小さく微笑んで

「アノノト」アなごびあや、小夜ねる」

## 八話・ほんの少しの進展（後書き）

大変です……すごく大変です……。小説を書くことは簡単だけど、それを持続させることはとても難しいと、誰かが言っていた言葉を思い出します。

しかし、負けません。僕は書き続けます!!

てな感じで二章八話、どうでしたか？ なんだかまた「日常」に戻ってきているような気がします、次の話では「非日常」を書くつもりです。

投稿済みの話も結構修正が加えられているのがあります。それをしている、自分がまだまだ力不足という事を痛感します。ですが先程も言ったように、僕は負けません!!  
では、また次回お会いできたら。

## 九話：下校時の非日常

「それにしても、珍しい事もあるもんだな」

「？ 何がです？」

帰り道。今日は放課後に用事があるとかで桜花はまだ学校に残っており、今この場にいるのは愁と雄真の二人だけである。今日は久しぶりに雄真が休める日なので、どこにも寄らずまっすぐ帰る。

いつもの桜花とどこか様子がおかしかった様な気もしないでもなかったが、そこはあえて詮索せずに黙って帰る事に。

「女性恐怖症のお前があんな事を引き受けるなんて、とてもじゃないけど考えてなかったからな」

「女性恐怖症、という訳ではないんですけど……。ただ、女性に触れると恥ずかしいというかなんというか」

「似たようなもんだと思うけどな」

完全に否定しない、もとい出来ない雄真を見て小さく笑う愁。

いつの頃からかは忘れてしまったが、雄真は小さい頃から女性に触れるととんでもなく上がってしまう体質？ なのである。そんな所が女子の悪戯心をくすぐるのかどうなのか、わざと雄真に触ってくる事があるため色々と問題になった事もしばしば。

そんな大変な思いをしている雄真を、ほんの少し離れた所から愁は何もしないで笑って見ていたのだが。

「で、いったいどういう風の吹きまわしだ？」

「別に深い理由はありませんけど……。ただ、言うなら」

「言うなら？」

一拍置いて、雄真は言の葉を紡ぐ。

「自分でもよく分からないんですよ」

「……ホントに珍しいな」

ばつが悪そうな笑みを浮かべる雄真と、ほんの少し驚いた表情をしている愁。

少々気が弱い所もあるが、それでも自分の意見はしっかりと持ちそれを貫く雄真。そんな雄真が「自分でも分からない」なんて言うことに愁は驚きを隠せなかった。

「そんなに珍しいですか？」

「うん。まさに世界遺産級の珍しさだな」

「そこまですか……」

なんて会話をしている時、愁のポケットから携帯の電子音が鳴る。音が途中で止んだのでメールだということが分かる。愁は止まって携帯を取り出し、内容を確認する。

「えっと……絢香からだ」

「絢香さんですか？ 愁さんにメールなんて珍しいですね」

雄真の言うとおり、絢香が愁にメールを送ることは滅多にない。

喧嘩はしょっちゅうするが基本的には仲は良好な郷風姉弟。夕食を食べた後で話をしたりゲームをしたりとしているが、どう言う理由からか、こうした連絡のやり取りだけは殆どと言っていいほどない。

「なにになに……晩ご飯の材料を買ってきてくれ、だつてさ」

「割と普通の内容ですね」

「どんなことを期待してたよ……って、こ、これは……」

携帯のディスプレイを見ながら悲痛な叫びを上げる愁。雄真がそれを覗くように見てみると、そこにはこんな事が書かれていた。

『追伸 今日はお父さんたちが用事で出かけるから私たち二人だけね。それと、たまには私を作るから、下記に表示されている材料を買ってくるように。じゃあ、よろしく』

「…………雄真。どうやら今日は俺の命日らしい。あまりろくな働きも出来ないで死んでいくのは俺としても不本意だが、これもまた運命。どうか俺の立派な代理を見つけ出してくれ」  
「ええっ。ど、どうしたんですかいきなり」

内容を確認し終えた後の愁の顔は真っ青になっており、そこには何かを諦めたような、そんな感じも幾らか混ざっていた。

「だってさ……………絢姉だぜ。あの綾姉が料理なんて、危険にもほどがあるだろ」

「そう言われましても……………。そう言えば絢香さんが料理を所を見たことがないですね」

基本、郷凧家で料理をするのは愁、俊瑛、そして眞由莉の三人であり、俊瑛は店で、愁と眞由利が家で作る事になっている。そう言えばと雄真は思い返してみると、その中に絢香は含まれていない。郷凧家とは小さいころから親交がある雄真でも、絢香が料理をしたところを見た記憶がないのだ。

「そりゃあな。なんてったって絢姉の料理はカタストロフ並の威力があるからな」

「また分かる人しか分からない例えですね……………」

「それくらい破壊力が合つて尚且なおかつ微妙だということなのだよ雄真くん」

「そういうものなんですね。絢香さんの料理の腕前は……」

そんなやり取りをしながら歩いていると、前から一人のスーツ姿の男性が歩いてくる。ちょうど男性とぶつかる所を歩いていた雄真は愁の後ろへと移る。

その男性は少し、というか結構変わっていた。鞆も何も持たず、スーツは所々よれよれでしかも多く、足取りが右に行ったり左に行ったりと、どこかおぼつかない。

「……あの男の人、大丈夫でしょうか？」

「んー、何か疲れてるって感じだな。まあ、今はサラリーマンにとつては辛いご時世だからな」

何か変だなと思いつつも、そのまま二人は通り過ぎようとしていた。

「……かはっ」

が、出来なかった。

「えっ？」

雄真が驚きの声を上げたとき男性は突然立ち止り、苦しそうに喉を詰まらせて顔を上に向けている。

「ちよつ、大丈夫ですか!？」

そう呼びかけてみるものの、男性からの反応は無い。目は焦点が定まらないのか右往左往していて口を大きく開けて低く唸っている。手や足が次第に激しく痙攣したように震え、一見しただけで何か異常が起こっていることがすぐに分かる。

「下がれ、雄真！」

愁の厳しい一声によりハツとした雄真は慌てて後ろに下がる。愁の表情は一変して厳しいものになっていた。

「愁さん、これって」

「……ああ。もしかして、だな」

愁がそう呟いた直後、男の体が突然、宙に浮かびあがった。

それは舞台か何かのショーで使われているワイヤーで吊り上げられているような感じではあるが、もちろんワイヤーなどではなく何もなしに突然宙に浮かんだ。幸いにもと言うべきか、この道にいるのは愁たちだけであり他の通行人などの姿は見えない。

「………があつ!！」

大きく激しい咆哮。

その瞬間、男の背中からまるで蛹まゆから成虫に移る時のように黒い何か もとい化け物が出てきた。

体長は二メートルとちよつと言った所だろうか。前身は夜の闇をそのまま取って塗りつぶしたような黒色であり、一見すると想像と勘違いしてしまうが明らか違いがあった。その体はまるで黒い

天幕で包みこまれていているようであり、想影のよりのつぺらとして  
いなく細部に至るまで人の姿に酷似している。

だが、そのどれよりも一番目を引くのはその巨大な口。人の倍は  
あると言ってもまかり通るそれは、これの凶暴さ、獰猛さを象徴し  
ているかのようである。

それが完全に出てくると、男はまるで人形劇で使われている人形  
の糸がプツリと切れたように、だらんとしてその場に崩れるように  
倒れた。

「…………ふむ、やはりこの男では役不足だったか。だがまあ、  
得られる者は得られたから良しとするか」

黒い化け物口から呟くように漏れ出した言葉。それは中年男性の  
渋く低い声で、何故だろうかその姿ととても合っていた。

「さて、次の宿り主を見つけるとするか……………」

そう言っこの場から去ろうとした刹那、

「悪いけど、そう言う訳にもいかないな」

いつの間にか愁が、その化け物の眼前に飛び出るように迫ってお  
り、そして、

バーンッ！！

化け物の頭部を思い切り横から殴りつけていた。

あまりにも突然の事に化け物は何の対応も出来ず横に吹っ飛ばされ、

傍にあったコンクリートの壁に勢いよくぶつかり、その場に崩れる。ぶつかったその壁は一部がそこだけ爆発したかのように粉々になっている。

愁はその場に綺麗に着地し、化物の方を見る。その右手には先程までには無かったある物が握られていた。

「愁さん……学校に十手<sup>じゅうて</sup>なんて持ち歩いていたんですか？」

ほんの少し呆れるような雄真の声。愁はそっちの方を見ずに返答する。

「流石に刀を竹刀と偽って持ち歩くのはキツイけどな。十手だったら鞆とか袖の下に入れておくだけでいいからな」

それは時代劇などで出てくる岡っ引きが使用している十手と呼ばれる武器で、化物相手にはいまいち心もとなない物ではあるが、愁が使うと刀並の威力をはつきし、刀を持っていないこういった状況で大いに愁の相棒となっている。

「それにしても、下校途中でとんでもない物と出くわしたな。流石にこれは非日常すぎる」

「まあ、今に始まった事ではないとはいえ、確かにこれは酷いですね」

そう言った時、崩れていた化物がゆっくりと、頭や腕を垂らしたまま立ちあがる。

「……………」

愁と雄真がそれを見ている中、怪物は突然、垂らしていた頭をぐ

わんと上げる。

その表情は、明らかに敵意で満ち溢れていた。

## 九話・下校時の非日常（後書き）

お久しぶりです！　そして長らくお待たせしました！

何故にここまでかかったのか、それには言い訳をすれば色々あるんですが、投稿がここまで伸びるとは……申し訳ないです本当に。

一応、活動報告にも書くので、興味がある方はそちらの方もぞいてみてください。

それでは、また次回。

## 十話：下校時の戦い（1）

血を連想させるような紅い双方の瞳が二人を射抜くように見つめている。

それは見ているだけで威圧され、狂信を感じるものだったが、それが向けられている当の二人は何の事なくそれを見ていた。

この通りには三人以外誰もいない。不気味なほどの静けさを漂わせているが、二人の気持ちは目の前にいる化け物に向かっているためそれを気にはしていなかった。

「……意外だな。何故この通りに人がいるのやら」

化け物の疑問。少し首を傾げるその動作さえ、二人の内どちらを食らおうかと物色している獣の動作に見える。

「何故って言われてもな……普通に歩いてきた、としか言えないんだけど。なあ雄真」

「ええ。歩いている途中、特に何も無かった様な気がしましたが」

二人のその言葉に化け物は更に首を傾げる。

「何も無かった……？ 人避けの結界を周辺に張っておいたはずだが。どういう事だ？」

化け物の言葉でようやくこの静けさに合点が行った二人。化け物が張った結界のせいで不自然なほど人がいなかったのだ。

基本、一般の人が術式を認識することは殆どなく、あたかも自然にその効果を受け入れる。だが、術式に長けている者であれば、そ

れを認識し、打ち破る事が出来る。

とはいえ、先程から特に何も感じていなかった二人。愁はともかく、雄真の場合は術式に長けているので感じないという事は殆どない。そういう場合は、術者がよほど強い力を持っているか。もしくは、

「多分ですけど、貴方が張った結界はそれほど強いという訳ではなさそうですね」

何故か複雑そうな顔をする雄真。

たとえ相手が的であろうと何だろうと、誰かを馬鹿にするような言葉を言うのは躊躇っている様子。

しかし、それを聞いた愁は少し呆れた表情で化け物を見る。

「うわっ……雄真が感知できないほど低いって、どんだけだよ」

先程までの緊張感は何処へやら、化け物に憐れむような視線を送る愁。

その視線が送られている化け物は、

「……」

ただ黙って二人を見ているだけだった。

双方の瞳は相変わらずギラギラと輝き、殺気を二人（特に愁に）向けている。それ以外は特にこれといった動きをせず、じっとそこに立っている。

どうしたものかと雄真は思ったが、その時、先程化け物が出てきた時から倒れている男の方に視線が向く。

男はピクリとも動かさず、ただそこに倒れこんでいた。顔は痩せこ

け生気が感じられず、生きているのに死んでいる、そんな比喻がとも似合っていた。呼吸一つさえしていないように見えるのは気のせいだと思いたい。

(あのまま放置しておく危険だ……。何とかしないと)

愁を見てみると、分かっている、と相手に気付かれないように小さく頷く。

そして、それが合図かのように二人は走り出した。

愁は化け物に向かって。雄真は男に向かって。

化け物はそれを待っていたかのように二人を迎い入れる。

雄真が男に近づくのを阻止しようとして前に立ち塞がる。が、雄真は足を止めない。むしろ最初より加速し、二人はぶつかろうとしていた。

「っ！」

突然、雄真は見を落とし、滑り込むように化け物の下を擦り抜ける。その動きに一瞬反応が遅れた化け物が雄真を再び阻止しようとして手を伸ばす。

パンツ！！

強い威力で何かが当たる音。

が、それは雄真を阻止した音ではなく。

化け物は雄真の方に注意が向いたせいで愁の存在を数秒だけ忘れており、それが仇となり十手によって防がれる。

左下から右上に弧を描くように難いだ愁は、その勢いに身を任せて体を一回転。そこから回し蹴りを化け物の腹部に見舞う。

ボンッ！ と強い音を発し、化け物は再び吹き飛ばされる。が、

今度はそのまま倒れずくりとこちらも一回転し上手く受け身をと  
り、二人を見る。

その間に雄真は男を担いで他の場所に移動している最中であり、  
愁に至つては化け物目がけて突つ走っている最中であつた。

「ハッ！」

短い掛け声と共に薙かれる十手。化け物はそれを左腕で防ぐと右  
手の鋭い爪を愁に向かつて振るう。それを右に少し跳躍して避け、  
十手による追撃。それもまた左腕で防ぎ、今度は右足による蹴り。  
愁はそれをバックステップで回避。地面に足がついた反動を利用し  
て追撃。あまりにも早い突に一瞬反応が遅れ、右腹部にもろに当た  
る。

「グウッ」

呻き声を漏らすも耐える。愁は更に追撃しようと十手を動かす。  
が、そこで何を思ったのか、追撃を止めて再びバックステップ。

刹那。愁の体が合った所に何かが振るわれる。そのまま突つ込ん  
でいたら間違はなく、その餌食となつていた。

「……………勘弁甚だしいな」

嘆息する愁の目の前には、いつの間にか背中から細い腕のような  
物を幾つも生やしている化け物の姿だつた。

「全く、こつちは足も含めて四本しかないってのに、そう言つのは  
卑怯つてもんじゃないの？」

こんな金箔とした雰囲気の中、緊張感のない一言。それを本当に

思っている所が凄いのやらどうなのやら。

「……こうでもしないと、貴殿に勝てないと思ったからだが、どうやらこれもあまり効果がないようだ」

此処に来てようやく一言発した化け物。その声は、人間で言う所の中年男性を思わせる声であるが、見た目のせいどうなのか、いまいち判断がつかない。

「貴殿つて、俺はそんな尊敬語が似合う人間じゃないと思うんだけど」

「そうかな。私は今日という日ほどついていないと思うよ。まさか、こんな町の道で【鎮魂の諷剣聖】に出くわすなんてな」

「うわっ、それ！ その呼び名！ それ言うの止めてくれよ。それこそ似合わないってのに……」

愁は心底嫌そうな顔を作る。それに気を良くしたのか、化け物が高い声で笑う。

郷風家は、霽月館が出来た当初から代々、司書の役割を子の代へと受け継いでいる家であり、同時に剣聖の一門でもある。必ずと言っていいほど、神がかり的な剣舞を引き継いでおり、その名は書籍館同盟だけでなく裏側の世界に広まっている。

郷風の剣舞を打ち破る者無し。最強の剣聖一門、と。

そしていつの間にもやら、郷風の中で剣舞を受け継いだものに付けられる二つ名と言う物が生まれていた。

それが、【鎮魂の諷剣聖】。

相手を倒すのではなく、鎮める。そして楔ぐ。穢れを洗い流し、殺すのではなく救う剣と呼ばれるようになっていた。

が、言われている本人からすれば、それほどはた迷惑な話は無く。愁はその名を聞きたび、「そんな恥ずかしい名前はやめてくれ！」

と何度も言っているが、それが消えてなくなるという事はこの先無  
いだらうと思われる。

「恥ずかしい、みたいだな。中々面白いな」

「くそ……あんだ絶対にぶっ叩いてやる。絶対に」

物騒な事を言っている者の、顔はその名前で呼ばれて真っ赤つか。  
普段は見られない一面を見ている化け物は更に笑い声を高める。

「愁さん！ 大丈夫……そうすね」

男を安全な場所に置いてきた雄真が戻ってくると、この場の妙な  
雰囲気戸惑う。まあ無理もない。緊張と言う糸が張り巡らされた  
空気だったにも関わらず、それがいつの間やら解けてしまってい  
るのだから。

「……その少年。貴殿が霧月館館長、霧月雄真氏で間違  
ないだろうか？」

「へっ？ ええ、そうですけど」

突然の質問に少し戸惑いながらもきつちりと返答する雄真。

その答えを聞いた化け物は少しの間、顔を俯かせて思索する。そ  
の間に雄真は愁の元へと行く。

「愁さん。あれはやっぱり……」

「ああ、戦ってみて分かったよ。やっぱり【咎人】フォルタだな。にしても  
あの外見は一体……」

【咎人】フォルタという言葉に渋面を作る雄真。それを発した愁もやりきれ  
ないと言った表情を作っている。

「ま、だからって俺らがやる事は変わらないと思っけどな」

そう言うと、手に持つ十手を握り直し再び化け物に視線を向ける。普段の愁が見せている目とは違う、戦いの目。

そこには鋭さや冷たさが宿ってはいるが、やはりその中にも優しさがある訳で。

雄真はそれを見ていつも思う。一体いつになったら、あのような目を自分も持てるようになるのかと。

昔からの目標と超えるべき壁は変わっていない。が、更に厚みは増した。愁と言う名前の壁が今は新たに出来ている。

いつかそれを超えたい。いや、絶対に超す。

「ですね。どうやらあちらの方も準備万端みたいですし」

思索を止めていた化け物は戦いの構えをとっている。それは野生の獣の如く、獰猛で、好戦的な構え。

「さて、始めましょうか」

雄真のその言葉により、第二ラウンドが始まった。

十話：下校時の戦い（1）（後書き）

久しぶりの更新です。最近編集も遅れてちよつとまずいと思っています……。

今回は久方ぶりの戦闘シーンです。どうだったでしょうか？  
感想、指摘など、どんどん募集しています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6116h/>

---

郷風愁の日常的な非日常

2010年10月10日12時00分発行